敷島町文化財調査報告　第21集
（山梨県）

村　続　遺　跡

大型店舗建設工事に伴う奈良・平安時代遺跡の発掘調査報告書

2004

敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会
株式会社　コメリ

敷島町文化財調査報告　第21集
（山梨県）

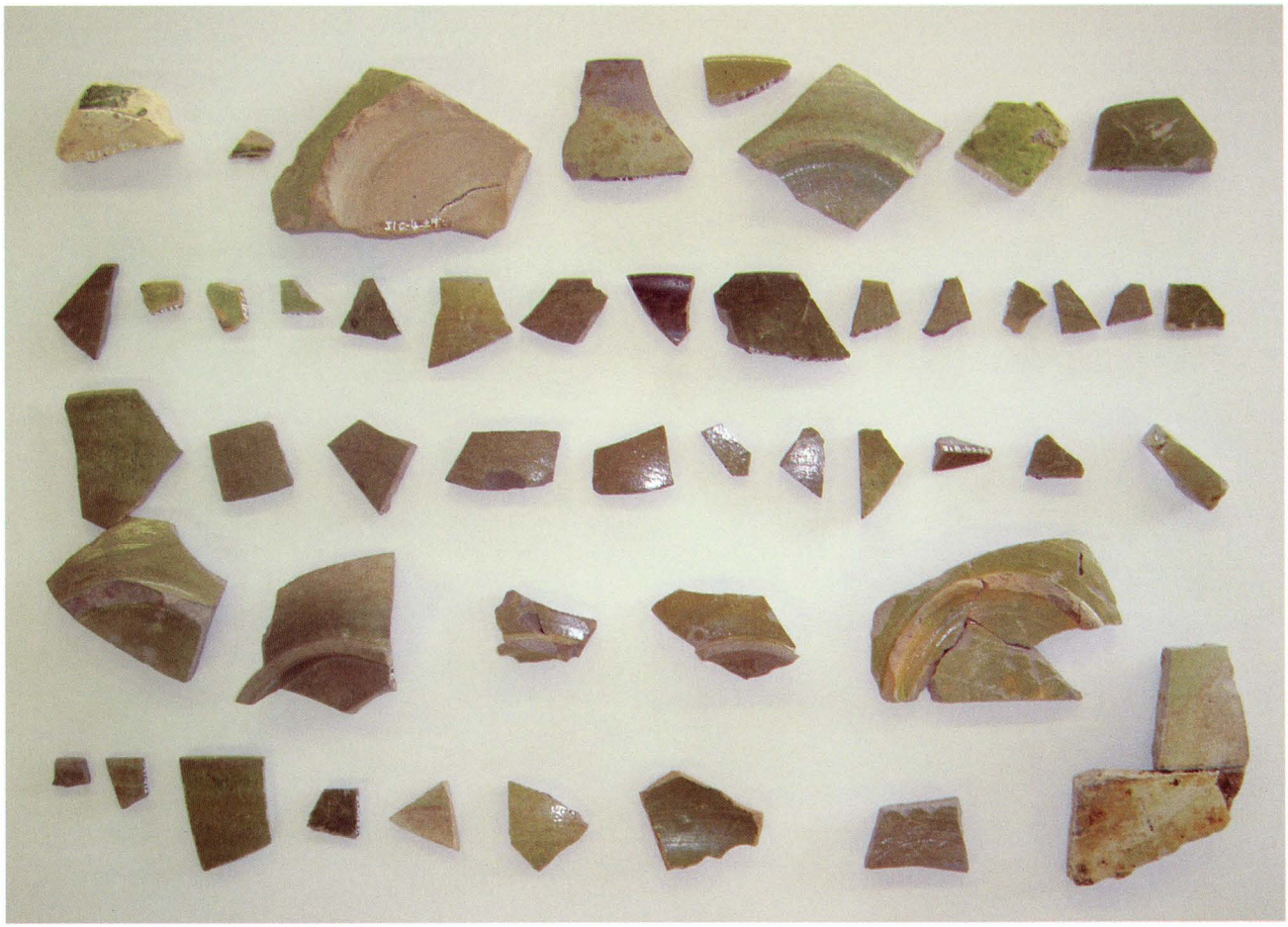
村　続　遺　跡

大型店舗建設工事に伴う奈良・平安時代遺跡の発掘調査報告書

2004

敷島町教育委員会
敷島町文化財調査会
株式会社　コメリ

村続遺跡第Ⅰ次調査区全景



1．緑釉陶器

2．貿易陶磁器－白磁（皿 XI 類他）・青白磁（合子蓋）・青磁・天目－

3．銅製仏像の台座　（14 号住居跡出土）

序　　文

敷島町は、甲府盆地の北西部に位置し、南北に細長く北は茅ヶ岳や太刀岡山などからなる山間地域で、盆地に面した南部は荒川の扇状地形となっております。最近では、南部地域を中心に年々人口が増えてきており、これに比例するようにとくに町の南部では開発が多く、緊急となる埋蔵文化財の発掘調査が頻繁に行われてきております。

本町は、すでに南側の扇状地上に多くの遺跡の存在が確認され、大昔から人々が生活するのに適した環境であったことが窺えます。

これまでに多くの遺跡を調査してきましたが、敷島町を代表する遺跡として弥生時代の大きな集落跡と墓域がセットで発見された『金の尾遺跡』や白鳳時代(7 世紀後半）まで遡るとされ、県内でも一番古い瓦窯となる『天狗沢瓦窯跡』などが上げられます。

さらに、最近の調査では、主に古墳時代後半から平安時代末頃までを通じて継続的に営まれた『松ノ尾遺跡』の存在が明らかとなりました。大量の遺物の中には、瓦、円面硯、帯金具、中国産陶磁器などのほか、平安時代末頃とみられる金銅製小仏像が 2 躯発見されるなど、甲斐国巨麻郡における重要な地域の一つではなかったかと考えられております。

本書は、平成 14 年に大型店舗の開発に伴いおこなわれた敷島町島上条に所在する『村続遺跡』の発掘調査報告をまとめたものです。

調査の結果、住居跡が計 36 軒確認され、およそ 8～12 世紀の奈良・平安時代をとおして長い期間に営まれた集落跡の一角が発見されました。また、数多くの緑釉陶器や中国産の陶磁器類などのほか、住居跡からは銅製小仏像の台座が出土し、上述した『松ノ尾遺跡』と並んで本地域においてかなり特殊な遺跡であることが明らかとなり、今回ここに報告する運びとなりました。

本報告書が、わが町、わが郷土の歴史研究の一助となるとともに、地域文化の発展に寄与できるよう切に願っております。

これからも、後世の人々のために調査・記録を精密に行い、さらに教育普及へと役立てていけるよう努力してまいります。

最後に、株式会社コメリ及び地権者の文化財保護に対する深いご理解の下、調査が実施できましたことに感謝するとともに、ご指導、ご協力いただきました関係各位に心より厚く御礼申し上げます。

平成 16 年 4 月

敷島町教育委員会

教育長　山　口　正　智

例　言

1．本報告書は、山梨県中巨摩郡敷島町島上条地区に所在する村続遺跡の発掘調査報告書である。

2．本調査は、株式会社コメリの店舗建設に伴って実施した発掘調査である。発掘調査から報告書刊行までの経費は株式会社コメリが負担した。

3．発掘調査は、平成13年４月９日～同年６月８日までの約２ヶ月間、また平成14年10月から平成16年４月にかけて断続的に整理調査をおこなった。

4．調査組織は次のとおりである。

調査指導・主管	敷島町教育委員会
調査主体者	敷島町文化財調査会
調査事務局	敷島町文化財調査会
調査指導担当者	大嶌正之（敷島町教育委員会生涯教育課社会教育係副主査） 小坂隆司（敷島町教育委員会生涯教育課社会教育係嘱託）

5．本書の執筆・編集および遺物の写真撮影は小坂が担当し、遺構の撮影は大嶌と小坂で分担した。
なお、瓦の胎土分析は帝京大学山梨文化財研究所に委託し、その結果を第３章にて河西　学がまとめた。

6．発掘調査と報告書作成にあたり、次の方々よりご教示を賜った。ここにご芳名を記し、感謝申し上げる。
小野正敏（国立歴史民俗博物館）、萩原三雄、平野　修、櫛原功一（帝京大学山梨文化財研究所）
中込司朗、坂本美夫、羽中田壯雄、飯野正仁、畑　大介（敷島町文化財審議会）
百瀬正恒（京都市埋蔵文化財研究所）、八重樫忠郎（平泉町教育委員会）、大庭康時（福岡市教育委員会）
合田芳正（中央大学）、手塚直樹（青山学院大学）、小林公治（仮称九州国立博物館準備室）
猪股喜彦、瀬田正明（一宮町教育委員会）、佐野　隆（明野村教育委員会）、山下孝司、閏間俊明（韮崎市教育委員会）
田中大輔、斎藤秀樹、保坂太一（南アルプス市教育委員会）　（以上敬称略、順不同）

7．発掘調査ならびに整理作業参加者（敬称略）　青山制子、飯室久美恵、石川弘美、長田由美子、小林明美
関本芳子、高添美智子、堤　吉彦、保坂広昭、保延　勇、望月典子

8．本遺跡の出土遺物および調査で得たすべての記録は一括して敷島町教育委員会に保管してある。

凡　例

1．遺構挿図中、— — — —は硬化面の範囲、▒は焼土を表示している。
2．遺物挿図中、断面白抜きは土師器・土師質土器、黒塗りは須恵器・瓦、▒は陶器類、▒は磁器を表す。
また、土器表面の▒は黒色処理を表し、▒は擦り面、▒は朱墨痕の範囲を示した。
2．遺構内出土遺物は４桁で表し、前二桁は住居№、後２桁は遺構内の遺物ナンバーを表現している。
3．観察表中の計測値（　）は推定値である。　（例）　０６　０８
4．図版中、遺構と遺物の縮尺は統一されていない。　住居№　遺物№

本　文　目　次

序　文
例　言・凡　例

第１章　遺跡をとりまく環境
１．遺跡の立地と環境・・・・・・・・・・1
２．周辺遺跡と歴史的背景・・・・・・・1

第２章　遺構と遺物
１．住居跡と出土遺物・・・・・・・・4
２．その他の遺構・・・・・・・・・・31

第３章　村続遺跡出土瓦の胎土分析・・・・37

第４章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・40

挿　図　目　次

第１図　村続遺跡と周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・2
第２図　村続遺跡と第Ⅰ次調査区・・・・・・・・・・・3
第３図　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第４～11図　住居跡(1)～(8)・・・・・・・・・・・・・12～19
第12～19図　住居跡出土遺物(1)～(8)・・・・・・・・20～27
第20図　土坑・ピット分布図・・・・・・・・・・・・・31
第21図　土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
第22～24図　遺構外出土の遺物(1)～(3)・・・・・・・33～35

表　目　次

第１～４表　住居跡出土遺物一覧(1)～(４)・・・・・・28～30
第５表　住居跡出土石器一覧・・・・・・・・・・・・・30
第６表　住居跡出土鉄製品一覧・・・・・・・・・・・・30
第７表　住居跡出土銅製品一覧・・・・・・・・・・・・30
第８表　土坑一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
第９表　ピット一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・31
第10～12表　遺構外出土の遺物一覧(1)～(３)・・・・・35・36

図　版　目　次

図版１　遺跡全景と１・２・４号住居跡
図版２　３・５・６・８号住居跡
図版３　９・11～14号住居跡
図版４　17～20・22・23号住居跡
図版５　21・25～28・33・34号住居跡
図版６　29～32・35～37号住居跡
図版７　土坑（２・３・６・８・９・12・13・15号）
図版８　各時期の住居跡出土遺物
図版９　住居跡と遺構外出土遺物
図版10　線刻・ヘラ書き・墨書土器

第１章　遺跡をとりまく環境

１．遺跡の立地と環境（第１図）

敷島町が所在する甲府盆地の北西部は、奥秩父の金峰山を源とし南流する荒川によって開析された北から南へと緩やかに傾斜した扇状地形を成している。この西側には、北西部にそびえる茅ヶ岳の裾部を形成するなだらかな赤坂台地が貢川と釜無川に挟まれるように南北に張り出して伸びており、JR 中央線付近において終息する。一方、北側はこの扇状地形の背後を担うように東西に大きく片山が跨り、さらに東側には千代田湖を挟んで尾根筋を南側へと進むと舌状に張り出した湯村山がある。

このように甲府盆地の北西部は、東西北部の三方が台地と山々によって「コ」字状に取り囲まれ、盆地に向かって南向きに開口し、まるで天然の要害を形成するような特殊な地形を織り成している。

このうち荒川の右岸に位置する敷島町は、町域は南北約 17 km、東西約 4 km と南北に細長い町である。

本町は大きく北部の山間地帯と南部の盆地部におおよそ大別されるが、町域のほぼ 8～9 割は標高 1,704 m を測る茅ヶ岳をはじめとする曲岳、太刀岡山などの山岳地帯や一部の丘陵からなっている。

一方、町南部は上述した荒川による扇状地形で、東はちょうど荒川右岸に面し、西は貢川を境として東西を河川で挟まれた南北に細長い格好を呈し、盆地北西部の一部に相当する。

以上のように、甲府盆地北西部は中央に荒川が南流し、東西北部の三方を台地と丘陵により囲まれた空間が形成され、荒川右岸の本町ではこのような地形をもとに様々な歴史的背景が垣間みられる。

２．周辺遺跡と歴史的背景（第１図）

甲府盆地の北西部では、古墳時代の 6 世紀中頃から横穴式石室を有する大型の後期古墳が築造されるようになる。中でも、荒川左岸に位置する甲府市湯村の万寿森古墳(4)や県内第 2 位の石室規模を誇る加牟那塚古墳(5)の存在からこの頃本地域が県内でもかなり大きな勢力拠点となっていたことが窺える。

さらに、6 世紀末～7 世紀前半には本町南部の周囲を群集墳（千塚・山宮古墳群－甲府市、赤坂台古墳群－双葉・竜王など）が取り巻くようになる（第 1 図●印）。これまでの調査で、本町における古墳時代後期集落跡を概観すると、松ノ尾遺跡⑤に偏在して住居跡や土坑、掘立柱建物跡などが確認されている。

盆地北西部のこうした勢力の繁栄を背景とし、古墳時代の終わり頃には通称敷島台地の南西に天狗沢瓦窯(61)が操業を開始するようになる。これは県内最古の瓦窯で、7 世紀後半（白鳳期）とみられているが、この瓦窯跡で焼かれ、その瓦が供給された古代寺院は残念ながらまだ発見されていない。

奈良・平安時代になると甲斐国は 4 つの郡に分かれており、当時本町は西に位置する「巨麻郡」に属する。このころ、町の南部において該期の遺構が前代に比べさらに数多く発見されるようになってくる。

これまでに、奈良時代から平安時代初め頃にかけては、まだ発見されている遺構は数少ないが、平安時代中頃～末頃にかけては急激に遺構や遺物の数量も増加する傾向にある。

中でも松ノ尾遺跡⑤では、これまでの調査において住居跡 37 軒と竪穴状遺構 10 基が確認され、膨大な量の土器、須恵器、灰釉陶器をはじめとし、陶磁器類、鍛冶関連遺物や鉄・銅製品などのほか、墨書土器や円面硯(4 個体分の破片)、腰帯（鉄製鉸具 2 点、銅製蛇尾 1 点）や金銅製小仏像 2 躯などが出土している。

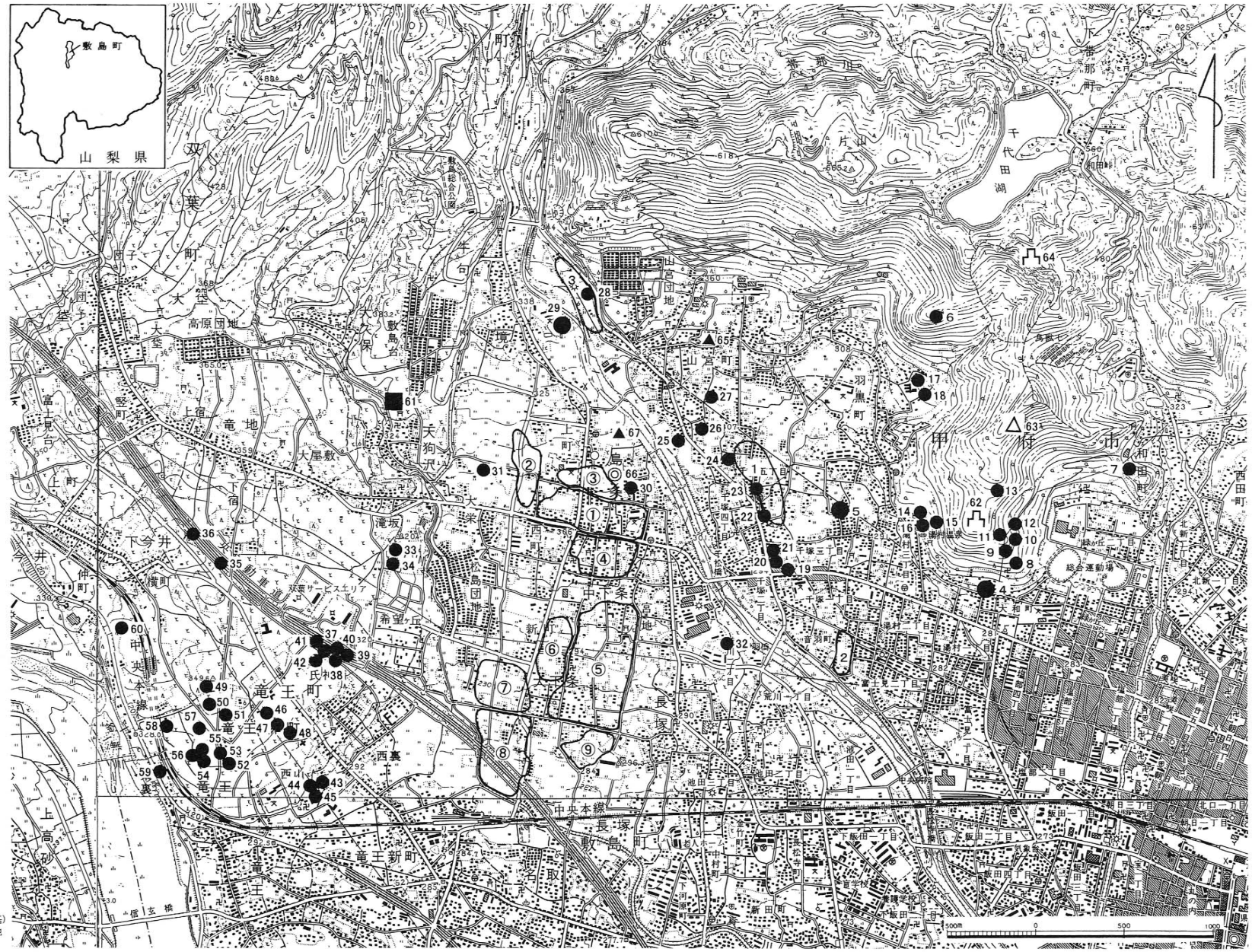
今回報告する村続遺跡①は、荒川によって形成された南北に延びる標高 320 m の微高地上に立地する。

遺跡の東側には荒川が南流し、南には旧「穂坂路」が接している。「穂坂路」は、少なくとも中世には、甲斐と信州を繋ぐ主要道であったとみられているが、古代まで遡り得るものであったかは明らかでない。

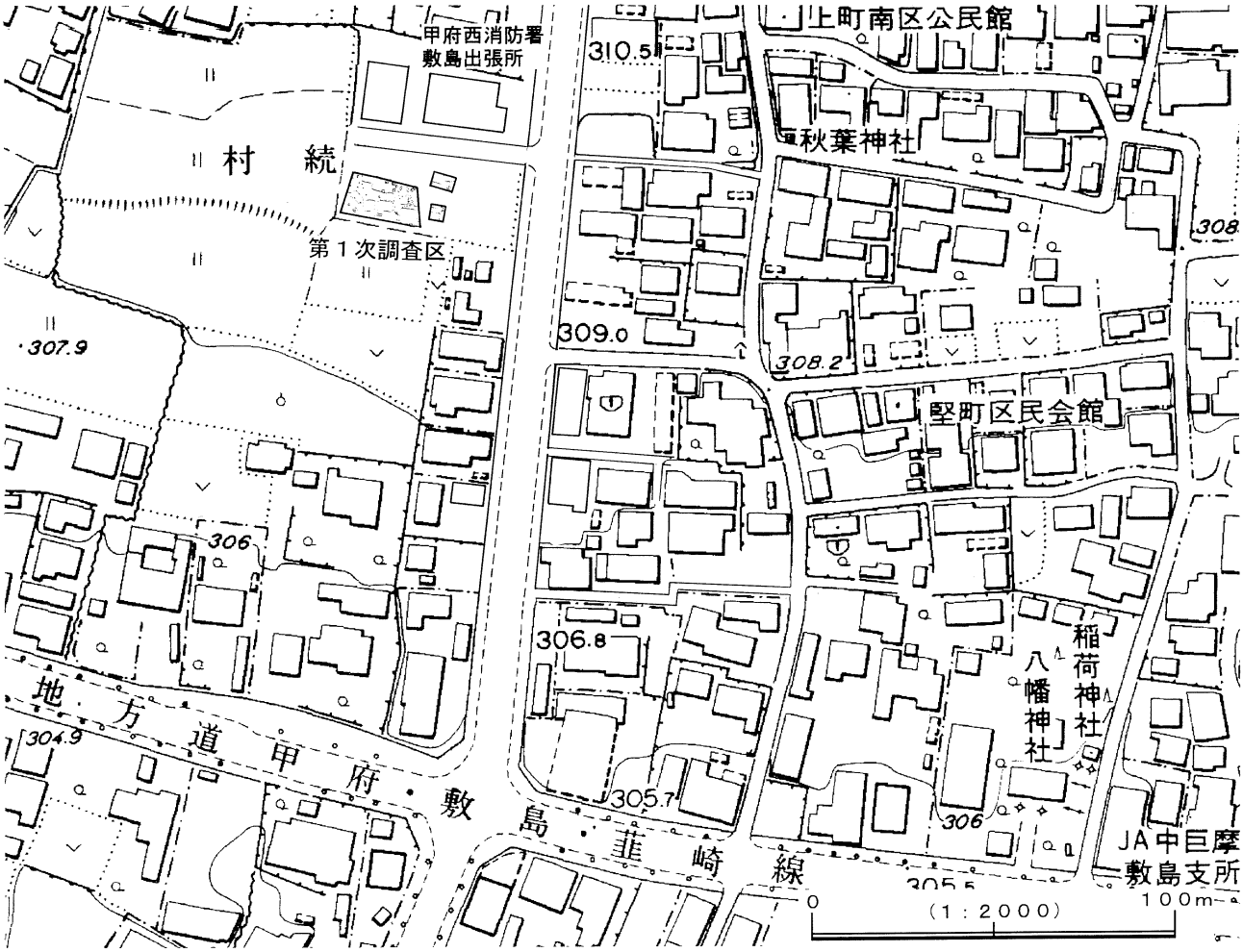
平安時代の食膳具に注目すると、巨麻郡域の遺跡からは信州から搬入されたとみられる物が県内でも比較的多く出土する傾向が指摘されており、本遺跡も同様に地理的にみても当時信州を縦断する公的官道であった「東山道」から多くの物資や情報が往来してきたことであろう。

① 村続
② 原腰
③ 山宮地
④ 下動ノ木
⑤ 松ノ尾
⑥ 三昧堂
⑦ 御岳田
⑧ 金の尾
⑨ 末法

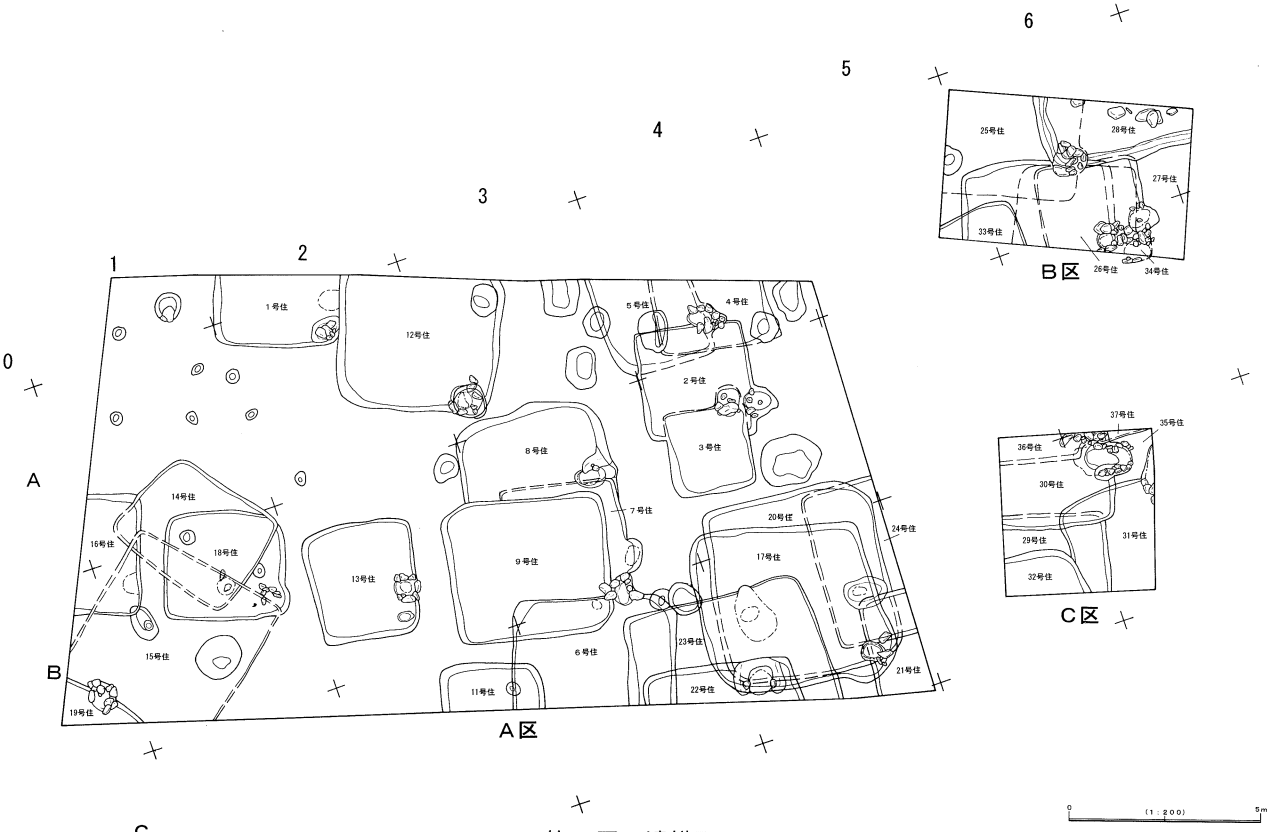
1 榎田
2 音羽
3 米草
4 万寿森古墳
5 加牟那塚古墳
6 おてんぐさん古墳
7 三光寺山古墳
8 湯村山１号古墳
9 湯村山２号古墳
10 湯村山３号古墳
11 湯村山４号古墳
12 湯村山５号古墳
13 湯村山６号古墳
14 大平１号古墳
15 大平２号古墳
16 塩沢寺裏無名墳
17 大塚古墳
18 無名塚古墳
19 薬師塚古墳
20 証文塚古墳
21 鳳塚古墳
22 猪塚古墳
23 無名２号墳
24 子泣塚古墳
25 無名１号墳
26 天神塚古墳
27 天塚古墳
28 米草古墳
29 大塚古墳
30 大庭古墳
31 狐塚古墳（敷島町）
32 穴場古墳
33 双葉１号墳
34 往生塚古墳
35 双葉２号墳
36 狐塚古墳（双葉町）
37 竜王１号墳
38 竜王２号墳
39 竜王３号墳
40 二ツ塚１号墳
41 二ツ塚２号墳
42 へび塚
43 西山１号墳
44 西山２号墳
45 西山３号墳
46 狐塚１号墳
47 狐塚２号墳
48 狐塚３号墳
49 中秋塚
50 丸山古墳
51 四ツ石塚
52 形部塚１号墳
53 形部塚２号墳
54 両目塚１号墳
55 両目塚２号墳
56 両目塚３号墳
57 両目塚４号墳
58 両目塚５号墳
59 片瀬塚
60 双葉３号墳
61 天狗沢瓦窯
62 湯村山城
63 法泉寺山烽火台
64 和田城山
65 山之神遺跡（五輪搭１基）
66 土屋惣蔵昌恒館跡推定地
67 慈徳院五輪搭



第１図　村続遺跡と周辺の遺跡



第２図　村続遺跡と第Ⅰ次調査区（1:2000）



第３図　遺構配置図

第２章　遺構と遺物

今回の調査は、調査面積が約 320 ㎡において奈良・平安時代の住居跡計 36 軒が確認された（第３図）。

その分布は、調査区の東側へと向かって住居跡の密度が高かくなるようで、しかも比較的８・９世紀代の古い時期のものが東側に偏在している傾向が窺われた。

1. 住居跡と出土遺物（第 4～19 図、第 1～7 表、図版 1～6・8・9）

１号住居跡（第４・12 図、図版 1－2）

調査区ＡのＯ・Ａ－２グリッドに位置する。

住居跡北側は調査区外にあり、また西側の一部は 12 号住居跡に切られている。規模は東西約 3.3 m、確認された南北は約 1.9 m を測る。壁は緩やかに立ち上がり深さ 19 cm ある。

12 号住居跡によって切られた東壁には、50×55 cm の範囲で焼土のまとまりが確認され、カマド跡が存在した可能性が考えられる。

また、この焼土跡から住居跡の中央に向かって、硬く踏みしまった床面が広い範囲にわたり展開していた。

また、南東隅部には 90×70 cm の楕円形を呈する深さ 6 cm の土坑があり、15～35 cm 大の石が詰っていた。

遺物は、細片が多く坏 0101、0102 などがある。

２号住居跡（第４・12 図、図版 1－4・5）

調査区ＡのＡ・Ｂ－４グリッドに位置する。

住居跡の北側は４・５号住居跡に、南側は３号住居跡によって切られている。規模は東西約 3.0 m、南北約 3.0 m のほぼ正方形を呈する。確認面からの深さは約 40 cm を測り、外へ直線的に傾きながら立ち上がる。

カマドは、東壁の南側に設けられており、長軸約 90 cm、短軸約 85 cm を測る。燃焼部とみられるカマド中央の底部には焼土と炭化物が充満しており、その中央には支柱石とみられる長い石が直立していた。

遺物は、放射状暗文を施した坏 0201～0203、渦巻状暗文の皿 0204・0205 などが出土している。

３号住居跡（第４・12 図、図版 2－1・2）

調査区ＡのＢ－４グリッドに位置する。

２号住居跡と重複し、これを切っている。規模は東西約 2.15 m、南北約 2.2 m とやや小型でほとんど正方形にちかい形態を呈する。確認面からの深さは約 40 ㎝を測り、しっかりとした掘り込みを有する。

カマドは、北壁の東側隅にあり、長軸約 80 cm、短軸約 65 cm を測る。カマド正面の東西には 25～30 cm 大の扁平大型の石がそれぞれ１個づつ直立し、さらにこれら両袖の石で支えられた天井石には二等辺三角形状の大型の石が使われていた。

遺物は、放射状暗文の坏 0301・0302、放射状暗文の皿 0303、渦巻状暗文の皿 0304、削り出し高台坏 0305 のほか、内面底部に鉄滓が溶着し、外面に油玉の付着した坩堝に転用されたとみられる削り出し高台坏 0306 などが出土している。

４号住居跡（第４・12・19 図、図版 1－3）

調査区ＡのＡ－４グリッドに位置する。

２・５号の２軒の住居跡と重複しており、２号住居跡を切っているが、５号住居跡によって切られている。また、北半部は調査区外となっている。

規模は、５号住居跡によって切られているため東西は判然としないがおよそ 3.0 m を測るとみられ、南北は確認可能な範囲で約 1.8 m を測り、方形を呈すると考えられる。確認面からの深さ 32 cm あり、壁は緩やかに立ち上がっている。

確認された範囲内ではカマド等の施設はみられない。

遺物は、放射状暗文の坏 0401・0402、渦巻状暗文の皿 0403 のほか、須恵器の胴部を再利用した転用硯 0404 がある。

５号住居跡（第４・12 図、図版 2－3・4）

調査区ＡのＡ－３・４グリッドに位置している。

２・４号住居跡と重複して両住居跡を切っている。また、北側は調査区外となっており不明である。

規模は、確認されたカマドの位置関係から東西約 2.7 m、南北は確認できる範囲で 2.8 m ある。そし

て、確認面からの深さは28 cmあり、壁は緩やかに立ち上がる。

カマドは東壁の南寄りにあり、長軸約105 cm、短軸約90 cmを測る。15～30 cm大ほどの石が組み上げられていた。そして、カマド正面の南北の位置には袖石として大型の長い石が直立したまま残存していた。

カマド内には焼土と炭化物が良好に遺存していた。

遺物は、坏0501・0502、内黒の高台坏0503、甕0504などがあり、坏0502はカマド内から出土している。

6号住居跡（第5・12図、図版2－5・6）

調査区AのB－3、C－2・3グリッドに位置する。

住居跡の南側は調査区外となっており不明である。

7・9・11・22・23号の5軒の住居跡と重複し、これらすべてを切っている。

規模は、東西約4.3 m、南北は確認できる範囲で2.8 mあり、確認面からの深さは25～30 cmを測る。

カマドは北壁の東側寄りに位置し、南北約85 cm、東西約105 cmある。正面には30～40 cm大の三角形状を呈する大型の石を袖石として設け、奥には20 cm大前後の5点の石が組まれている。さらに、2個の坏が互いの口縁部を組み合わせるように、意図的にカマドの焚き口部に近いところに置かれていた（図版2－6）。

床面はほとんど水平で、カマドの正面から住居跡中央、さらに南へと向かって硬く踏みしまった面が展開していた。

遺物は、坏0601～0605、皿0606などが出ている。

7号住居跡（第5・12図）

調査区AのB－3グリッドに位置する。

6・8・9号住居跡と重複関係にあり、8号住居跡を切り、6・9号住居跡に切られている。

本住居跡は、2軒の住居跡にほぼ切られており、詳細は明らかでないが、カマドの位置などから一辺約3.0 mを測り、正方形を呈するとみられる。確認面からの深さは約30 cmある。

カマドは東壁の南側にあり、東西約50 cm、南北約85 cmを測る。中央に焼土と炭化物が認められた。

遺物は、坏0701、灰釉陶器0702、甕0703があり、甕0703はカマド内から出土している。

8号住居跡（第5・13・19図、図版2－7・8）

調査区AのA－3、B－2・3グリッドに位置する。本住居跡の南側半分は7・9号住居跡によって大きく切られてしまっている。

規模は、東西約3.9 m、南北は状態の良好な部分で約2.4 mが残存している。確認面からの深さは約45 cmを測り、壁は外へ向かいほぼ直線的に立ち上がる。

カマドは東壁にあり、長軸約1.2 m、短軸約1.1 mを測る。7号住居跡によって南側半部が削平されてしまっているが、北側の袖部では粘土が使用され、袖石も良好に遺存していた。住居跡の東西の規模から考えて、東壁のほぼ中央に本来は設けられていたと思われる。

遺物は、放射状暗文の坏0801～0803、放射状暗文の皿0804、砥石0805、転用硯0806～0808などがある。

9号住居跡（第5・13・19図、図版3－1）

調査区AのB・C－2・3グリッドに位置する。

3軒の住居跡と重複関係にあり、7・8号住居跡を切り、6号住居跡により切られている。

規模は、東西約4.2 m、南北約3.7 mの長方形を呈し、確認面からの深さ50～57 cmを測る。

とくに、カマド等の施設はみられなかったが、南東隅付近では直径約25 cmの焼土のまとまりが観察された。このため、6号住居跡によってカマドが破壊されてしまっている可能性も考えられる。

遺物は、坏0901～0905、甕0906、須恵器甕0907、灰釉陶器0908、砥石0909、転用硯0910などが出土している。

11号住居跡（第5・13図、図版3－2）

調査区AのC－2・3グリッドに位置する。

住居跡の東側を6号住居跡によって切られ、南側半分は調査区外となっている。

規模は、東西約2.7 m、確認可能な南北は約1.25 mで、方形を呈している。確認面からの深さは28 cmを測り、壁は緩やかに立ち上がっている。

東側の床面には直径約35 cm、深さ約20 cmのピットがあり、底面には20×10 cm大の石が置かれていた。

遺物は数少なく、坏1101のみ掲載した。

12 号住居跡（第 6・13 図、図版 3－3・4）

調査区 A の A－2・3 グリッドに位置する。

西側にある 1 号住居跡をわずかに切っている。規模は、東西約 4.2 m あり、北側は調査区外となっているが、北東部の壁がコーナーを描きつつあることから南北約 3.8 m を測るとみられ、長方形を呈すると考えられる。確認面からの深さは約 35 cm を測り、壁は緩やかに立ち上がっている。

カマドは南東隅部にあり、長軸約100㎝、短軸約 90 ㎝で、内部は焼土と炭化物、灰が充満していた。

床面は、中央に向かってわずかに緩やかな擂鉢状となるが、住居跡の中央を中心に硬く踏みしまった面が広く展開する。そして、カマドから住居跡の中央に向かって人頭大ほどの石が散在していた。

遺物は、脚高高台坏 1201～1203、坏 1204・1205、小皿 1206～1211、小碗 1212、白磁 1213、鉢 1214、羽釜 1215、錘 1216 などの土師質土器が中心に出土し、11 世紀中葉～後半の一括資料として捉えられる。

なお、本住居跡から出土した遺物には 8 世紀代のものから平安時代後半(11 世紀代) までのものが含まれている。白磁 1213 については、上記の時期決定となった一括資料に比べてわずかに古い時期のものとみられるが、これについては後述する。

13 号住居跡（第 7・14・19 図、図版 3－5・6）

調査区 A の B－2 グリッドに位置する。

重複関係は認められない。

規模は、東西約 2.7 m、南北約 3.1 m を測り、方形を呈する。確認面からの深さは約 5 cm から深いところで約 20 cm あり、壁は緩やかに立ち上がっている。

カマドは、長軸約 75 cm、短軸約 70 cm を測り、方形を呈し、南・北・東側は 20～40 cm 大の石できれいに「コ」字状に構築されていた。

遺物は、坏 1301～1303、皿 1304・1305、内黒の高台坏 1306・1307、灰釉陶器碗の底部を利用した転用硯 1308 のほか、甕 1309・1310 などがある。

14号住居跡（第 7 ・14図、図版 3 － 7 ・ 8）

調査区 A の A・B－1 グリッドに位置する。

3 軒の住居跡と重複関係にあり、その内 16・18 号住居跡を切り、15 号住居跡には切られている。

規模は、東西約 2.8 m、南北約 3.65 m の長方形を呈し、確認面からの深さはわずかに 8 cm と浅い。

住居跡南東側には直径約 45 cm の焼土跡が確認され、カマドが存在した可能性も考えられるが、15 号住居跡によって削平されてしまっていると思われる。

遺物は、住居跡北部コーナー付近を中心に小皿 1401、柱状高台の小皿 1402、耳皿 1405、土製の錘 1408 のほか、銅製小仏像の台座 1409 などが出土している。

また、南壁の中央付近には小碗 1404 や土器片製品 1406 がある。

15 号住居跡（第 7・14 図）

調査区 A の A－1、B－0・1 グリッドに位置する。

本住居跡は、遺構確認の段階で南壁が判明し、16 号住居跡との切り合い調査では北壁の一部を確認した。

一方、この一帯で 5 軒が重なり合った状況から、当初東・西壁は判然としなかった。しかし、重複する 18 号住居跡のカマド南半部が袖石ごと削平されていることや 14・16 号住居跡から検出された焼土は本来カマドが存在した痕跡と推測され、本住居跡の重複によって破壊されたと考えられることから、ちょうど図化した推測線付近に東壁が存在したと考えられる。

西壁は明らかでなく、19 号住居跡に切られてしまっているのかどうかは明らかでない。

規模は遺存する北・南壁の状態から南北約 4.35 m を測り、本住居跡は本来一辺約 4.3 m 前後の方形であったと思われる。

床面はほぼ水平で、南部コーナー付近から住居跡の中央へと向かって硬く踏みしまった面が展開していた。

遺物は、住居跡の主に南半部から多く出土しており、小皿 1501～1504、柱状高台の小皿 1505、台付坏 1506～1509、柱状高台坏 1510・1511、土器片製品 1512、砥石 1513 などがみられる。

16 号住居跡（第 7・15 図）

調査区 A の A・B－0・1 グリッドに位置する。14・15 号住居跡に切られ、西側は調査区外となる。

規模は、南北約 3.15 m、東西は確認可能な範囲で 1.75 m を測り、形態は方形を呈するとみられる。確認面からの深さは約 15 cm で、壁は緩やか

に立ち上がる。

東壁の南側には、14号住居跡と同様に焼土の溜りが確認され、本来その位置関係から推測するとカマドが存在した可能性が考えられる。

遺物は、小皿1601、脚高高台小皿1602、小碗1603などが出土している。

17号住居跡（第8・15・19図、図版4－1・2）

調査区AのB・C－3・4グリッドに位置する。

計5軒の住居跡と複雑に重複し合っており、20～24号住居跡を切っている。

規模は、東西約4.7 m、南北約4.25 mの方形を呈し、確認面からの深さは約30 cmを測る。

カマドは、住居跡の南東隅部に設けられていたようであるが、長軸65 cm、短軸50 cmの焼土を多分に含んだ楕円形の掘り込みが確認できるだけで、その周辺には35～40 cm大の大型扁平石などが伴う。

また、カマドの周辺から住居跡の中央に向かって拳大から人頭大ほどの大きさの石が散在し広がっている。

床面は、多少の凹凸がみられるが総体的にはほぼ水平を保っており、カマドの正面から住居跡の中央に向かって硬く踏みしまった面が広く展開していた。

遺物は、脚高高台坏1701、皿1702、大型の坏1703、灰釉陶器の碗1704、灰釉陶器の壷1705、羽釜1706、砥石1707、転用硯1708・1709などがある。このうち、脚高高台坏1703と羽釜1706はカマド内から出土している。

18号住居跡（第8・15図、図版4－3・4）

調査区AのA・B－1グリッドに位置している。

本住居跡は、14・15号の2軒の住居跡によって切られていたが、その割りには遺存状況は比較的良好で住居跡の全体像を捉えることが可能であった。

規模は、東西約3.2 m、南北約2.9 mを測り、方形を呈する。確認面からの深さは、良好な場所で約20 cmあり、14・15号住居跡により切られた部分では約10 cmを測り、全体的に壁は緩やかに立ち上がる。

住居跡の南東部にカマドが設けられ、規模は長軸約105 cm、短軸約60 cmを測り、焚き口から燃焼部にあたる掘り込みには焼土と炭化物が充満していた。そして、カマドの北東半部は20～30 cm大の5つの石を組んで袖部が設けられており、南東半部については15号住居跡により大きく削平され、袖部は確認できなかった。

遺物は、坏1801～1803、皿1804～1808、内黒高台坏1809・1810、小型の甕1811、甕1812などがあり、器種と量ともに充実している。

19号住居跡（第7・15図、図版4－5）

調査区Aの南西部角O－Bグリッドに位置する。

住居跡の大部分は調査区外にあり、そのため大きさは不明である。また、北東部に隣接する15号住居跡は西壁が判然としなかったため、本住居跡と重複しているかは明らかでない。もし、重複関係にあったとしても、本住居跡のカマドが破壊されることなく検出されたことから、時期的な前後関係としては本住居跡が15号住居跡に比べ新しい時期に所属することとなる。

カマドは北東壁に設けられており、長軸約85 cm、短軸75 cmある。正面には約40×30×13 cm大の扁平で大型の石を利用して両袖部を造り出し、さらに奥側にはおよそ30×25×15 cm大の石を数多く組み上げることでカマドが構築されていた。

遺物は、土師質土器を中心とする小皿1901・1902、坏1903～1905、台付坏ないしは柱状高台坏の範疇に属する1906～1908などが出土している。

20号住居跡（第8・16・19図、図版4－6）

調査区AのB・C－4グリッドに位置する。

本住居跡は5軒の住居跡と重複関係にあり、17・21～24号住居跡によって切られ、とくに南半部は破壊されており、南壁の一部がわずかに残存していた。

規模は、東西約4.6 m、南北約4.95 mと大型で方形を呈する。もっとも良好な確認面からの深さは約40 cmを測り、壁は外に向かって直線的に立ち上がっている。

東壁際のやや南寄りには長軸約115 cm、短軸約80 cm、床面からの深さ約12 cmで、焼土を多分に含んだ掘り込みが確認された。おそらく、上部に重なる17号住居跡により壊されてしまった東カマドの残欠である可能性が高い。

遺物は、放射状暗文の坏2001・2002、甕2003、須恵器壷？2004、転用硯2005などがあり、坏2001はカマド内から出土している。

21号住居跡（第9・16図、図版5－1）

調査区Ａの南東隅部Ｃ－４グリッドに位置する。

３軒の住居跡と重複関係にあり、20号住居跡を切り、17・24号住居跡に切られている。また、本住居跡は大半が調査区外となっており、北西コーナーを中心に北・西壁の一部を確認することができた。

確認可能な規模は、東西約1.45 m、南北約2.8 mであったが、他の住居跡と同様に方形を呈する住居跡と考えられる。確認面からの深さは約35 cmあり、壁は外に向かって直線的に立ち上がる。

発見された範囲内の中央からやや南寄りには、長軸約90 cm、短軸約60 cmの巨石が出土した。

この大型の石は平らな面がほぼ水平で上向きとなり床面から上方に約20 cmだけその姿を現し出土したが、床面から下部は三角形状を呈し下方へ約30～40 cmほど埋没した状態となっている。

遺物は、内黒の坏2101、皿2102・2103、須恵器甕2104などがあるが、このうち皿2102は大型の石の上面に密着して、土圧で潰れていた。

22号住居跡（第9・16図、図版4－7・8）

調査区ＡのＣ－３・４グリッドに位置する。

４軒の住居跡と重複関係にあり、20・23号住居跡を切り、6・17号住居跡に切られている。南側のほとんどが調査区外となっている。

規模は、東西約4.0 m、南北は確認できる範囲で約1.1 mを測り、おそらく一辺約4.0 mの方形を呈する住居跡とみられる。

調査状況から本来の深さは約60～70 cmあり、かなりしっかりとした深い掘り込みをもっていた。

北壁の東側にはカマドが設けられており、南北約100 cm、東西約130 cmを測る。両袖には用材としてそれぞれ１個づつ扁平で大型の石が袖石として使用され、さらにその周りには白色粘土などを混ぜた土でカマドの袖を構築していた。また、カマド内の焚き口から燃焼部にあたる範囲内で焼土と炭化物が充満していた。

遺物は、皿2201・2202、内面に暗文を施した内黒の坏2203、甕2204などが出土している。

23号住居跡（第9・16図、図版4－7）

調査区ＡのＣ－３・４グリッドに位置する。

４軒の住居跡と重複関係にあり、20号住居跡を切るが、6・17・22号住居跡によって切られている。

規模は、東西約5.2 m、南側は調査区外となっており、確認できた範囲で南北約3.4 mを測る。

確認面からの深さは約30 cmを測り、壁は外に向かって直線的に立ち上がっている。

北壁の東側には、長軸150 cm、短軸約100 cmほどの楕円形状に焼土と炭化物が散在しまとまった部分があり、その中央には50×35 cm大の良好な火床範囲が検出された。おそらく、17号住居跡によって壊された本住居跡のカマド跡ではなかったかと考えられる。

遺物は、内黒の坏2301・2302、鉢2303、甕2304・2305、甕2306などのほか細片の土器が多く出土している。

24号住居跡（第9・16図）

調査区ＡのＢ・Ｃ－４グリッドに位置する。

３軒の住居跡と重複関係にあり、20・21号住居跡を切り、17号住居跡によって切られている。また、東側半部は調査区外となっている。

幸いにも、北・南壁の一部を発見することができ、Ｃ－４グリッドの東面で本住居跡のセクションを確認することができたため、規模が南北約4.25 mを測ることが明らかとなった。東西の範囲は17号住居跡に切られていたことや20号住居跡の覆土中で確認することが困難であったため、不明である。おそらく、本住居跡は一辺約4.0 mの方形を呈していると推測される。

調査範囲では、硬く踏みしまった良好な床面が検出され、17号住居跡が存在する範囲内では重複のために硬い床面は切られ、続きはみられなかった。

遺物は、内黒の坏2401・2402、甕2403などがあり、ほとんどこの範囲で出土した遺物は細片であった。

25号住居跡（第9・17・19図、図版5－2～4）

調査区ＢのＡ－５・６グリッドに位置している。

４軒の住居跡と重複関係にあり、26～28・33号住居跡を切っている。北・西側は調査区外となっている。

調査した範囲内の東・南壁については他の住居跡の覆土中に掘り込まれていたことから、確認が容易でなく不明である。しかし、カマドの位置関係と住居跡中央に向かって西側へと展開する硬く踏み締まった床面の存在から、調査範囲における規模は、

およそ東西約 3.5 m、南北約 2.7 m を測ると推測される。

カマドは、住居跡の南東に設けられた東カマドであったと考えられる。長軸約 90 cm、短軸約 90 cm あり、扁平で大型の石を直立させて両袖の芯に使用し、さらに 20～30 cm 大の石を組み上げ白色粘土を含んだ土で袖部が構築されていた。カマド内の奥には焼土と炭化物が充満しており、カマドの周辺にも焼土や白色粘土が散在していた。

硬く締まった範囲の南東寄りの床面直上からフイゴの羽口 2507 が出土した（図版 5－4)。そして、この羽口の近辺からは赤化し長方形状に加工されたようなレンガ状の石や扁平な台石状のものが床面の直上から出ている。この 35×25×10 cm 大の扁平な台石表面中央には、何かの圧力で弾けた箇所が観察された。

遺物は、坏 2501・2502、皿 2503、甕 2504、羽釜 2505、灰釉陶器の壷 2506、フイゴの羽口 2507、鉄鎌 2508、鉄斧 2509、ヤリガンナ 2510、不明銅製品 2511 などが出土している。

このうち、遺物 2501～2506 の土器類はすべてカマド内から出土したものを掲載した。

また、カマド北側には 45×25 cm 大の白色粘土の塊があり、その周囲から鉄鎌 2508 と不明銅製品 2511 が、鉄斧 2509 は調査区 B の北西隅部の床面上から出土している。

さらに、カマド内中央には焼土が検出され、その上面から鉄滓（碗形滓か？）が出土したが、これだけに限らず、本住居跡内と周辺からも鉄滓が出ている。

今回調査を行った調査区(A～C)全体からみても鉄製品や鉄滓、羽口の出土などが、この辺りで偏在してみられることから本住居跡ないしは調査区 B の周辺に鍛冶関連の遺構が存在する可能性も考えられる。

26 号住居跡（第 10・16・19 図、図版 5－5・6）

調査区 B の A・B－5・6 グリッドに位置する。

5 軒の住居跡と重複関係にあり、このうち、27・28・33・34 号住居跡を切り、25 号住居跡に切られている。

南半部は、調査区外となっており不明である。

東半部は他の住居跡と重複が激しく明確に壁を確認できなかったが、カマドの位置関係から東西約 4.0 m を測るとみられ、調査可能な範囲内での南北は約 2.35 m の規模を有する。確認面からの深さは約 30 cm である。

床面は、ほぼ水平で東カマドの正面から住居跡中央に向かって硬く踏み締められた面が良好に認められた。

カマドは遺存状態がかなり良好で東壁に設けられ、東西 80×南北 85 cm の大きさがある。両袖には 30×30×15 cm から 30×30×35 cm 大の大型の石を直立させ、さらに 15～30 cm 大の石を多数組み上げ、カマドの芯を構築していた(図版 5－6)。また、カマド奥の煙道部とみられる箇所には 25～30 cm 大の扁平な石を並列して天井部を造り出していた。カマド中央には焼土と炭化物が充満しており、そしてカマド正面の床面上にはところどころ灰が薄く層状をなして堆積していた。

遺物は、坏 2601・2602、羽釜 2603 などがあり、2601 と 2603 はカマド内から発見され、2602 はカマド正面の床面上から土圧により潰れた状態で出土した。

27 号住居跡（第 10・17 図、図版 5－7・8）

調査区 B の A・B－6 グリッドに位置する。

4 軒の住居跡と重複関係にあり、28 号住居跡を切り、25・26・34 号住居跡によって切られている。

とくに、本住居跡は 26・34 号住居跡と重複がかなり激しいことから、明確に調査できたのは東壁とこれに付設されたカマド跡だけであったが、他の住居跡との切り合い関係から勘案し、掲載した一辺約 2.8 m ほどの方形を呈する住居跡であったと考えられる。

カマドは、80×75 cm を測る東カマドであり、カマド袖部のあたりに約 20～30 cm 大の石がまとまって出土したが、34 号住居跡の構築で壊されてしまっている。

遺物は、見込み部から内面体部にかけて放射状暗文が施された坏 2701、須恵器高台坏 2702 があり、2702 の一部破片はカマド内から出土している。

28 号住居跡（第 10・17 図、図版 5－5・7）

調査区 B の A－6・7 グリッドに位置する。

4 軒の住居跡と重複関係にあり、25～27・34 号住居跡に切られている。住居跡の北東部はその大半が調査区外となっており、全体像は明らかでない。

確認できた範囲内での規模は、東西約 4.1 m、南北約 2.2 m あり、確認面からの深さ約 50 cm、25 号住居跡床面レベルからの深さは約 40 cm を測り、かなりしっかりとした掘り込みをもつ遺構であった。

床面は多少の凹凸はあるがほぼ水平を保っており、調査範囲内では 30×25～70×35 cm 大の台石状の扁平な石が床直上に据えられていた。

また、壁に沿って幅 20～25 cm、深さ約 10 cm ほどの壁溝が全周しながらみつかっている。

遺物は、外面横磨きで内面放射状暗文のある坏 2801、盤状の坏？2802、須恵器蓋 2803、須恵器高台坏 2804、砥石 2805・2806 などが出土している。

29 号住居跡（第 10・17 図、図版 6－1）

調査区 C の C－5・6 グリッドに位置している。

3 軒の住居跡と重複関係にあり、31・32 号住居跡を切り、30 号住居跡に切られている。西と南側は調査区外となり不明である。

調査した範囲内では確認時の平面プランと調査区 C の南側セクションの観察で東壁を確認できたが、北壁については 30 号住居跡に切られ明らかでない。

調査区 C 内での規模は、東西約 2.7 m、南北約 1.9 m であった。

床面は硬く踏み締まった面が南西側に偏在して確認できており、その床面上には 60×40×15 cmほどの大型で扁平な台石状のものが置かれていた。

遺物は細片のものが多かったが、大型の坏 2901 や内黒の坏 2902 などが出土している。

30 号住居跡（第 10・18 図、図版 6－1・2）

調査区 C の C－5・6 グリッドに位置する。

5 軒の住居跡と重複関係があり、29・31・35・37 号住居跡を切り、36 号住居跡によって切られている。

北と西側については調査区外となり、不明である。

調査範囲内での規模は、東西約 3.0 m、南北約 2.5 m を測り、確認面からの深さは約 35 cm ある。

カマドは東壁に位置し、東西約 1.3 m、南北約 1.1 m ある。カマド袖部は約 20 cm 大の石を複数に積み上げて構築されていることが窺えた。また、カマド内の焚き口から燃焼部、そして煙道部にかけて全体的に焼土と炭化物が充満していた。

床面はほぼ水平で、中央の床面上から 20～30 cm 大の石がまとまって出土している。

遺物は、坏 3001・3002、土師器の高台坏 3003 などがあり、3003 はカマド内から出土している。

31 号住居跡（第 11・18 図、図版 6－3～5）

調査区 C の C－5・6 グリッドに位置している。

4 軒の住居跡と重複関係にあり、35 号住居跡を切り、29・30・32 号住居跡に切られている。また、東と南側は調査区外となっており、詳細は明らかでない。

調査区内の規模は、東西約 2.6 m、南北約 2.9 m を測る。確認面からの深さは約 50 cm あり、調査区 C の東面セクションの観察で本来深さが約 60 cm あったとみられ、しっかりとした掘り込みをもつ住居跡であった。

カマドは北壁にあり、今回その半分をちょうど主軸線上に調査することができ、南北約 130 cm、東西約 35 cmの範囲を完掘することができた。なお、調査区 C の東面セクション観察では炭化物を多分に含む焼土層が焚き口から燃焼部を経て、煙道へと向かって良好に堆積しており、しかも重複する 35 号住居跡を切りながら焼土層が抜けていく状態がよく観察された（図版 6－5）。

さらに、カマドの上部には 30 cm大以上の扁平大型の石が天井石として設置されていたことも確認できた。

袖部は長軸 30 cm大ほどの扁平石を直立させ 2 枚並列し袖の芯を造り出していた。

カマドの正面から住居跡中央に向かっては、15～50 cm大の数多くの石が出土している。おそらく、図版 6－4 にみるように北のカマドから南西側の床面に向かって大きく崩壊しており、元々カマドの構築材として使用されていたものが住居跡の廃絶に伴い大きく崩れた状態ではないかと考えられる。

床面は、水平をほぼ保っており、カマドの正面から住居内の広い範囲にわたって硬く踏み締まった面が展開していた。

遺物は、見込み部から内面体部にかけて放射状暗文を施す坏 3101、渦巻文と区画を暗文で施した内黒の坏 3102、放射状暗文の皿 3203、渦巻状暗文の皿 3204・3205 などが出土している。

32 号住居跡（第 11・18・19 図、図版 6－6）

調査区ＣのＣ－5 グリッドに位置している。

2 軒の住居跡と重複関係にあり、31 号住居跡を切り、29 号住居跡が上部に重なっている。また、西と南側は調査区外である。

確認できた規模は、東西約 2.1 m、南北約 1.2 m で隅丸方形状を呈するとみられる。また、29 号住居跡の床面からの深さは約 25 cm を測り、壁は緩やかに立ち上がっている。

遺物は、坏 3201、皿 3202 などが出土している。

33 号住居跡（第 11・18 図、図版 5－7）

調査区ＢのＡ－5・6 グリッドに位置している。

2 軒の住居跡と重複関係にあり、26・34 号住居跡により切られている。住居跡の大半は調査区外となっている。

確認できた規模は、東西約 2.0 m、南北約 1.2 m で、ちょうど住居跡の北東コーナー周辺にあたる。

掘り込みの深さは、26 号住居跡の床面から約 20 cm あり、地山の礫層を掘り上げて構築されていた。

遺物は、坏 3301・3302、須恵器坏 3303、須恵器高台坏 3304 などがある。

34 号住居跡（第 11・18 図、図版 5－7）

調査区ＢのＡ・Ｂ－6 グリッドに位置する。

5 軒の住居跡と重複関係にあり、27・28・33 号住居跡を切り、25・26 号住居跡に切られている。

本住居跡も 27 号住居跡と同様に重複が激しく、住居跡の全体像を把握する上で困難を極めた。そのため、重複関係にある住居跡と周囲の地山の残存状況から勘案して、図面上破線でもって復元を試みている。

カマドは、東側に位置しており、27 号住居跡のカマドを一部切って、26 号住居跡のカマド南東側下部から発見された。規模は、東西 85 cm、南北は確認可能な場所で約 60 cm を測る。カマド内は炭化物や焼土が多分に充満していた。また、北側の袖部は 26 号住居跡の影響で若干壊れていたが、南の袖部は 2 個の大型の扁平石を東西に並べてあった。

遺物は、坏 3401・3402、内黒の高台坏 3403、甕 3404、羽釜 3405 などがあり、甕 3404 はカマド内から出土している。

35 号住居跡（第 11・18 図、図版 6－7）

調査区ＣのＣ－6 グリッドに位置する。

確認できたのは、およそ 1.2×1.2 m 四方のわずかな床面のみの範囲であり、東側は調査区外で、南は 31 号、西は 30 号、北は 37 号住居跡によって切られており、ほとんどが削平を受けていた。

しかし、床面は南側にかけて硬く踏みしまった良好な面が幸いにも残っていた。

調査時には約 30 cm ほどの覆土が堆積していたが、出土した遺物は、須恵器高台坏 3501 と灰釉陶器の壷？3502 の 2 点のみであった。

36 号住居跡（第 11・18 図、図版 6－7・8）

調査区ＣのＢ・Ｃ－5・6 グリッドに位置している。30・37 号の 2 軒の住居跡を切っている。

北と西側は調査区外で明らかでなく、南側は 30 号住居跡の床面上から出土した石のまとまりとの関係から、図化した辺りで南壁が巡っていたと考えられる。

カマドは調査区Ｃの北面でその南半分が確認された。東西約 90 cm で南北は確認できた範囲で約 30 cm を測る。最初石が集中して出土したことから、ただの石溜りかと思われたが、1 点 1 点丁寧に取り除いていった結果、天井石と袖石が組み合わさったまま斜めに崩れている状態が確認された。また、カマドが位置する調査区Ｃの北面際からは焼土と炭化物が検出され、取り除いた多数の石と伴に羽釜 3602 が出土した。

遺物は、カマド内から坏 3601 と羽釜 3602 が出土している。

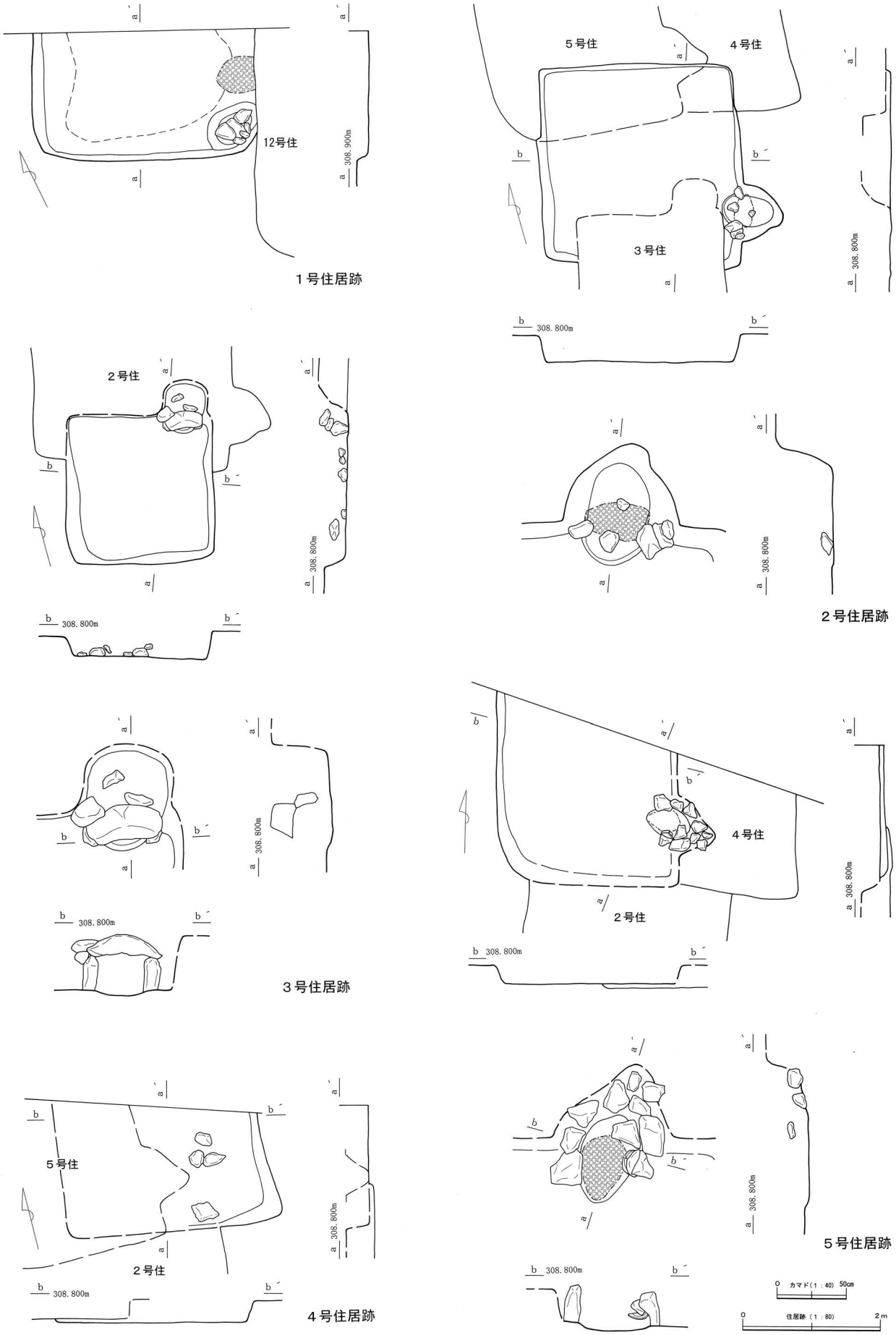
37 号住居跡（第 11 図、図版 6－7）

調査区ＣのＣ－6 グリッドに位置している。

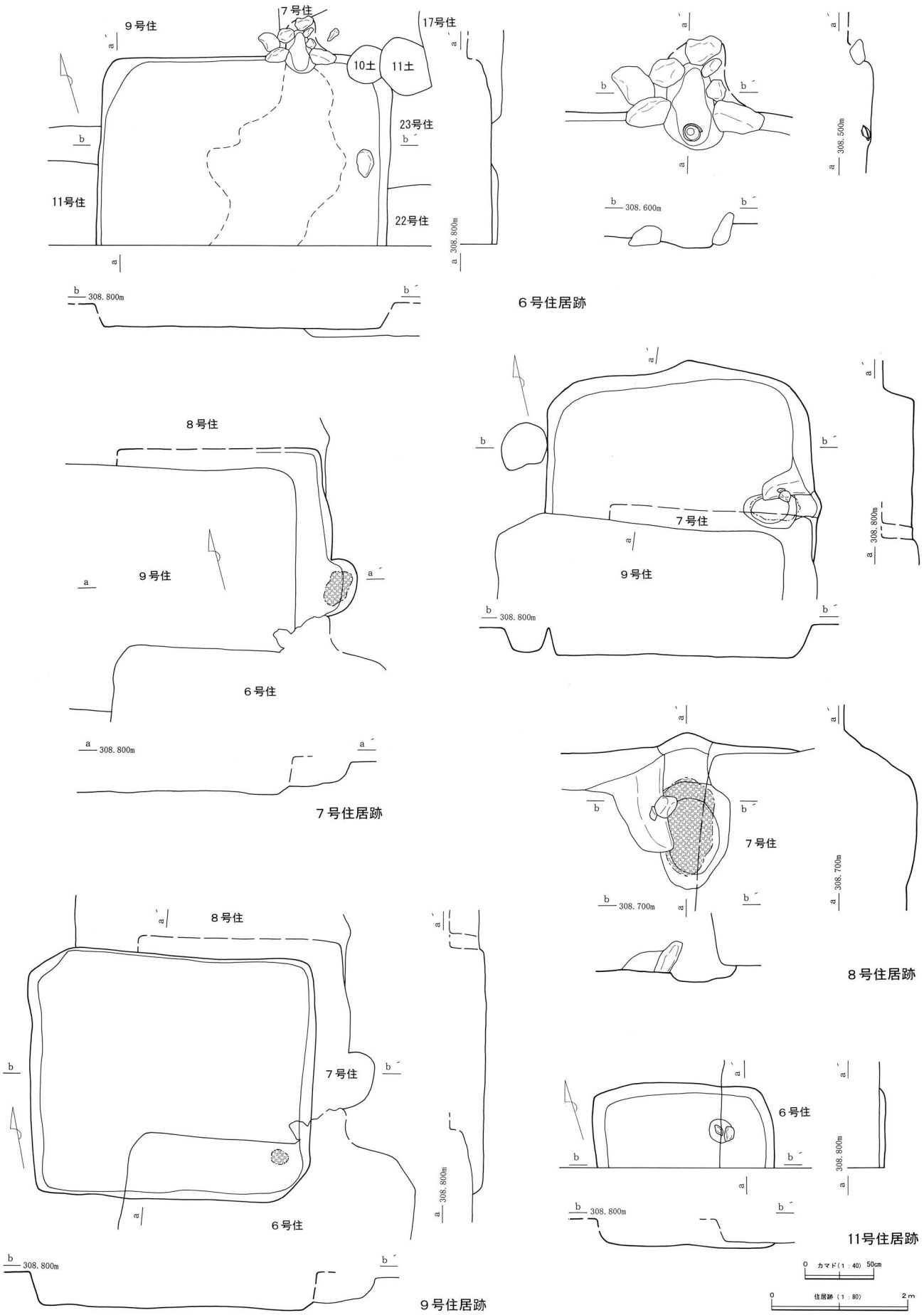
3 軒の住居跡と重複関係にあり、35 号住居跡を切り、30・36 号住居跡に切られている。

また、30 号住居跡との前後関係については、本住居跡と重複した位置と範囲からみて 30 号住居跡のカマドにはとくに削平を受けた状態はみられなかったことから、本住居跡のほうが古い時期であると考えられる。

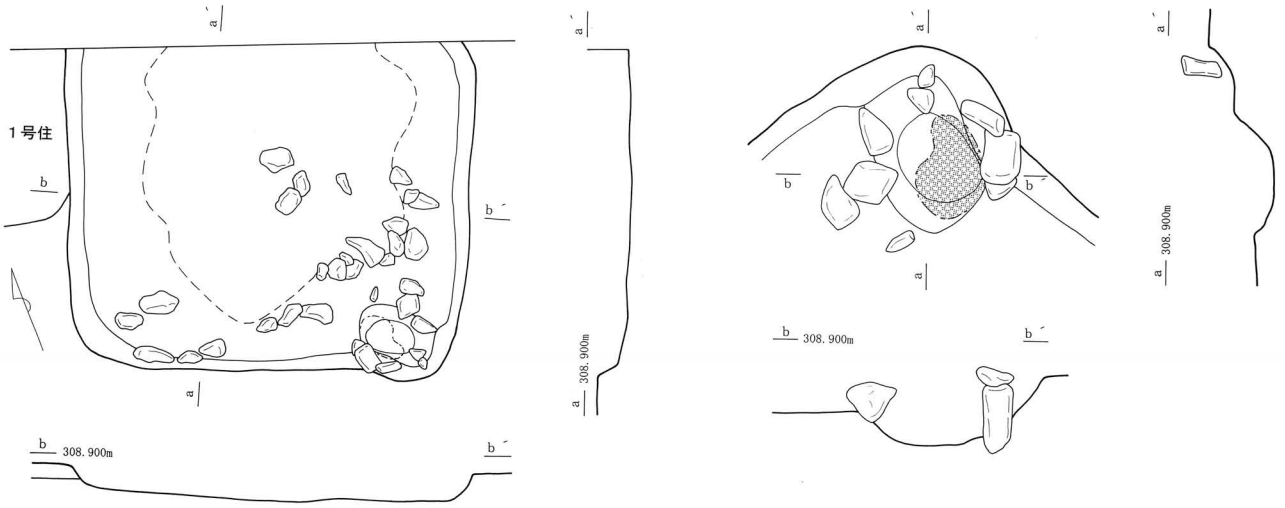
遺物は、今回とくに出土していない。


12号住
308.900m
1号住居跡
5号住
4号住
3号住
308.800m
2号住
2号住居跡
3号住居跡
4号住
5号住居跡
カマド(1：40) 50cm
住居跡（1：80） 2m

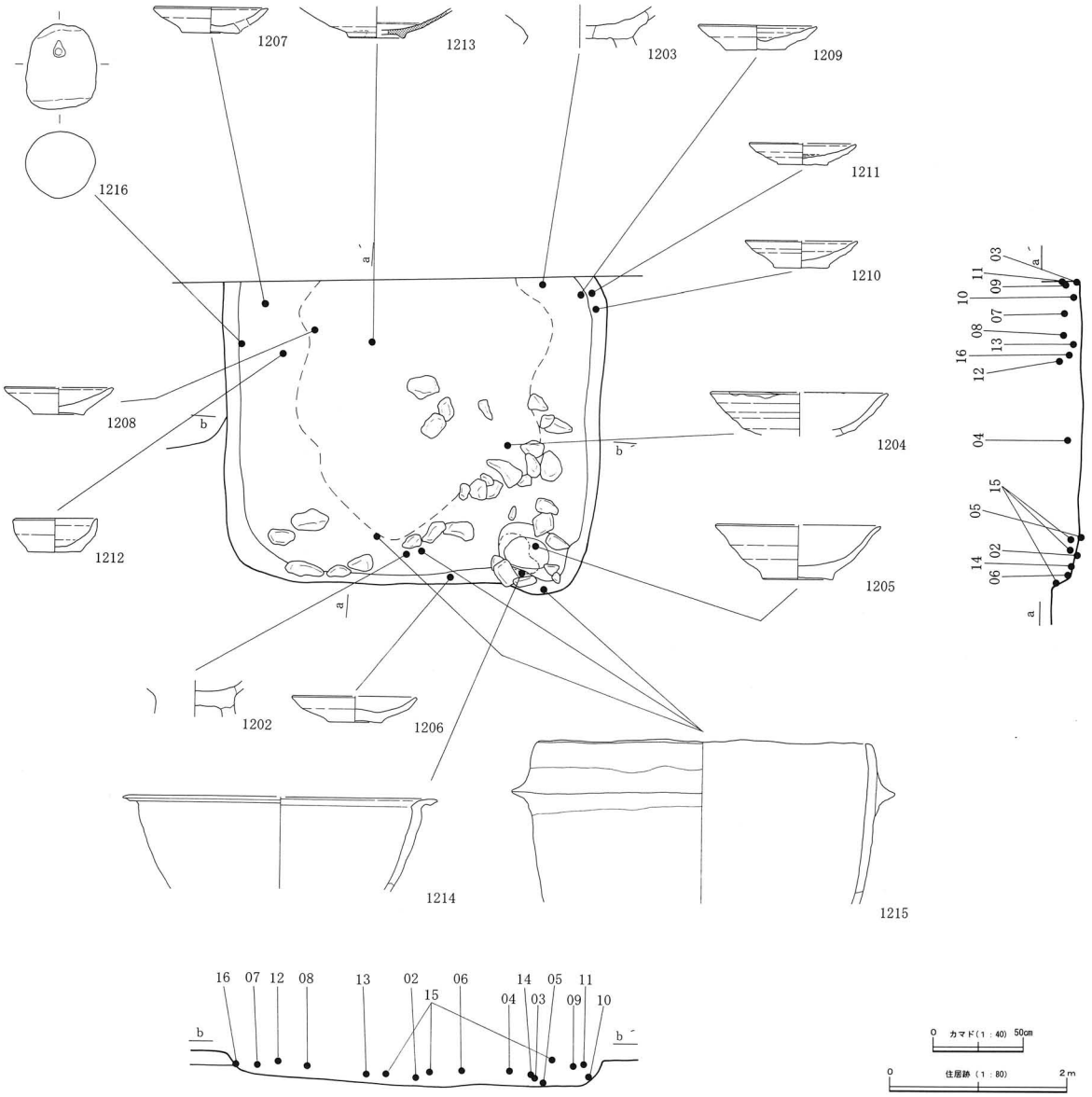
第４図　住居跡（1）


9号住
7号住
17号住
10土
11土
23号住
11号住
22号住
308.800m
6号住居跡
308.600m
308.500m
8号住
9号住
6号住
308.800m
7号住居跡
7号住
9号住
308.800m
7号住
308.700m
308.700m
8号住居跡
8号住
7号住
6号住
308.800m
9号住居跡
6号住
308.800m
11号住居跡
カマド(1：40) 50cm
住居跡（1：80） 2m

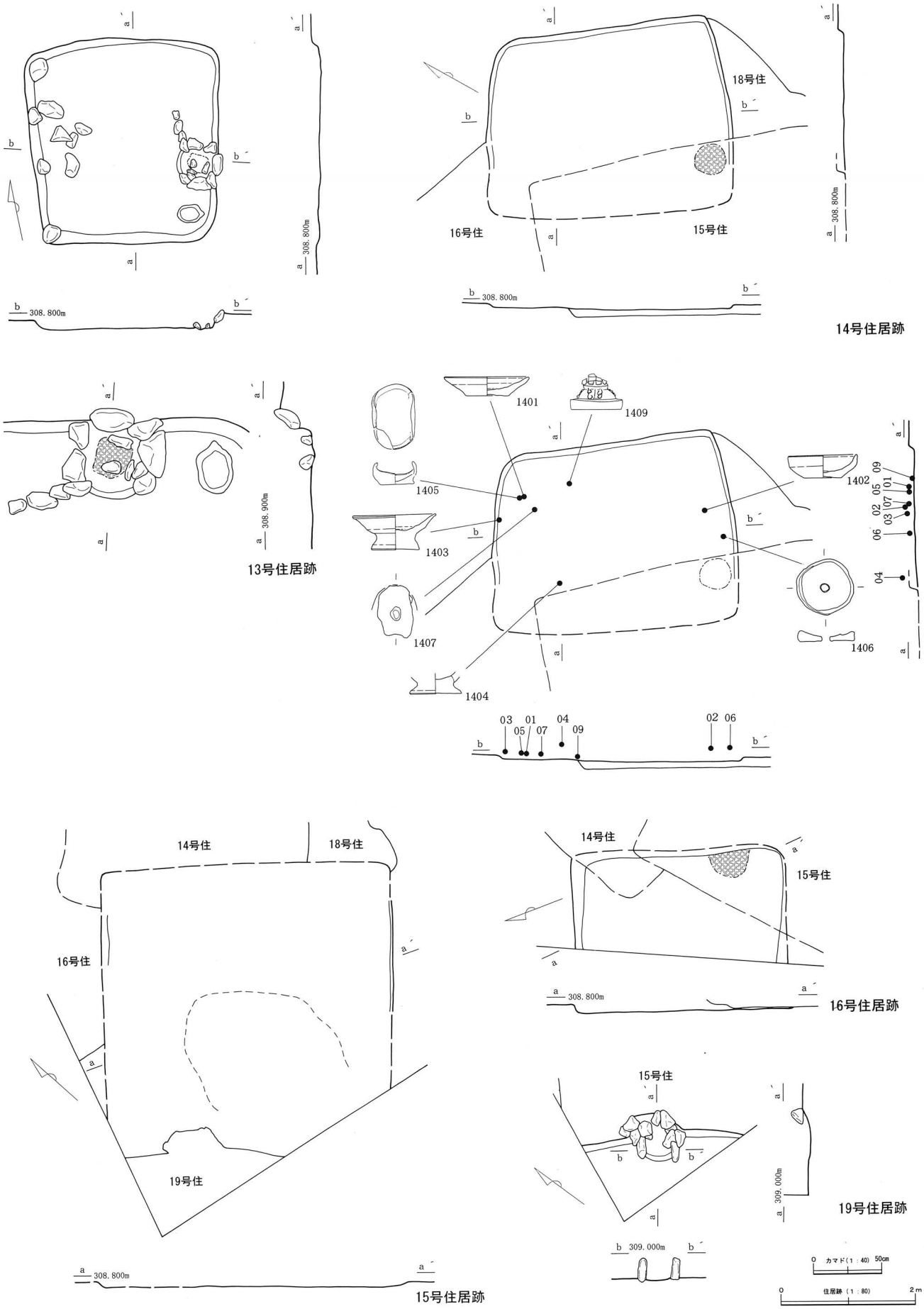
第５図　住居跡（2）



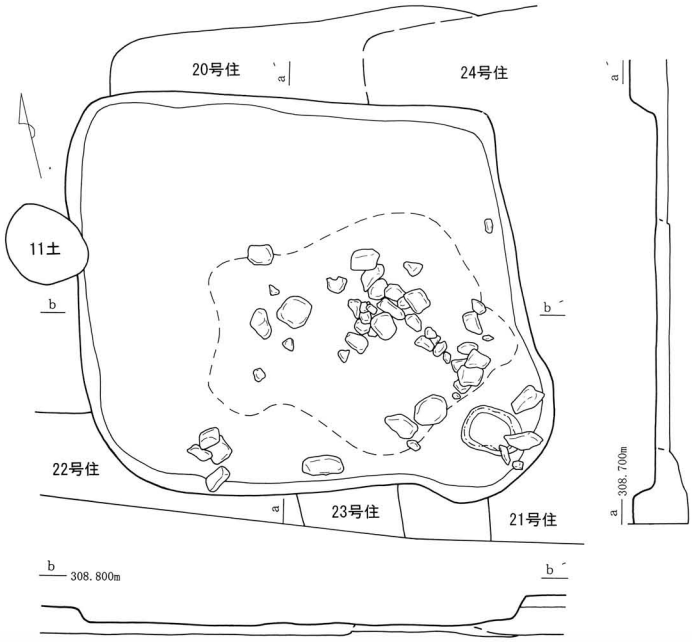
12号住居跡

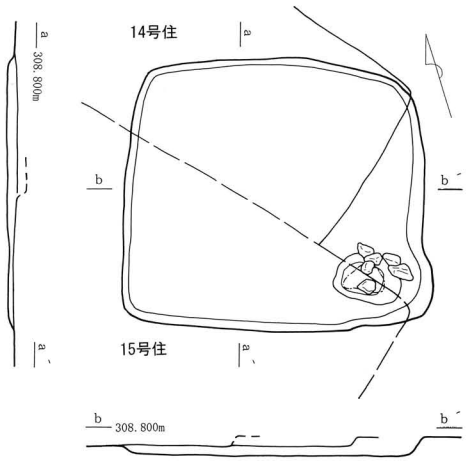


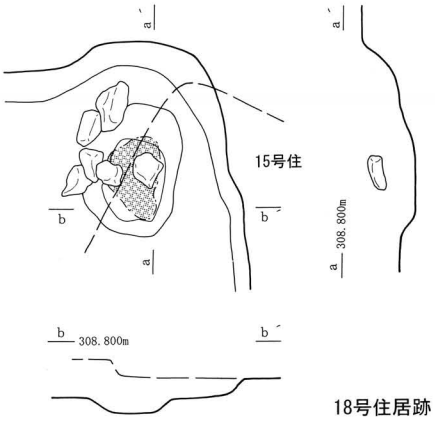
第6図　住居跡（3）


18号住
16号住
15号住
308.800m
14号住居跡
13号住居跡
308.900m
1401
1409
1405
1402
1403
1407
1406
1404
03 01 04
05 07 09
02 06
14号住
18号住
16号住
19号住
15号住居跡
15号住
16号住居跡
309.000m
19号住居跡
カマド(1：40) 50cm
住居跡（1：80） 2m

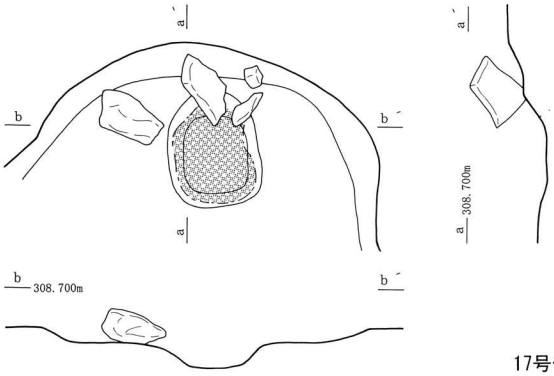
第７図　住居跡（4）



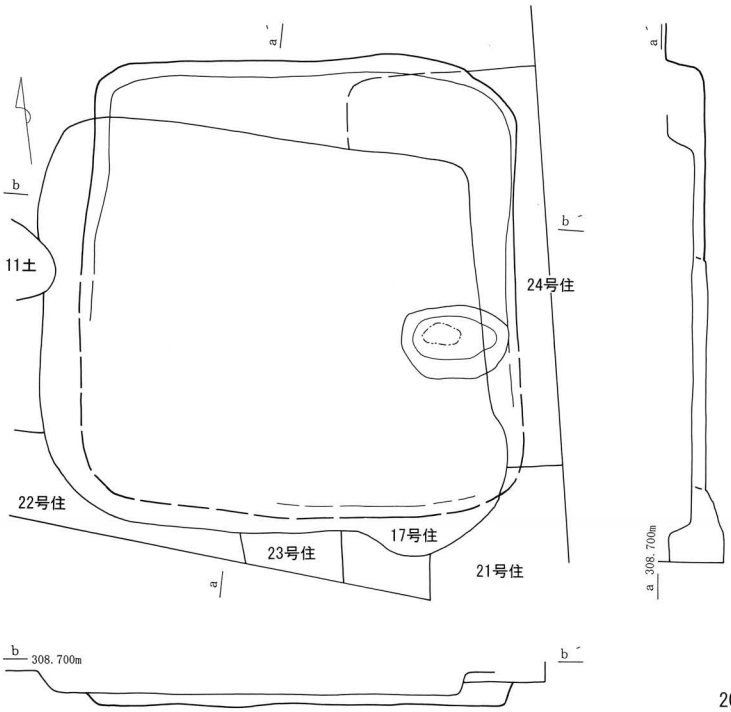


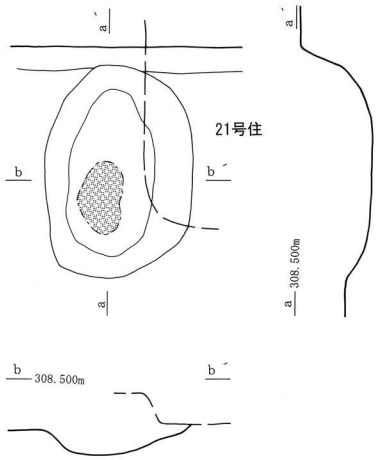


18号住居跡

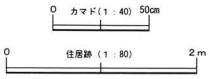


17号住居跡

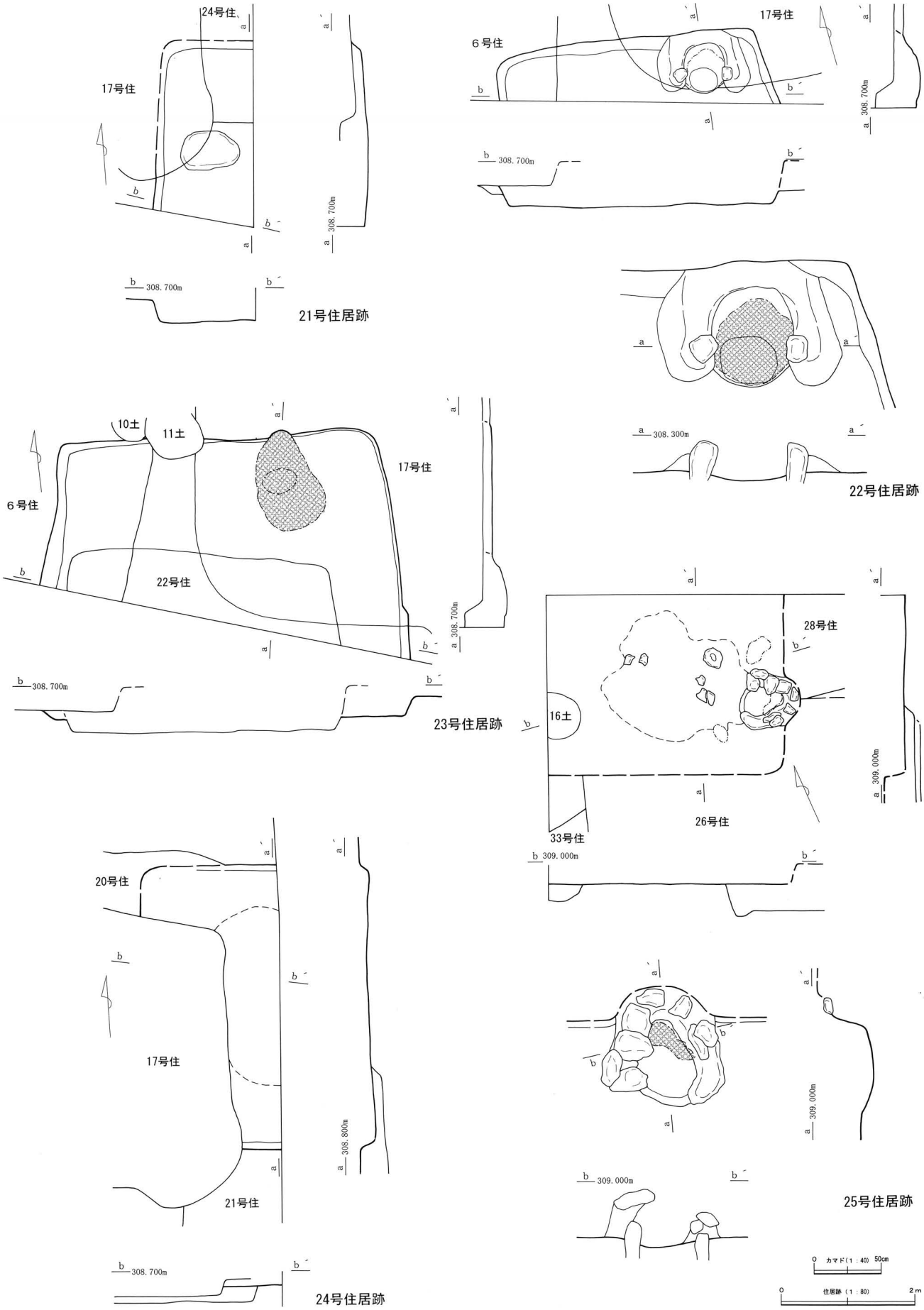




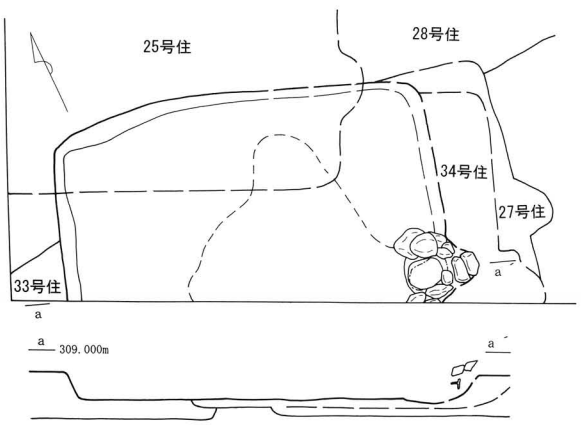
20号住居跡

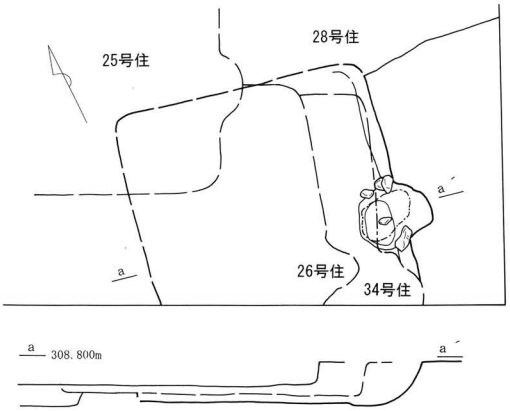


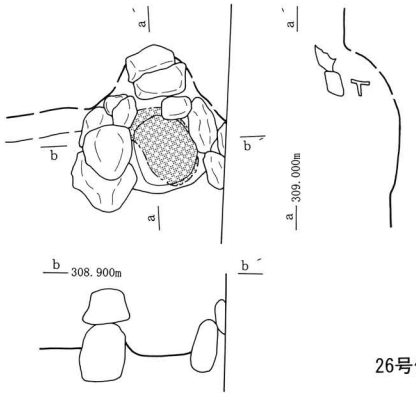
第８図　住居跡（5）


24号住
17号住
308.700m
21号住居跡
6号住
17号住
308.700m
308.300m
22号住居跡
10土
11土
17号住
6号住
22号住
308.700m
23号住居跡
28号住
16土
26号住
33号住
309.000m
20号住
17号住
21号住
308.800m
308.700m
24号住居跡
309.000m
25号住居跡
カマド(1：40) 50cm
住居跡（1：80） 2m

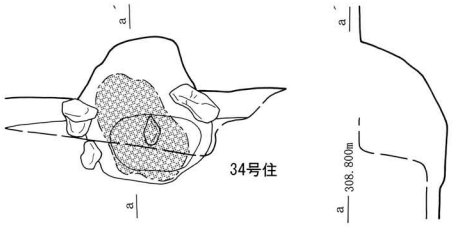
第９図　住居跡（6）



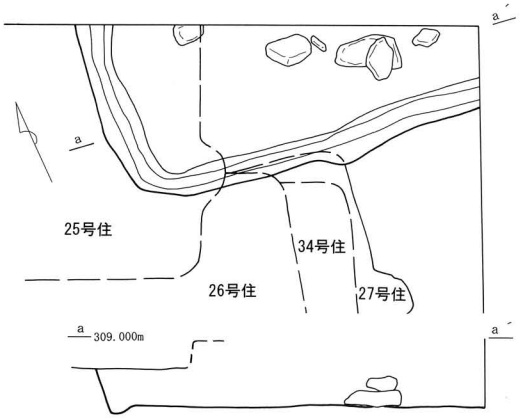




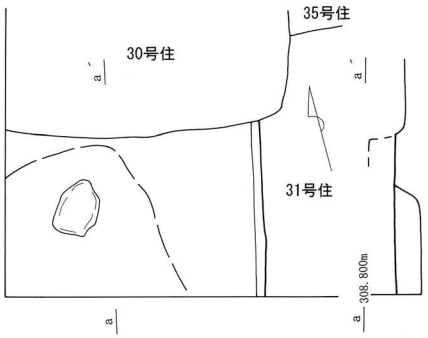
26号住居跡



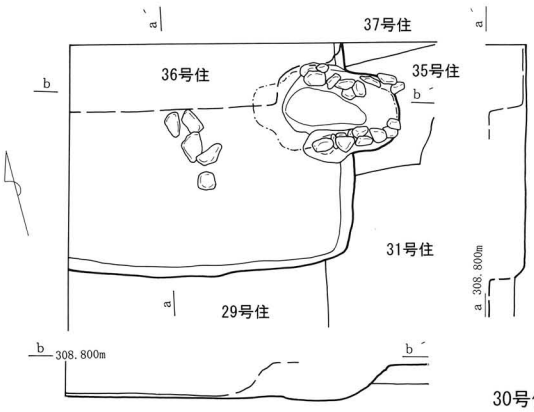
27号住居跡

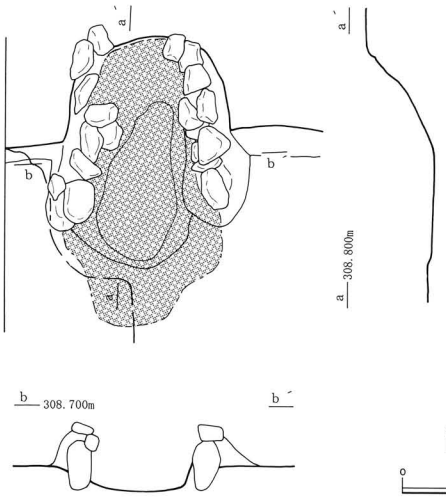


28号住居跡



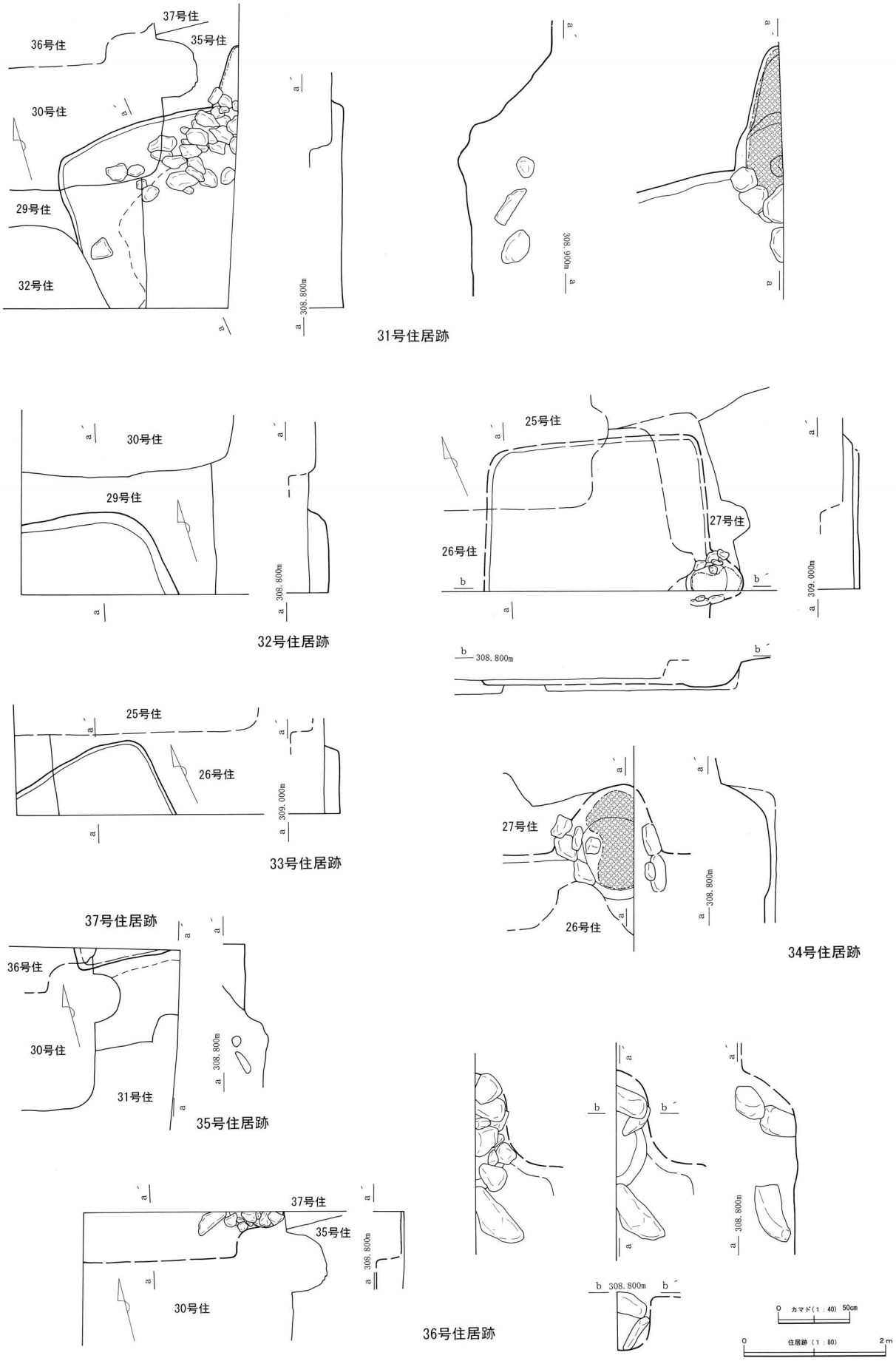
29号住居跡



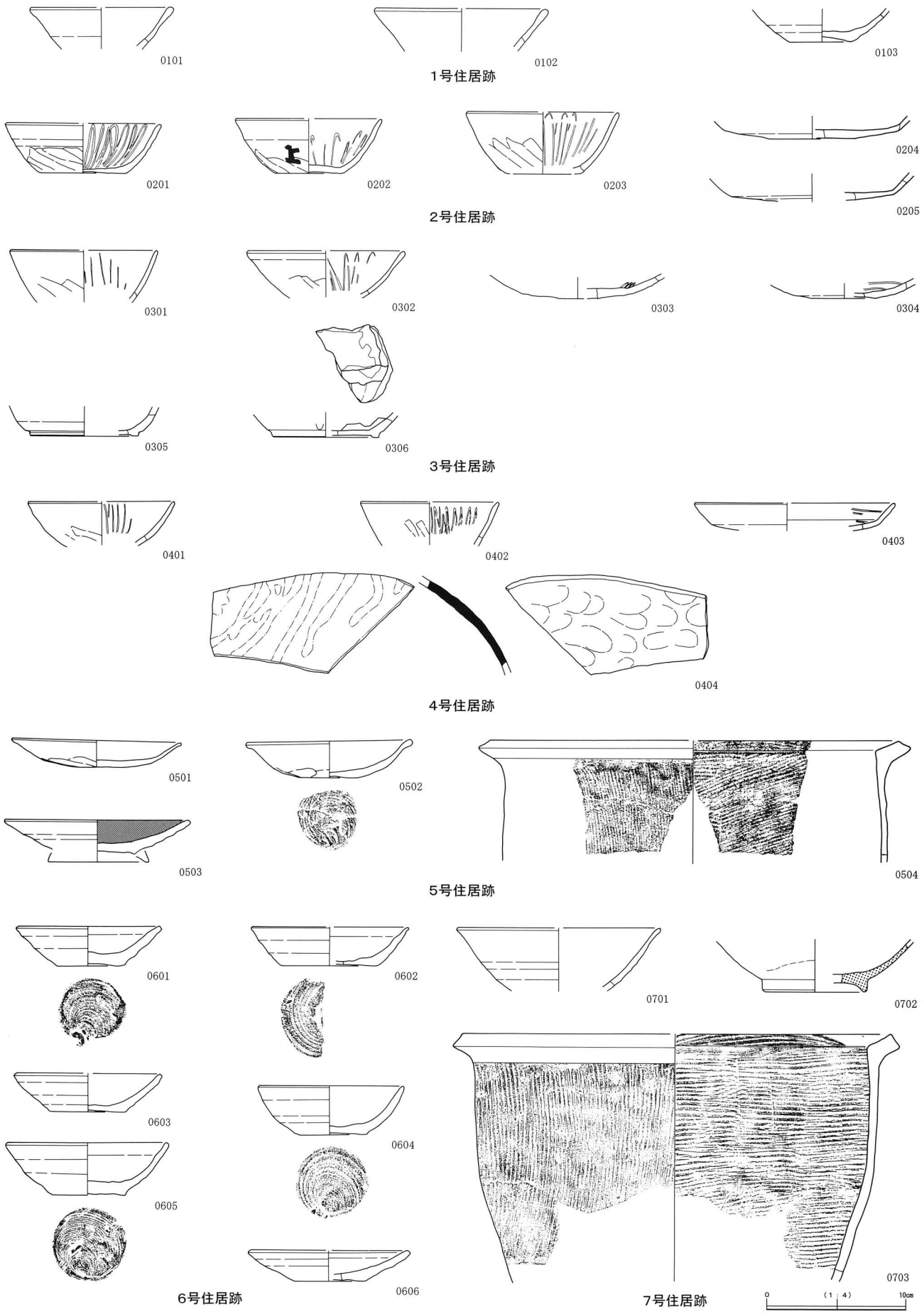


30号住居跡

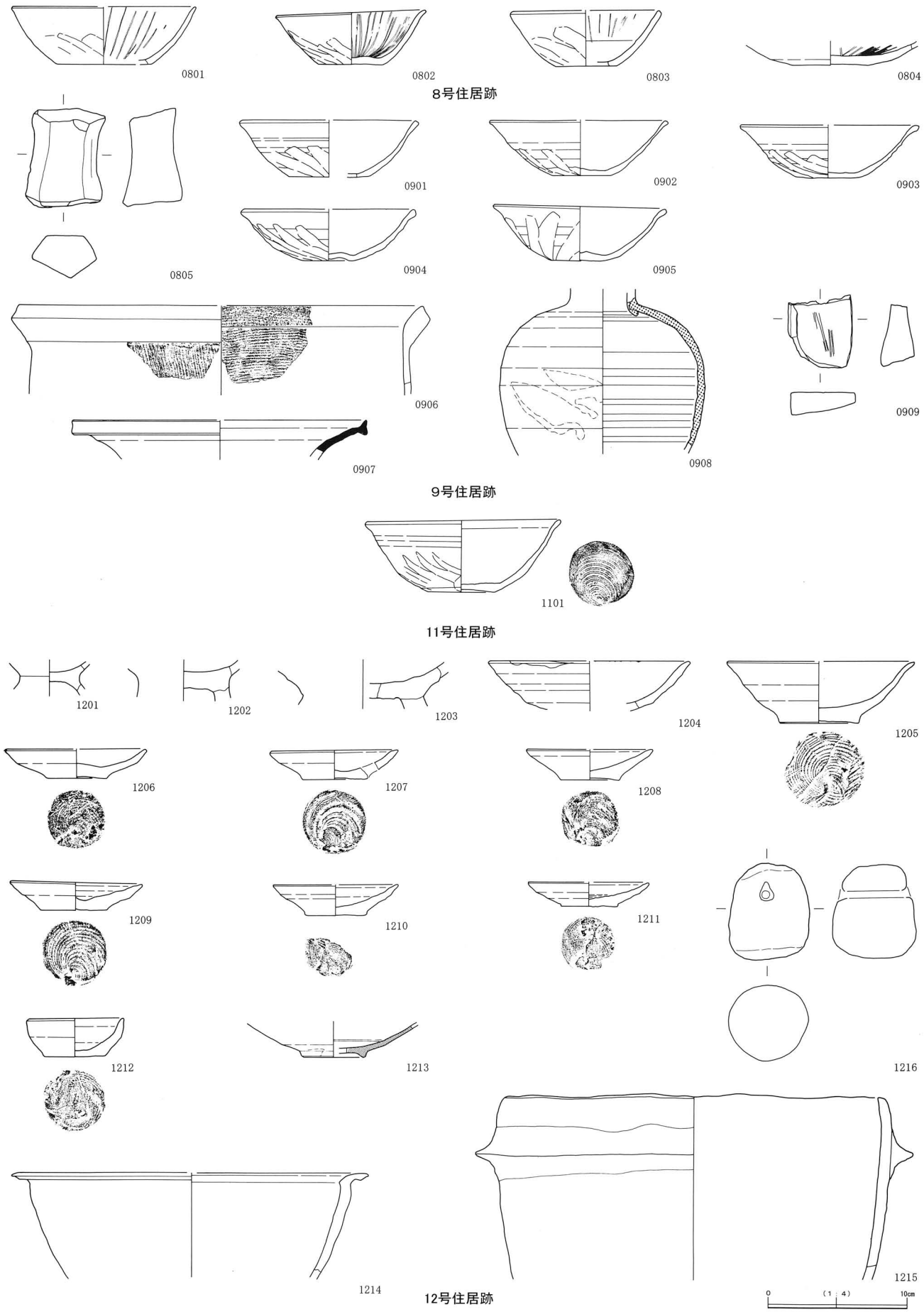
第 10 図　住居跡（7）


37号住
36号住
35号住
30号住
29号住
32号住
a 308.800m
31号住居跡
a 308.900m
30号住
29号住
a 308.800m
32号住居跡
25号住
27号住
26号住
a 309.000m
b 308.800m
25号住
26号住
a 309.000m
33号住居跡
27号住
26号住
a 308.800m
34号住居跡
37号住居跡
36号住
30号住
31号住
a 308.800m
35号住居跡
37号住
35号住
30号住
a 308.800m
36号住居跡
b 308.800m
a 308.800m
カマド(1：40) 50cm
住居跡(1：80) 2m

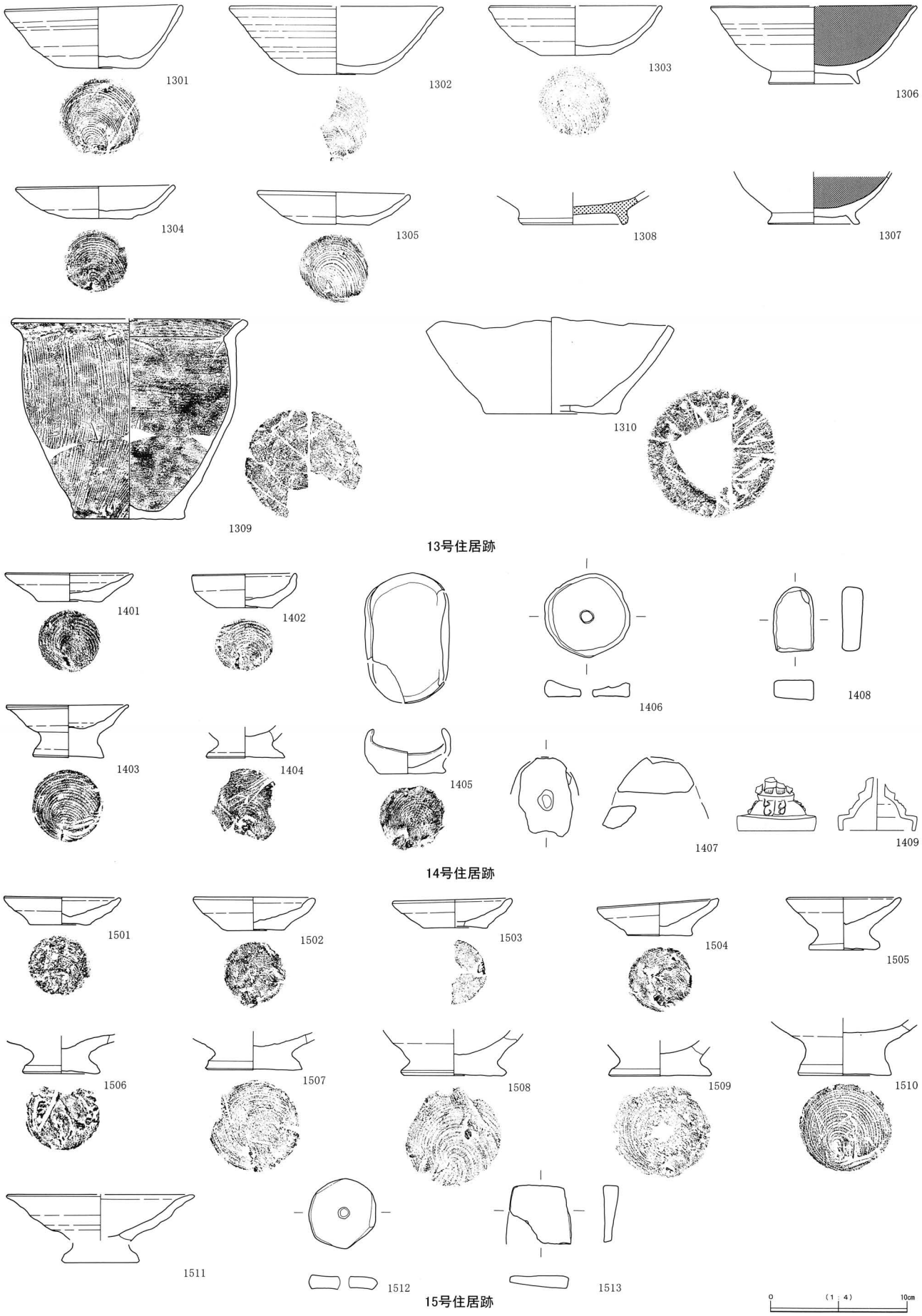
第 11 図　住居跡（8）



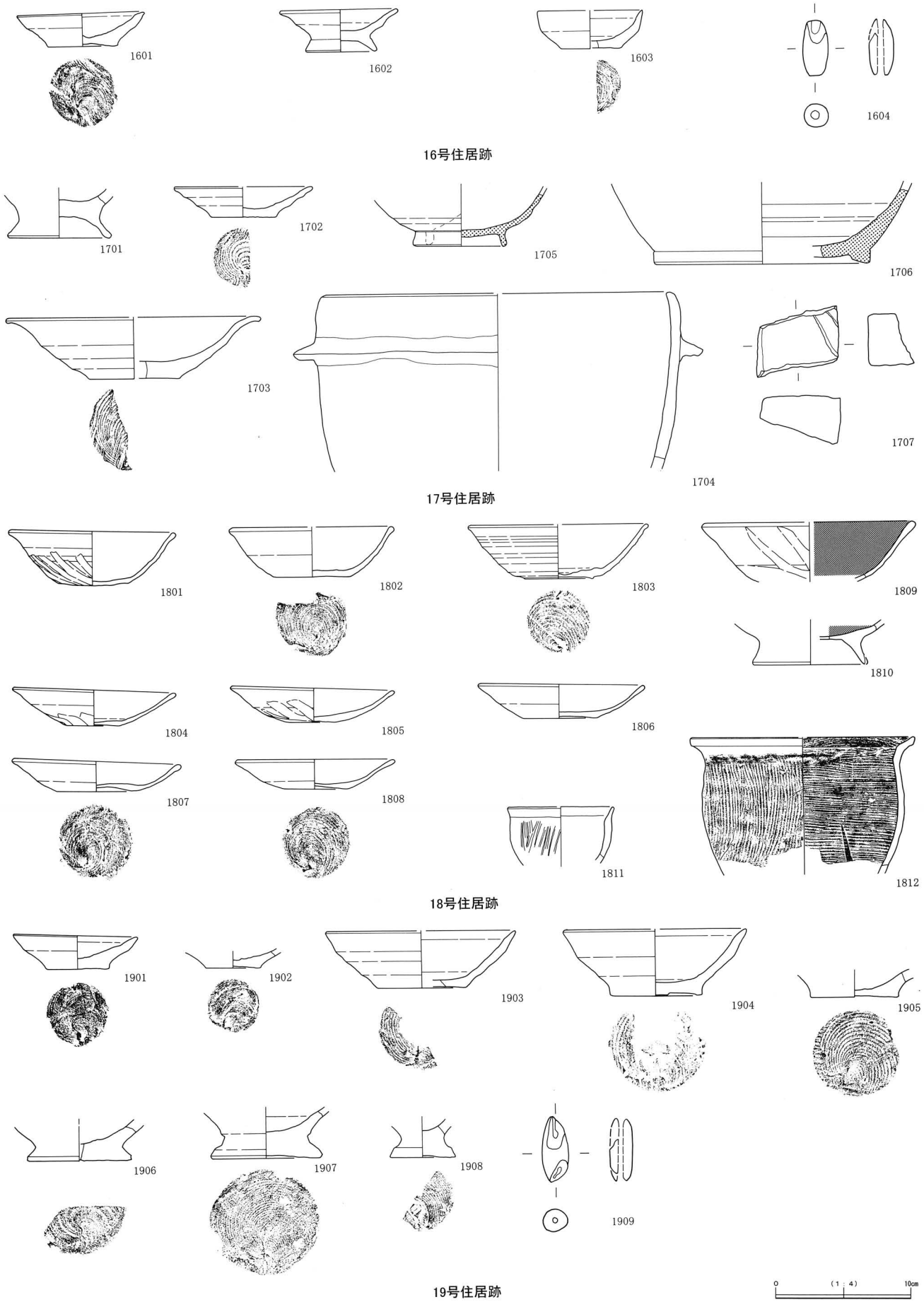
第 12 図　住居跡出土遺物（1）



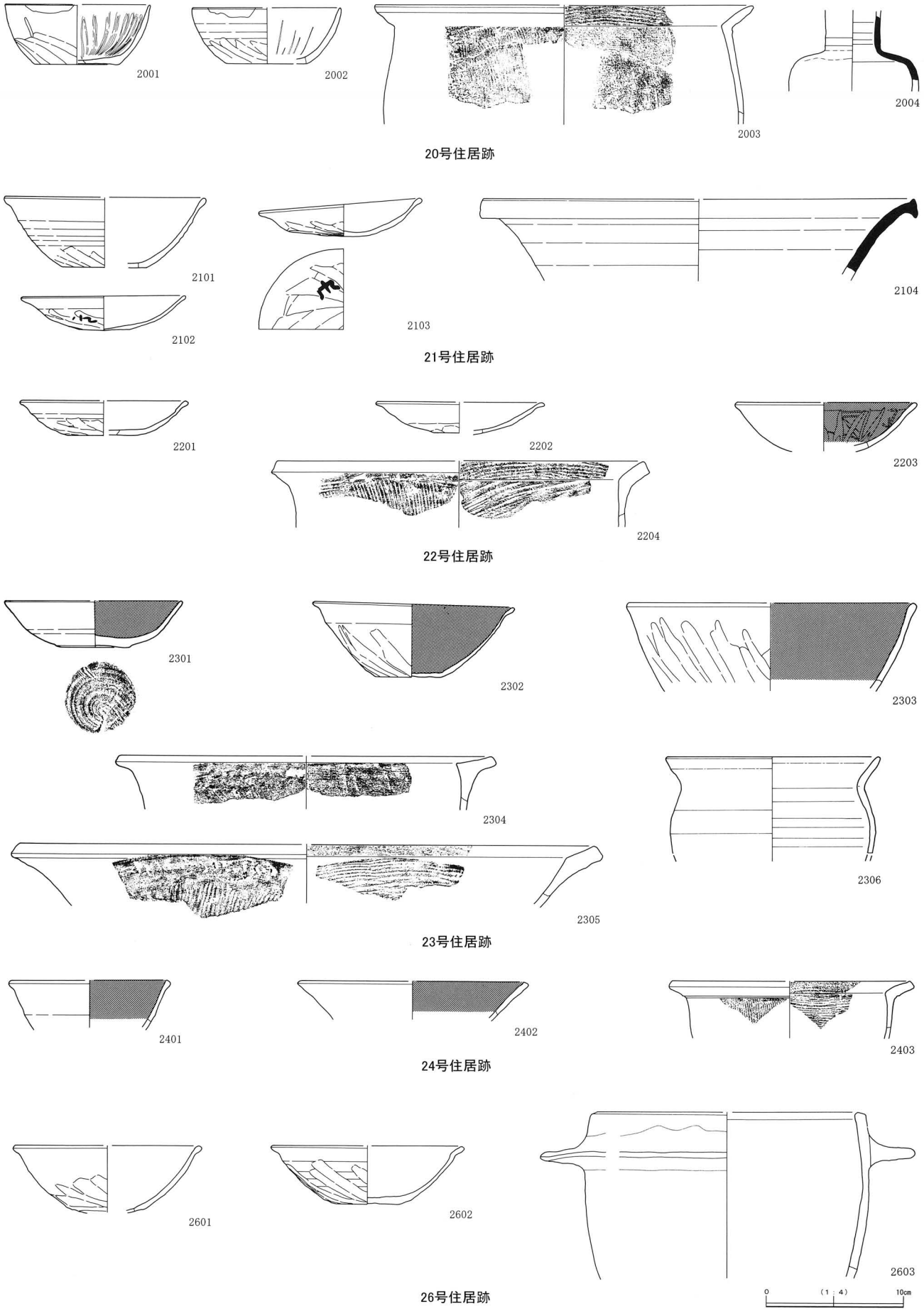
第 13 図　住居跡出土遺物（2）



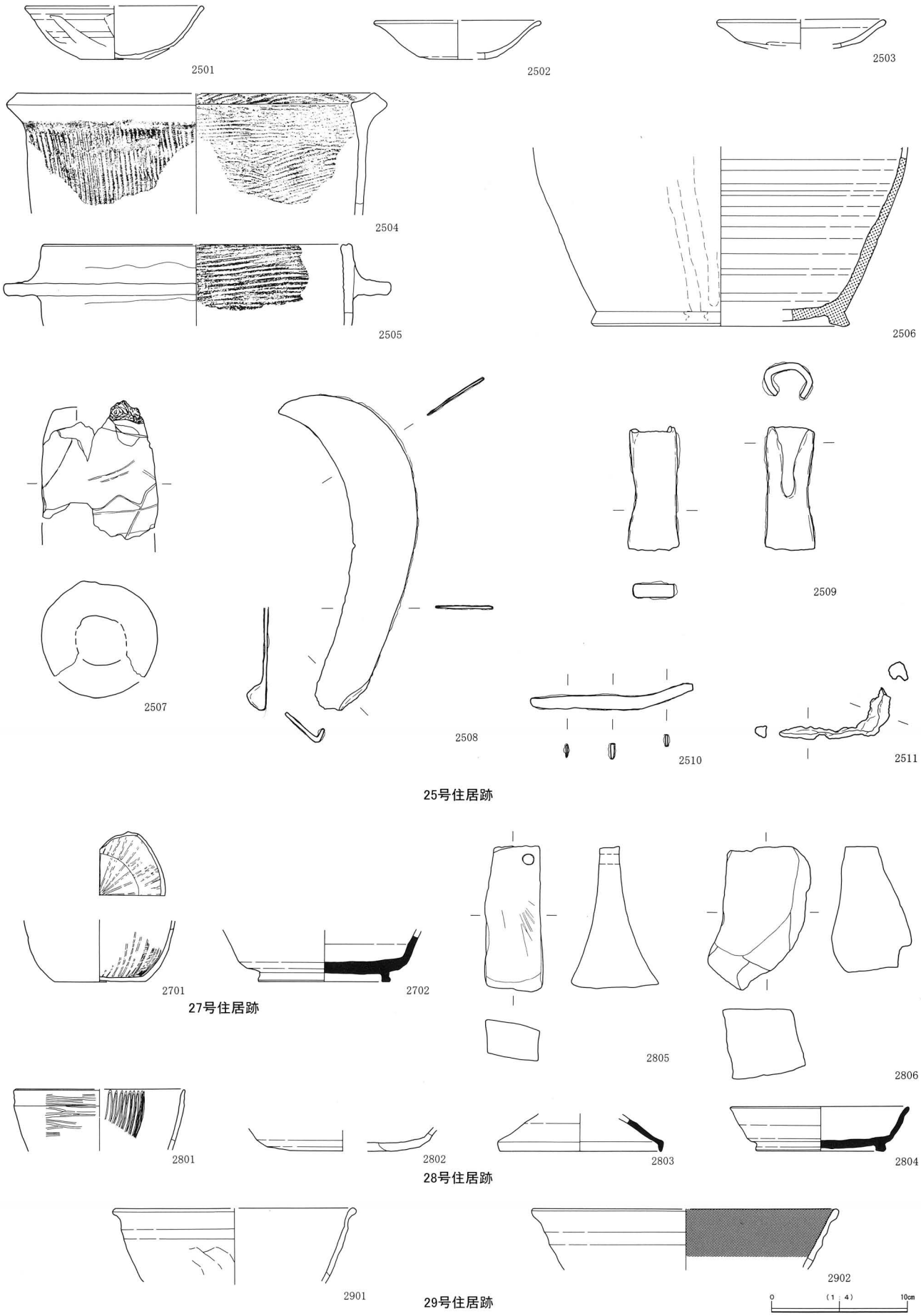
第 14 図　住居跡出土遺物（3）



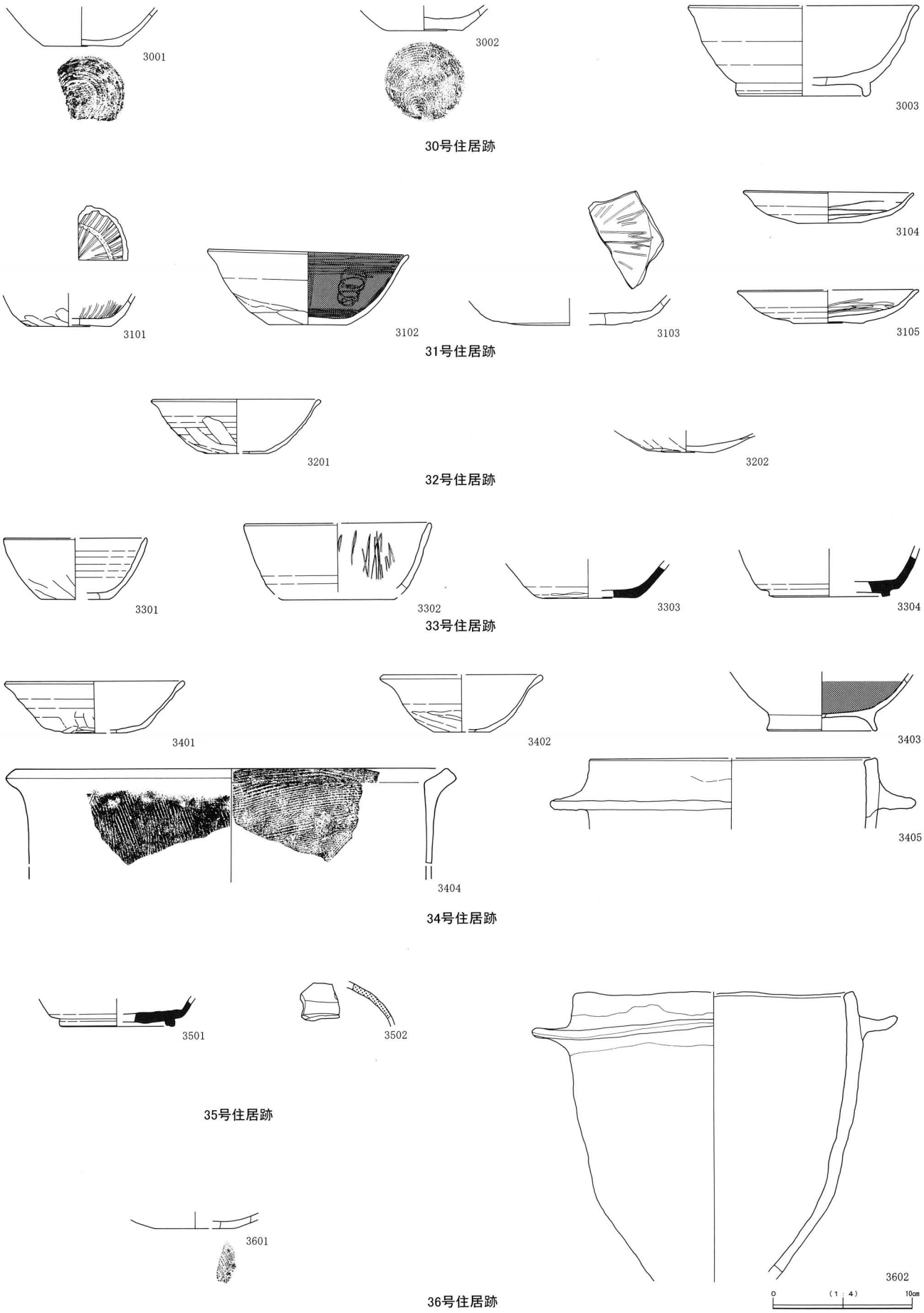
第 15 図　住居跡出土遺物（4）



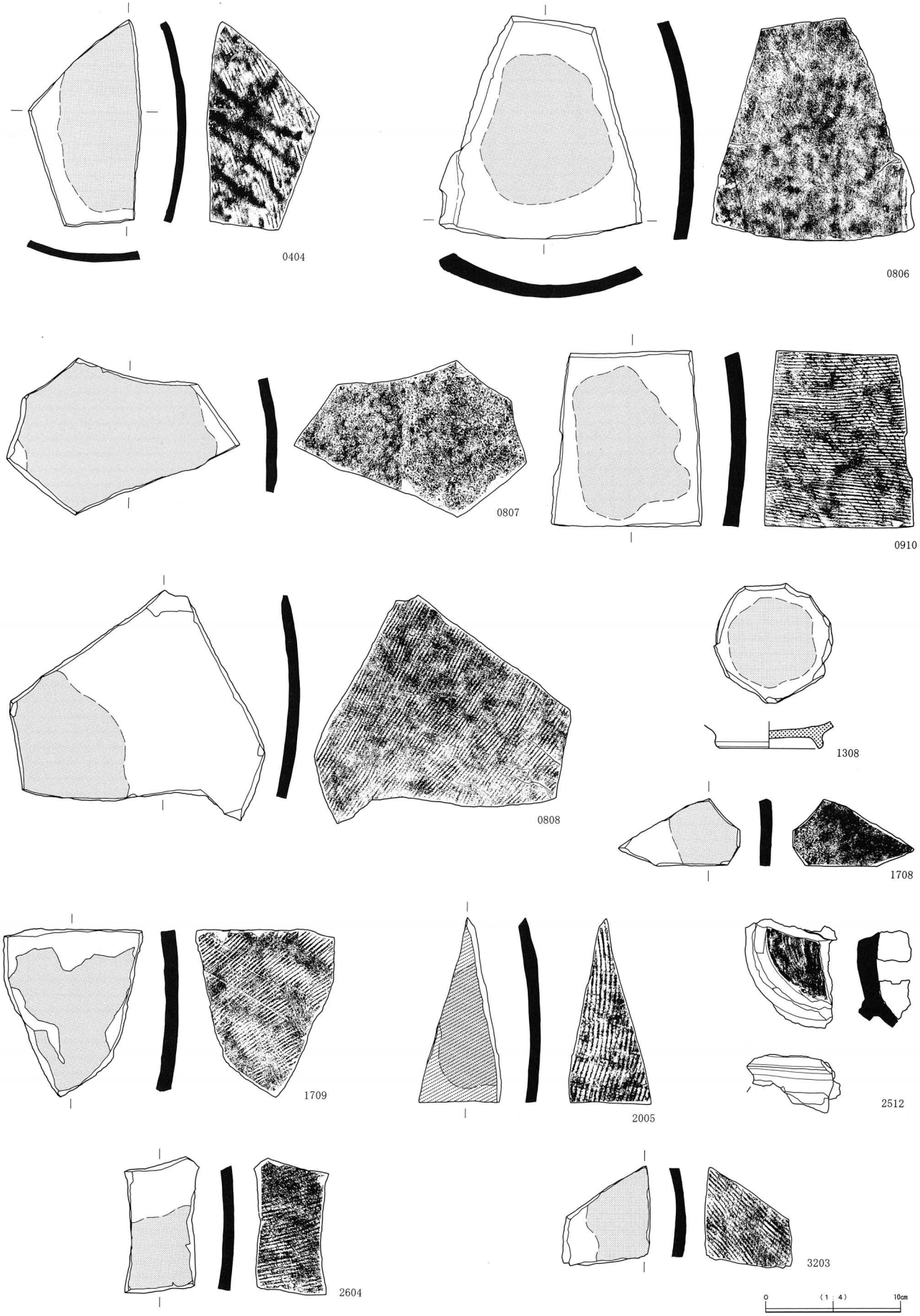
第 16 図　住居跡出土遺物（5）



第 17 図　住居跡出土遺物（6）



第 18 図　住居跡出土遺物（7）



第 19 図　住居跡出土遺物（8）

No.	器種	器形	大きさ(cm) 器高	口径	底径	胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	挿図
0101	土師器	坏	(2.6)	(10.4)		粗、赤色粒子、長石、石英	赤茶褐色	良		12
0102	土師器	坏	(2.5)	(12.4)		粗、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良		12
0103	土師器	坏			(4.4)	粗、赤・白色粒子、石英	赤茶褐色	良	底部糸切痕。	12
0201	土師器	坏	3.7	(11.2)	(6.4)	密、赤色粒子、長石、石英	茶褐色	良	内面体部放射状暗文、外面体部ヘラ削り、底部糸切痕。	12
0202	土師器	坏	4.1	(8.8)	5.0	密、赤色粒子、長石、石英	赤茶褐色	良	内面放射状暗文、外面体部下半ヘラ削り、外面体部墨書「上」。	12
0203	土師器	坏	(11.2)			密、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良	外面ヘラ削り、内面放射状暗文。	12
0204	土師器	皿	(1.1)		(6.3)	密、赤色粒子、長石、石英	暗茶褐色	良	渦巻状暗文。	12
0205	土師器	皿	(1.4)			密、赤色粒子、長石、金色雲母	橙褐色	良	渦巻状暗文。	12
0301	土師器	坏	(3.5)	(10.8)		密、赤色粒子	明茶褐色	良	外面ヘラ削り、内面放射状暗文。	12
0302	土師器	坏	(3.2)	(11.6)		粗、赤色粒子、長石、石英	暗橙褐色	良	外面ヘラ削り、内面放射状暗文。	12
0303	土師器	皿	(1.6)		(7.2)	粗、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良	内面放射状暗文。	12
0304	土師器	皿	(1.3)		(4.6)	やや粗、赤色粒子、長石	赤茶褐色	良	内面渦巻状暗文。	12
0305	土師器	高台坏	(1.6)		(10.0)	密、赤色粒子、長石	明橙褐色	良	外面削り、削り出し高台。	12
0306	土師器	高台坏	(1.4)		(8.0)	密、金色雲母	淡黒灰色	良	内面底部鉄滓融着、坩堝の可能性あり。	12
0401	土師器	坏	(2.9)	(10.8)		密、赤色粒子、長石、石英	暗赤褐色	良	外面ヘラ削り、内面放射状暗文。	12
0402	土師器	坏	(2.7)	(10.0)		密、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良	外面体部ヘラ削り、内面放射状暗文。	12
0403	土師器	皿	(1.9)	(15.6)		密、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良	内面渦巻状暗文。	12
0404	須恵器	甕・転用硯	14.9	8.3	0.6	粗、石英、白・黒色粒子	灰褐色	良	外面叩き痕と釉薬。内面に顕著な磨面。	12・19
0501	土師器	皿	2.1	12.4	4.0	やや密、赤色粒子、石英、長石	橙褐色	良	体部外面ヘラ削り。	12
0502	土師器	皿	2.9	12.2	4.4	やや粗、長石、石英	茶褐色	良	底部糸切痕。	12
0503	土師器	黒色高台皿		13.5		粗、赤色粒子、長石	黄橙褐色	良	内面黒色処理。	12
0504	土師器	甕		30.0		粗、長石、石英、金色雲母	黒茶色	良	内外面ハケ調整。	12
0601	土師器	坏	3.0	10.4	5.2	粗、長石、石英、金色雲母	橙褐色	良	底部糸切痕。	12
0602	土師器	坏	3.9	(11.6)		粗、長石、石英、金色雲母	暗黄褐色	良	底部糸切痕。	12
0603	土師器	坏	2.9	(12.0)	(5.8)	粗、赤色粒子、長石、石英、金色雲母	橙褐色	良		12
0604	土師器	坏	4.6	10.8	5.0	粗、長石、石英、金・黒色雲母、小石	黄褐色	良	底部糸切痕。	12
0605	土師器	坏	4.0	11.6	5.4	やや粗、赤色粒子、長石、金色雲母	橙褐色	良	底部糸切痕。	12
0606	土師器	皿	2.3	10.0	3.4	粗、長石、石英、金色雲母	黄橙褐色	良		12
0701	土師器	坏		(15.0)		密、赤色粒子、長石	橙褐色	良		12
0702	灰釉陶器	碗			(7.2)	密、白・黒色粒子	灰褐色	良	施釉。	12
0703	土師器	甕		(33.6)		粗、長石、石英、金色雲母	暗茶褐色	良	内外面ハケ調整。	12
0801	土師器	坏	(4.4)	(13.6)		粗、赤色粒子、長石	橙褐色	良	内面放射状暗文、外面ヘラ削り。	13
0802	土師器	坏	4.2	11.0	4.8	密、赤色粒子、長石、金色雲母	暗橙褐色	良	内面放射状暗文、外面ヘラ削り。	13
0803	土師器	坏		(10.8)	(4.2)	粗、赤色粒子、長石	暗橙褐色	良	内面放射状暗文、外面ヘラ削り。	13
0804	土師器	皿			5.6	密、赤色粒子、長石	橙褐色	良	内面放射状暗文。	13
0901	土師器	坏	(4.3)	(12.8)	(6.0)	粗、赤色粒子、長石、石英	黄褐色	良	体部外面ヘラ削り。	13
0902	土師器	坏	4.2	(12.8)	4.4	やや粗、赤色粒子、長石	橙褐色	良	外面体部ヘラ削り。	13
0903	土師器	坏	4.0	(12.8)	4.8	密、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良	外面体部ヘラ削り。	13
0904	土師器	坏	3.9	(12.6)	3.6	密、赤色粒子、長石	橙褐色	良	外面体部ヘラ削り。	13
0905	土師器	坏	4.2	12.6	3.7	密、赤色粒子、長石	橙褐色	良	外面体部ヘラ削り。	13
0906	土師器	甕		(30.0)		粗、長石、石英、金色雲母	暗茶褐色	良	内外面ハケ調整。	13
0907	須恵器	壺		(21.8)		密、赤・白粒子	暗茶色	良		13
0908	灰釉陶器	長頸壺				密、黒・白色粒子	灰褐色	良	外面上半部施釉。	13
1101	土師器	坏	5.5	14.2	5.0	やや粗、赤色粒子	明茶褐色	良	外面体部ヘラ削り。	13
1201	土師質土器	脚高高台坏				粗、石英、金色雲母	暗茶褐色	良	ロクロ回転。	13
1202	土師質土器	脚高高台坏				密、赤色粒子、長石	黄褐色	良	ロクロ回転。	13
1203	土師質土器	脚高高台坏				やや粗、赤色粒子、長石、石英	暗黄褐色	良	ロクロ回転。	13
1204	土師質土器	坏		(15.8)		密、赤色粒子、長石	黄褐色	良	ロクロ回転。口縁部スス付着。	13
1205	土師質土器	坏	4.7	13.8	5.8	密、赤色粒子、長石	暗橙褐色	良	底部回転糸切痕。	13
1206	土師質土器	小皿	2.2	10.3	4.4	粗、長石、金・黒色雲母	暗橙褐色	良	底部回転糸切痕。	13
1207	土師質土器	小皿	2.3	9.4	4.9	粗、長石、金・黒色雲母	暗赤褐色	良	底部回転糸切痕。	13
1208	土師質土器	小皿	2.3	9.2	4.4	粗、長石、金・黒色雲母	暗赤褐色	良	底部回転糸切痕。	13
1209	土師質土器	小皿	2.2	9.7	5.0	粗、長石、金・黒色雲母	暗赤褐色	良	底部回転糸切痕。	13
1210	土師質土器	小皿	2.3	9.2	4.6	粗、長石、金・黒色雲母	暗赤褐色	良	底部回転糸切痕。	13
1211	土師質土器	小皿	1.8	(8.8)	4.2	粗、長石、金・黒色雲母	暗赤褐色	良	底部回転糸切痕。	13
1212	土師質土器	小椀	2.9	7.3	4.6	やや粗、石英、長石、金色雲母	赤茶褐色	良	底部回転糸切痕。	13
1213	磁器	白磁皿			4.6	密、黒色粒子	乳白色	良	大宰府編年白磁XI類（10c後半～11c中頃）。	13
1214	土師器	鉢？		(22.0)		粗、長石、石英、小石	暗赤褐色	良	口縁部が強く外反。	13
1215	土師器	羽釜		(27.2)		粗、長石、石英、金色雲母	暗茶褐色	良	断面三角の鍔が全周。	13
1216	土製品	権（おもり）	7.4	6.0	5.8	粗、赤・白色粒子、小石、石英、金色雲母	暗橙褐色	良	上部に直径約6mmの穿孔あり。	13
1301	土師器	坏	4.8	13.1	5.5	密、、赤色粒子、長石	暗橙褐色	良	底部回転糸切痕。	14
1302	土師器	坏	5.1	15.6	5.8	密、、赤色粒子、長石	橙褐色	良	底部回転糸切痕。	14
1303	土師器	坏	3.6	(13.6)	5.2	密、、赤色粒子、長石	橙褐色	良	底部回転糸切痕。	14
1304	土師器	皿	2.6	11.6	5.0	密、、赤色粒子、長石	橙褐色	良	底部回転糸切痕。	14
1305	土師器	皿	2.5	10.9	5.0	密、、赤色粒子、長石	橙褐色	良	底部回転糸切痕。	14
1306	土師器	高台坏	5.8	(15.2)	(6.6)	密、、赤色粒子、長石	橙褐色	良	内黒土器。	14
1307	土師器	高台坏			(6.8)	密、、赤色粒子、長石	橙褐色	良	内黒土器。	14
1308	灰釉陶器	皿・転用硯				密、白・黒色粒子	灰白色	良	内面底部硯面。周縁部打撃調整。	14・19
1309	土師器	小型甕	15.0	(17.0)	8.4	粗、長石、石英、金色雲母	暗赤茶褐色	良		14
1310	土師器	甕			9.7	粗、赤色粒子、石英、金・黒色雲母、小石	暗赤褐色	良	体部割れ口部分に擦痕が全周。	14
1401	土師質土器	小皿	2.1	9.4	4.6	粗、長石、石英、金色雲母	暗茶褐色	良	底部回転糸切痕。	14
1402	土師質土器	小椀	2.6	7.5	4.2	粗、長石、石英、金色雲母	赤茶褐色	良	底部回転糸切痕。	14
1403	土師質土器	柱状高台小皿	4.0	9.0	5.2	粗、金・黒色雲母	暗赤茶褐色	良	底部回転糸切痕。	14
1404	土師質土器	台付小皿			(5.8)	粗、長石、金・黒色雲母	暗茶褐色	良	底部回転糸切痕。	14
1405	土師質土器	耳皿	3.1	5.6	5.0	やや粗、石英、金・黒色雲母	暗赤茶褐色	良	底部回転糸切痕。	14
1406	土師質土器	土器片製円盤				粗、長石、金・黒色雲母	明橙褐色	良	直径6.2cm、幅1.2cm、穿孔8mm。全周磨耗。	14
1407	土製品	権（おもり）				粗、長石、石英、黒色雲母	暗茶褐色	良	直径約6mmの穿孔あり。1216と類似。	14

第1表　住居跡出土遺物一覧（1）

No.	器種	器形	大きさ(cm)			胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	挿図
			器高	口径	底径					
1501	土師質土器	小皿	2.1	8.5	5.5	粗、金・黒色雲母	暗茶褐色	良	底部回転糸痕。	14
1502	土師質土器	小皿	2.5	8.7	4.6	粗、長石、金・黒色雲母	暗黒茶褐色	良	底部回転糸痕。	14
1503	土師質土器	小皿	2.2	(8.7)	4.8	粗、長石、金・黒色雲母	黒茶色	良	底部回転糸痕。	14
1504	土師質土器	小皿	2.8	8.8	4.8	粗、金・黒色雲母	暗赤褐色	良	底部回転糸痕。	14
1505	土師質土器	柱状高台小皿	3.9	(8.3)	5.0	粗、長石、金・黒色雲母	黒茶褐色	良	底部回転糸痕。	14
1506	土師質土器	台付坏			5.6	粗、長石、石英、金・黒色雲母	暗橙褐色	良	底部回転糸痕。	14
1507	土師質土器	台付坏			7.2	粗、金・黒色雲母	暗茶褐色	良	底部回転糸痕。	14
1508	土師質土器	台付坏			7.4	粗、長石、金・黒色雲母	暗赤茶褐色	良	底部回転糸痕。	14
1509	土師質土器	台付坏			7.2	粗、長石、石英、金・黒色雲母	暗赤茶褐色	良	底部回転糸痕。	14
1510	土師質土器	柱状高台坏			6.8	粗、長石、金・黒色雲母	茶褐色	良	底部回転糸痕。	14
1511	土師質土器	柱状高台坏？		(13.0)		粗、金・黒色雲母	暗赤茶褐色	良		14
1512	土師質土器	土器片製円盤				粗、長石、金・黒色雲母	暗赤茶褐色	良	直径5.2cm、幅9mm、穿孔6mm。全周磨耗。	14
1601	土師質土器	小皿	2.6	9.3	4.6	粗、長石、金・黒色雲母	暗茶褐色	良	底部回転糸痕。	15
1602	土師質土器	脚高高台小皿	3.2	5.5	5.0	粗、長石、金・黒色雲母	赤茶褐色	良		15
1603	土師質土器	小椀	2.9	7.8	4.4	粗、長石、金・黒色雲母	赤茶褐色	良	底部回転糸痕。	15
1604	土製品	土錘				密、赤色粒子、長石	灰黒褐色	良	長さ4.2cm、幅1.9cm、穿孔直径4～5mm。	15
1701	土師質土器	脚高高台坏			(7.4)	密、赤色粒子、長石、金色雲母	暗黄褐色	良		15
1702	土師質土器	小皿	2.3	(10.0)	(5.0)	粗、黒色粒子、長石、金色雲母	赤茶褐色	良	底部回転糸痕。	15
1703	土師質土器	坏？	4.7	(18.8)	(6.8)	粗、長石、金色雲母	暗茶褐色	良	底部回転糸痕。	15
1704	土師器	羽釜		(25.2)		粗、長石、石英、金色雲母	暗橙褐色	良	口縁部下方に鍔が全周。	15
1705	灰釉陶器	碗			6.3	密、白・黒色粒子	灰白色	良		15
1706	灰釉陶器	壺？			(16.0)	粗、白・黒色粒子	灰褐色	良		15
1801	土師器	坏	4.7	(12.1)	5.3	粗、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良	外面体部ヘラ削り。	15
1802	土師器	坏	3.8	(12.2)	(5.0)	密、赤色粒子、石英	橙褐色	良	底部回転糸痕。	15
1803	土師器	坏	4.1	(13.0)	5.0	粗、赤色粒子、長石	橙褐色	良	底部回転糸痕。	15
1804	土師器	皿	2.9	11.9	4.2	粗、赤色粒子、長石、石英	橙茶褐色	良	外面体部下半ヘラ削り。	15
1805	土師器	皿	2.7	12.0	3.7	密、赤色粒子、長石	橙褐色	良	外面体部下半ヘラ削り。	15
1806	土師器	皿	2.7	12.0	5.6	密、長石	橙褐色	良	底部外面ナデ。	15
1807	土師器	皿	2.6	12.3	5.6	粗、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良	底部回転糸痕。	15
1808	土師器	皿	2.2	11.5	4.6	粗、赤色粒子、長石、石英	暗茶褐色	良	底部回転糸痕。	15
1809	土師器	高台坏		(15.2)		密、赤色粒子、長石	橙褐色	良	内黒土器。外面体部ヘラ削り。	15
1810	土師器	高台坏			(8.4)	密、赤色粒子、長石	橙褐色	良	内黒土器。	15
1811	土師器	小型甕		(7.8)		粗、長石、石英	黒褐色	良	外面体部縦方向のハケ目。	15
1812	土師器	甕		(16.4)		やや粗、長石、金・黒色雲母	暗赤茶褐色	良	内面横方向のハケ目、外面縦方向のハケ目。	15
1901	土師質土器	小皿	2.7	9.1	4.6	粗、金・黒色雲母	黒茶褐色	良	底部回転糸切痕。	15
1902	土師質土器	小皿			4.1	やや粗、長石、金・黒色雲母	暗茶褐色	良	底部回転糸切痕。	15
1903	土師質土器	坏	4.3	(14.0)	(6.6)	粗、金・黒色雲母	茶褐色	良	底部回転糸切痕。	15
1904	土師質土器	坏	5.0	(13.4)	(6.8)	粗、金・黒色雲母	暗茶褐色	良	底部回転糸切痕。	15
1905	土師質土器	坏			6.6	粗、金・黒色雲母	黒茶褐色	良	底部回転糸切痕。	15
1906	土師質土器	台付坏			(7.8)	粗、長石、金・黒色雲母	暗茶褐色	良	底部回転糸切痕。	15
1907	土師質土器	柱状高台坏			8.0	粗、長石、金・黒色雲母	暗赤茶褐色	良	底部回転糸切痕。	15
1908	土師質土器	柱状高台小皿			(5.0)	粗、長石、金・黒色雲母	橙褐色	良	底部回転糸切痕。	15
1909	土製品	土錘				密、赤色粒子、長石	黒茶褐色		長さ4.2cm、幅2.0cm、穿孔直径4mm。	15
2001	土師器	坏	4.5	(10.8)	(6.4)	密、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良	内面放射状暗文、外面体部ヘラ削り。	16
2002	土師器	坏	4.2	(10.8)	(8.0)	密、赤色粒子、長石	暗橙褐色	良	内面放射状暗文、外面体部ヘラ削り。	16
2003	土師器	甕		(27.8)		粗、長石、金・黒色雲母	暗茶褐色	良	内面横方向のハケ目、外面縦方向のハケ目。	16
2004	須恵器	小型壺				粗、黒色粒子	暗灰色	良	ロクロ。	16
2101	土師器	坏	5.3	(14.7)	(6.4)	密、赤色粒子、長石、金色雲母	暗橙褐色	良	外面体部下半ヘラ削り。内黒土器。	16
2102	土師器	皿	2.7	11.9	3.8	密、赤色粒子、長石	橙白色	良	外面体部下半ヘラ削り。墨書あり。	16
2103	土師器	皿	2.9	11.8	2.0	密、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良	外面体部下半ヘラ削り。墨書あり。	16
2104	須恵器	大甕		(31.6)		密、白・黒色粒子	黒灰褐色	良		16
2201	土師器	皿	2.6	(12.2)	(5.0)	密、赤色粒子、長石	橙褐色	良	外面体部下半ヘラ削り。	16
2202	土師器	皿		(12.3)		やや粗、赤色粒子、長石、黒色雲母	橙褐色	良	外面体部下半ヘラ削り。	16
2203	土師器	坏		(13.0)		粗、長石、黒色雲母	暗橙褐色	良	内黒土器。内面暗文あり。	16
2204	土師器	甕		(27.0)		粗、長石、石英、金色雲母、小石	暗茶褐色	良	内面横方向のハケ目、外面縦方向のハケ目。	16
2301	土師器	坏	3.5	(13.0)	5.5	粗、長石、石英、黒色雲母	暗茶色	良	底部回転糸切痕。	16
2302	土師器	坏	7.7	14.8	5.0	密、赤色粒子、長石	橙茶褐色	良	外面体部ヘラ削り。	16
2303	土師器	黒色鉢		(21.0)		密、赤色粒子、長石、石英	橙茶褐色	良	外面体部ヘラ削り、内面黒色。	16
2304	土師器	甕		(27.4)		粗、長石、金色雲母	暗赤褐色	良		16
2305	土師器	鉢		(42.8)		粗、長石、金色雲母	赤茶褐色	良	内面横方向のハケ目、外面縦方向のハケ目。	16
2306	土師器	小型甕		(15.5)		粗、長石、石英、金色雲母	黄橙褐色	良	ロクロ整形、口唇部僅かにナデ。	16
2401	土師器	坏		(11.4)		粗、長石、金色雲母	橙褐色	良	内黒土器。	16
2402	土師器	坏		(16.6)		密、赤色粒子、長石	橙褐色	良	内黒土器。	16
2403	土師器	甕		(17.5)		粗、長石、金・黒色雲母	暗茶褐色	良	内面横方向のハケ目、外面縦方向のハケ目。	16
2501	土師器	坏	4.0	(12.9)	(5.0)	粗、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良	外面体部ヘラ削り。	17
2502	土師器	坏	2.9	(12.2)	(4.2)	粗、赤色粒子、長石、石英	赤橙褐色	良		17
2503	土師器	皿		(12.1)		粗、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良	外面体部下半ヘラ削り。	17
2504	土師器	甕		(26.2)		粗、長石、石英、金色雲母	赤褐色	良	内面横方向のハケ目、外面縦方向のハケ目。	17
2505	土師器	羽釜		(21.4)		粗、長石、石英、金色雲母	赤橙褐色	良	内面横方向のハケ目。	17
2506	灰釉陶器	壺？			(18.6)	やや粗、白・黒色雲母	灰白色	良		17
2507	土製	フイゴの羽口				密、赤色粒子、長石、黒色雲母、	灰黄褐色	良	最大長10.5cm、最大幅8.6cm、最大厚2.6cm。	17
2601	土師器	坏			(13.6)	粗、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良	外面体部ヘラ削り。	16
2602	土師器	坏	4.4	(14.2)	4.8	粗、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良	外面体部ヘラ削り。	16
2603	土師器	羽釜		(19.4)		やや粗、長石、石英、金・黒色雲母	赤褐色	良	内面横方向のハケ目、外面縦方向のハケ目。	16
2701	土師器	坏			(6.8)	密、赤色粒子、長石	黄橙褐色	良	内面放射状暗文。	17
2702	須恵器	高台坏			(9.6)	粗、白色粒子、長石、黒色雲母	暗赤茶褐色	良		17
2801	土師器	坏		(12.5)		密、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良	内面放射状暗文、外面横方向の磨き。	17
2802	土師器	盤状坏？			(8.8)	密、赤色粒子、長石	橙褐色	良		17
2803	須恵器	蓋			(11.8)	粗、白色粒子	青灰色	良		17
2804	須恵器	高台坏	3.4	13.0	9.3	粗、白色粒子、長石、小石	灰褐色	良		17
2901	土師器	坏ｏｒ鉢		(17.6)		密、赤色粒子、長石	暗茶褐色	良	外面体部ヘラ削り。	17
2902	土師器	坏ｏｒ鉢		(22.3)		密、赤色粒子、長石	暗橙褐色	良		17

第２表　住居跡出土遺物一覧（2）

No.	器種	器形	大きさ			胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	挿図
			器高	口径	底径					
3001	土師器	坏	2.4		(5.6)	粗、赤色粒子、長石、小石	黄褐色	良	底部回転糸切痕。	18
3002	土師器	坏			5.8	密、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良	底部回転糸切痕。	18
3003	土師器	高台坏	6.8	(16.6)	(9.0)	密、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良	内面底部に線刻あり。	18
3101	土師器	坏			(6.2)	密、赤色粒子、長石	赤橙褐色	良	内面放射状暗文、外面体部下半ヘラ削り。	18
3102	土師器	黒色坏	5.7	14.6	5.8	やや粗、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良	内黒土器。内面縦・横位と渦巻状の暗文。	18
3103	土師器	皿			(6.6)	やや粗、赤色粒子、長石、黒色雲母	橙褐色	良	内面放射状暗文。	18
3104	土師器	皿	2.5	13.3	4.5	やや粗、赤色粒子、長石	橙褐色	良	内面渦巻状暗文。	18
3105	土師器	皿	2.5	(13.1)	(5.1)	やや粗、赤色粒子、長石、石英	黄褐色	良	内面渦巻状暗文。	18
3201	土師器	坏	5.1	(10.2)	(4.8)	密、赤色粒子、長石	白黄褐色	良	外面体部ヘラ削り。	18
3202	土師器	皿			(3.6)	やや粗、赤色粒子、長石	橙褐色	良	外面体部ヘラ削り。	18
3301	土師器	坏	4.6	(10.5)	(5.0)	やや粗、赤色粒子、長石、石英	橙褐色	良	外面体部下半ヘラ削り。	18
3302	土師器	坏	(4.9)	13.8		密、赤色粒子、、長石、石英、金色雲母	橙褐色	良	内面放射状暗文。	18
3303	須恵器	坏			(6.4)	やや粗、白色粒子	灰褐色	良	外面底部縁辺ヘラ削り。	18
3304	須恵器	高台坏			(8.8)	やや粗、白色粒子、長石	明茶褐色	良		18
3401	土師器	坏	3.9	(13.0)	(4.6)	粗、赤色粒子、長石、小石	橙褐色	良	外面体部下半ヘラ削り。	18
3402	土師器	坏	4.2	(11.6)	(4.2)	粗、赤色粒子、長石	橙褐色	やや良	外面体部下半ヘラ削り。	18
3403	土師器	黒色高台坏			(7.8)	粗、赤色粒子、長石、金・黒色雲母	黄褐色	良		18
3404	土師器	甕		(32.0)		粗、長石、金色雲母	赤茶褐色	良	内面横方向のハケ目、外面縦方向のハケ目。	18
3405	土師器	羽釜		(21.0)		粗、長石、黒・金色雲母、小石	暗赤茶褐色	良		18
3501	須恵器	高台坏			(8.4)	粗、白色粒子	灰白色	良		18
3502	灰釉陶器	壺？				粗、黒色粒子	灰白色	良		18
3601	土師器	皿？			(6.0)	やや粗、赤色粒子、黒色雲母	黄褐色	良	底部回転糸切痕。	18
3602	土師器	羽釜		(20.4)		粗、長石、金色雲母	赤茶褐色	良	内面横方向のハケ目、外面縦方向のハケ目。	18

第３表　住居跡出土遺物一覧（3）

No.	器種	器形	大きさ(cm)			胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	挿図
			最大長	最大幅	最大厚					
0404	須恵器	甕・転用硯	14.9	8.3	0.6	粗、石英、白・黒色粒子	灰褐色	良	外面叩き痕と釉薬。内面に顕著な磨面。	12・19
0806	須恵器	甕・転用硯	16.6	15.1	1.4	粗、石英、白色粒子	黒灰色	良	内面に磨面。	19
0807	須恵器	甕・転用硯	11.7	17.3	0.8	粗、白・黒色粒子	灰色	良	内面に磨面。	19
0808	須恵器	甕・転用硯	17.2	18.8	0.8	粗、白・黒色粒子	灰色	良	内面の片側に磨面。	19
0910	須恵器	甕・転用硯	13.2	11.1	1.1	粗、石英、白・黒色粒子	黒灰色	良	内面に僅かに墨痕と磨面。	19
1308	灰釉陶器	皿・転用硯	8.9	8.7	0.6	密、白・黒色粒子	灰白色	良	内面底部硯面。周縁部打撃調整。	14・19
1708	須恵器	甕・転用硯	(5.0)	(9.0)	0.85	粗、石英、白色粒子	黒灰色	良	内面に磨面。	19
1709	須恵器	甕・転用硯	12.5	10.3	1.2	粗、白・黒色粒子、小礫	灰色	良	内面に磨面。	19
2005	須恵器	甕・転用硯	13.7	6.0	1.0	粗、白・黒色粒子	青灰色	良	朱墨。内面に磨面。	19
2512	須恵器	壺・転用硯	8.1	6.8	1.9	密、白色粒子	黒灰褐色	良	壺底部の外面を転用。	19
2604	須恵器	甕・転用硯	9.8	5.6	0.8	粗、白色粒子	赤茶褐色	良	内面に磨面。26・27住一括。	19
3203	須恵器	甕・転用硯	6.7	6.4	0.8	粗、白・黒色粒子	黒灰色	良	内面に磨面。	19

第４表　住居跡出土遺物一覧（4）

No.	計測値（cm）			石材	特徴	挿図
	最大長	最大幅	最大厚			
0805	7.3	5.7	3.2	花崗岩	砥石、側面の５面が砥面。	13
0909	5.0	4.7	2.4	花崗岩	砥石、砥面中央に擦痕あり。	13
1408	4.8	2.9	1.4	花崗岩	砥石。	14
1513	4.3	4.3	1.1	花崗岩	砥石。	14
1707	4.2	6.0	3.5	花崗岩	砥石。	15
2703	4.8	4.7	2.3	花崗岩	砥石。	
2704	6.3	3.2	1.2	花崗岩	砥石。	
2805	11.0	4.2	6.4	花崗岩	砥石、表裏に湾曲した砥面。	17
2806	10.4	6.3	5.9	花崗岩	砥石。	17

第５表　住居跡出土石器一覧

No.	計測値（cm）			特徴	挿図
	最大長	最大幅	最大厚		
2508	23.4	5.2	0.5	鉄鎌。	17
2509	8.9	3.6	2.4	鉄斧。	
2510	11.9	1.3	0.8	鉋。	

第６表　住居跡出土鉄製品一覧

No.	残存部計測値（cm）			特徴	挿図
	最大長	最大幅	最大厚		
1409	4.0	5.6	0.6	仏像脚部と台座のみ残存。	14
2511	8.6	3.6	1.3	不明。	17

第７表　住居跡出土銅製品一覧

2．その他の遺構

a. 土坑（第20、21図、第7表、図版7）

調査をおこなった範囲内では、調査区Ａの北東側にかけて土坑が偏在する傾向がみられた。

b. ピット（第20図、第8表）

ピットは、調査区Ａの北西側でまとまり確認されたが、互いのピットどおしで規則的に並ぶものはみられない。

しかし、調査区の南西側に位置する土坑12・13は坑内ないし覆土中にピット状の掘り込みが観察されており、これら両土坑と北東部に位置するＰ８・９との位置関係からみて四本柱の建物跡であった可能性も考えられる。

No.	グリッド	形態	規模（m）			備考	図版
			長軸	短軸	深さ		
1号	A－4	方形	1.07	0.75	0.32		
2号	A－4	不整形	0.75	0.70	0.38		7
3号	A－3	方形	(0.97)	0.97	0.92		7
4号	A－3	不整形	1.08	0.75	0.20		
5号	B－4	不整形	1.65	1.25	0.17		
6号	A－4	不整形	(1.10)	0.63	0.37		7
7号	B－2	不整形	0.78	0.64	0.27		
8号	A－3	不整形	0.92	0.80	0.47	12号住より古。	7

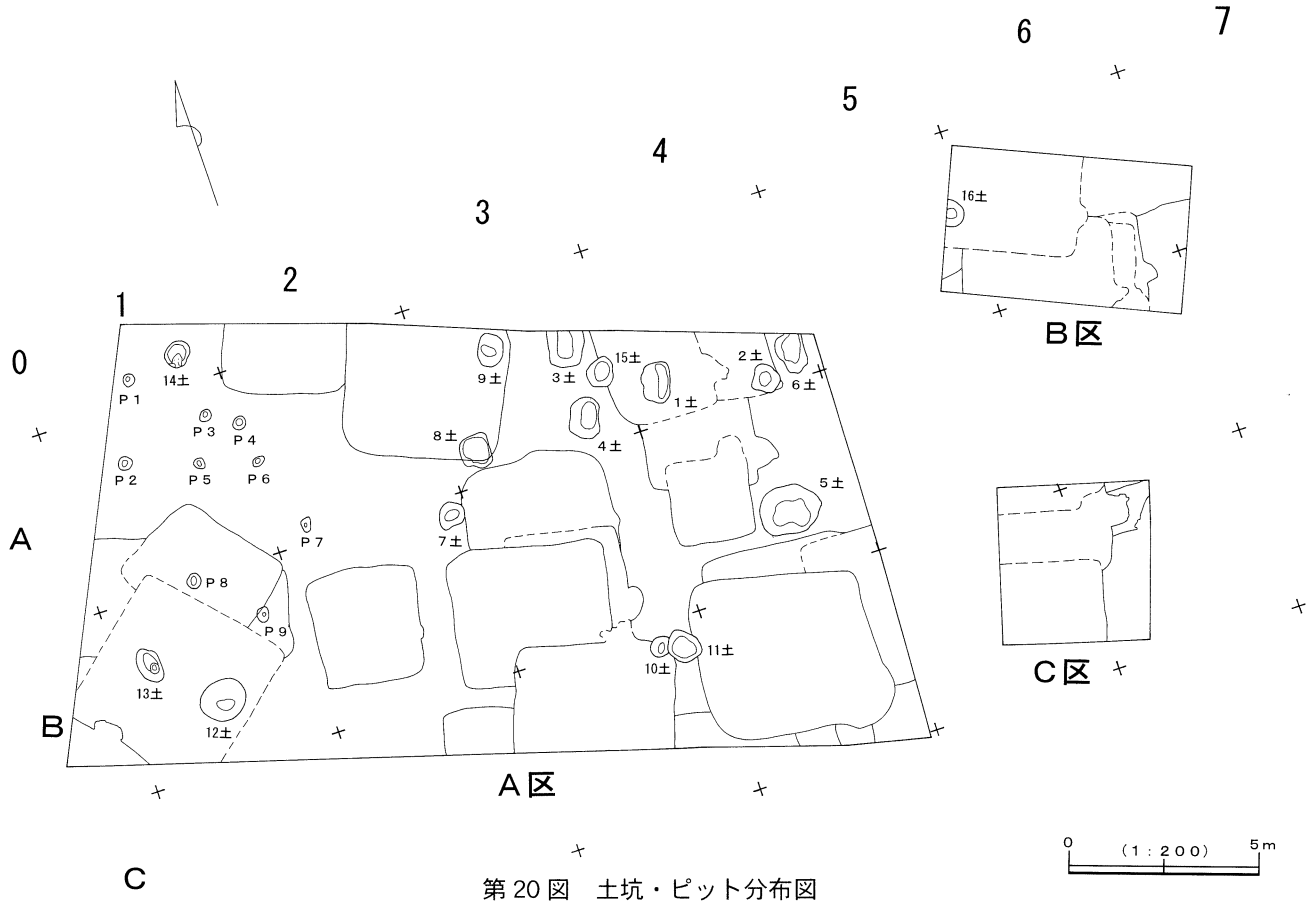
No.	グリッド	形態	規模（m）			備考	図版
			長軸	短軸	深さ		
9号	A－3	楕円形	0.85	0.67	0.58	12号住より古。	7
10号	C－3	楕円形	0.60	0.52	0.32		
11号	C－3	不整形	0.95	0.70	0.28		
12号	B－1	楕円形	1.23	1.05	0.37		7
13号	B－1	楕円形	1.00	0.59	0.34		7
14号	O－1	円形	0.73	0.61	0.28		
15号	A－3	不整形	0.77	0.72	0.52		7
16号	A－5	円形	0.74	(0.48)	0.25		

第８表　土坑一覧

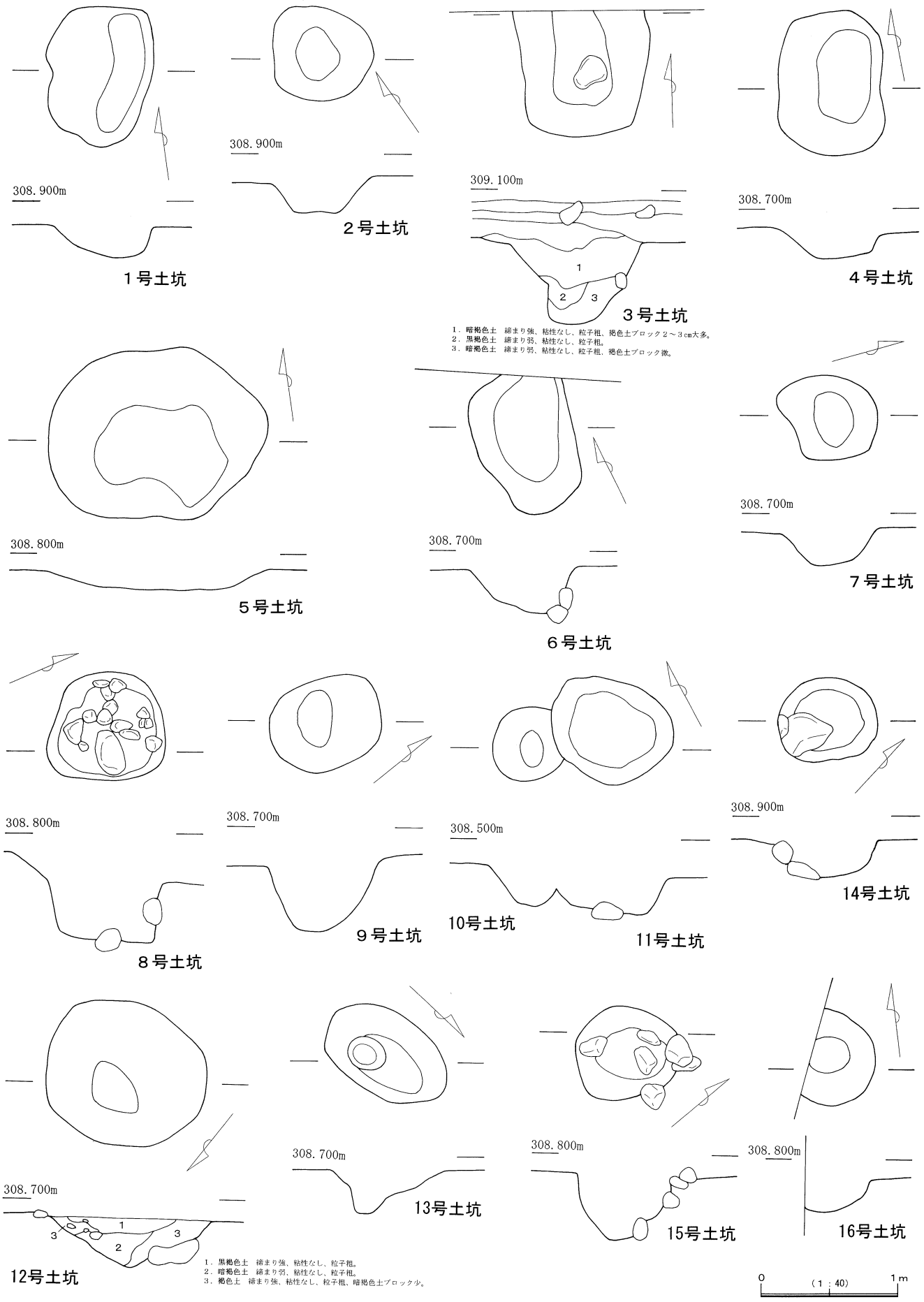
No.	グリッド	規模（cm）			備考
		長軸	短軸	深さ	
P 1	O－1	0.36	0.35	0.26	
P 2	A－1	0.38	0.36	0.21	
P 3	A－1	0.37	0.30	0.23	
P 4	A-1・2	0.37	0.37	0.12	
P 5	A－1	0.35	0.27	0.26	

No.	グリッド	規模（cm）			備考
		長軸	短軸	深さ	
P 6	A－2	0.36	0.24	0.13	
P 7	A－2	0.37	0.27	0.25	
P 8	A・B-1	0.42	0.42	0.19	
P 9	B－1	0.41	0.35	0.17	

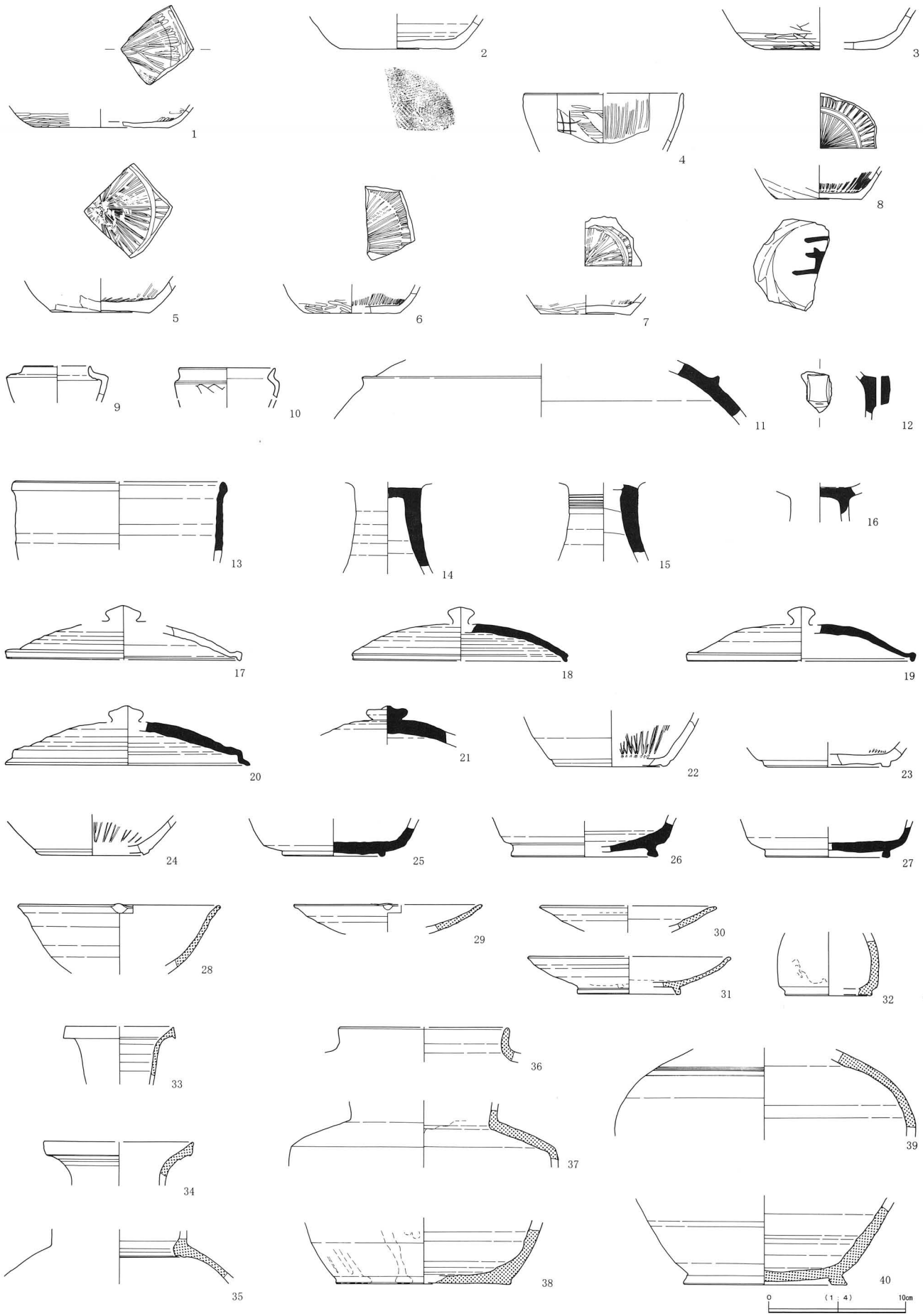
第９表　ピット一覧



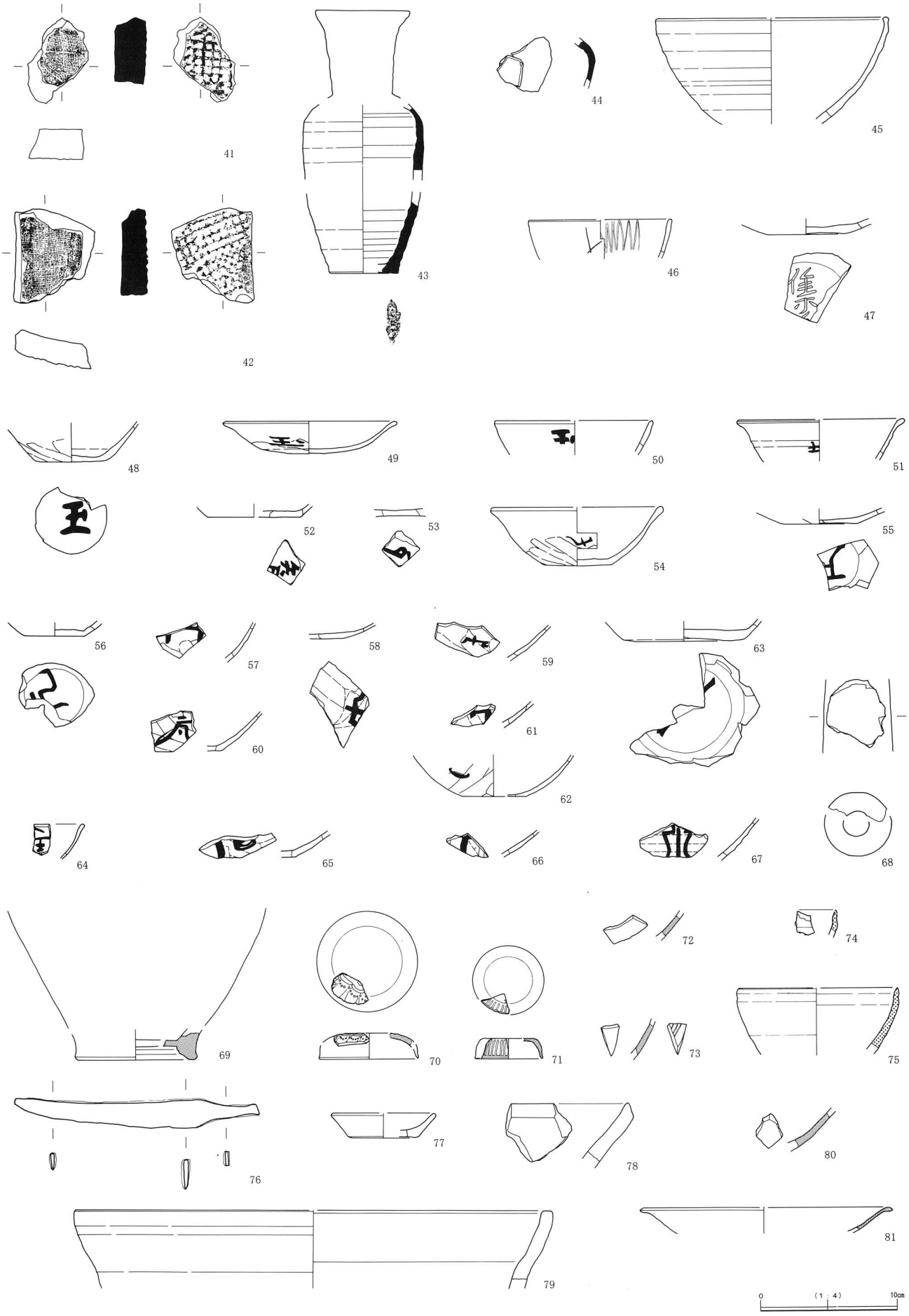
第20図　土坑・ピット分布図


308.900m
1号土坑
308.900m
2号土坑
309.100m
1
2
3
3号土坑
1．暗褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、褐色土ブロック２～３cm大多。
2．黒褐色土　締まり弱、粘性なし、粒子粗。
3．暗褐色土　締まり弱、粘性なし、粒子粗、褐色土ブロック微。
308.700m
4号土坑
308.800m
5号土坑
308.700m
6号土坑
308.700m
7号土坑
308.800m
8号土坑
308.700m
9号土坑
308.500m
10号土坑
11号土坑
308.900m
14号土坑
308.700m
1
2
3
3
12号土坑
1．黒褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗。
2．暗褐色土　締まり弱、粘性なし、粒子粗。
3．褐色土　締まり強、粘性なし、粒子粗、暗褐色土ブロック少。
308.700m
13号土坑
308.800m
15号土坑
308.800m
16号土坑
0
(1：40)
1m

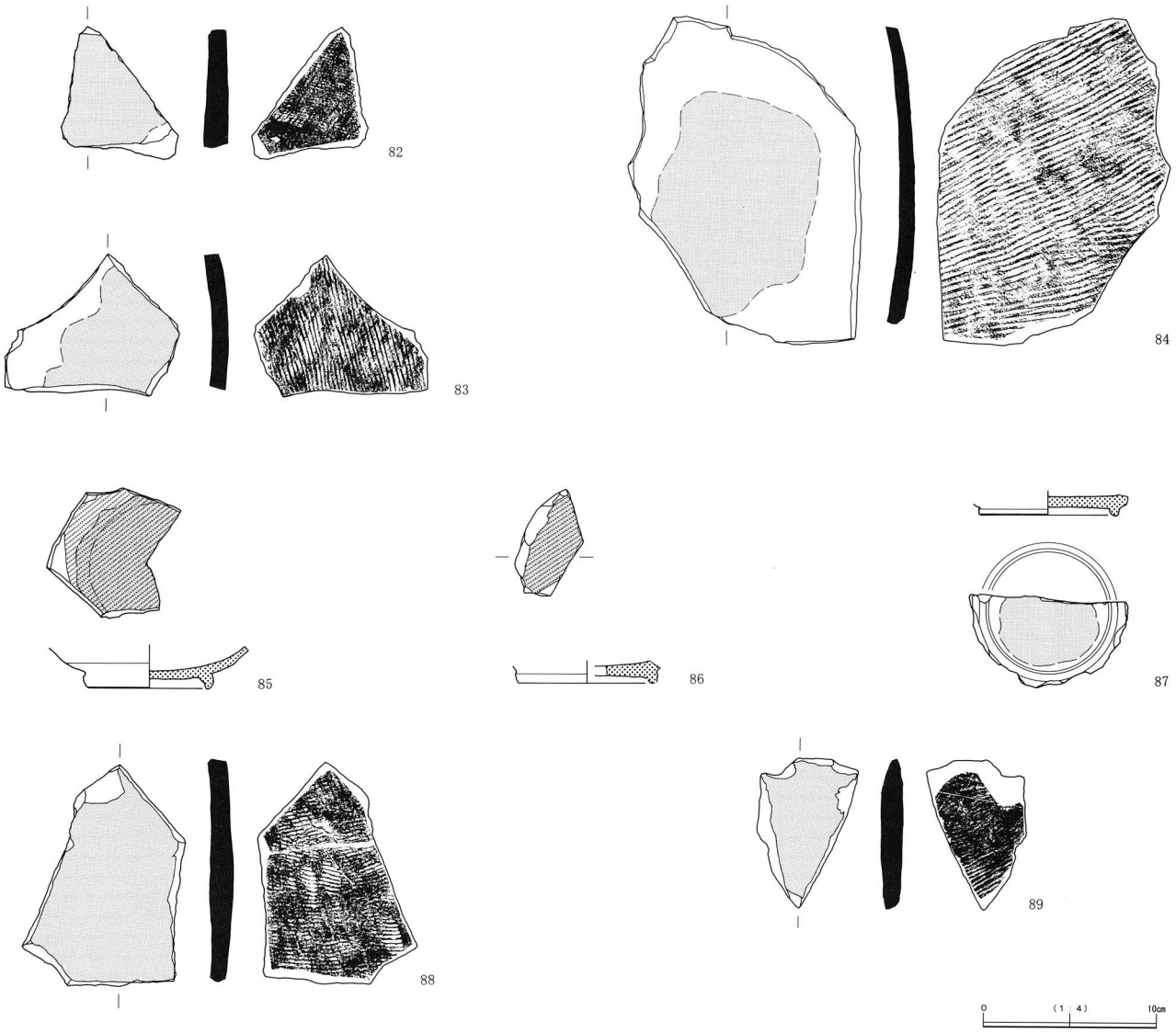
第21図　土坑



第22図　遺構外出土遺物（1）



第23図　遺構外出土遺物（2）



第 24 図　遺構外出土遺物（3）

No.	出土地点	器種	器形	大きさ 器高	大きさ 口径	大きさ 底径	胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	挿図
第22図1	A－3	土師器	坏			(10. 1)	密、赤色粒子、長石	黄褐色	良	外面横方向の磨き、内面放射状暗文。	22
第22図2	A－6	土師器	坏			(8. 4)	密、赤色粒子、長石、金色雲母	暗橙褐色	良		
第22図3	12号住	土師器	坏			(8. 2)	密、赤色粒子、長石	橙褐色	良	外面体部横方向の磨き。	
第22図4	30号住	土師器	坏		(11. 8)		密、赤色粒子、長石	橙褐色	良	外面横磨き、内面放射状暗文。線刻あり。	
第22図5	17号住	土師器	坏			(7. 3)	密、赤色粒子、長石	橙褐色	良	内面放射状暗文、外面下半ヘラ削り。	
第22図6	C－4	土師器	坏			(7. 2)	粗、赤色粒子、長石、石英	赤橙褐色	良	外面磨き、内面放射状暗文。	
第22図7	30号住	土師器	坏			(6. 6)	密、赤色粒子、長石	橙褐色	良	外面横磨き、内面放射状暗文。	
第22図8	12号住	土師器	坏			(6. 4)	密、長石、赤色粒子	橙褐色	良	外面体部下半ヘラ削り、内面放射状暗文。	
第22図9	1号住	土師器	薬壺		(4. 8)		密、赤色粒子、長石、黒色雲母	橙褐色	良		
第22図10	32号住	土師器	薬壺		(7。0)		密、赤色粒子、長石	橙褐色	良		
第22図11	B－3	須恵器	凸帯壺				粗、赤色粒子、長石、石英	灰白色	良		
第22図12	C－3	須恵器	凸帯壺				粗、黒色粒子、長石	黒灰色	良		
第22図13	B－6	須恵器	鉢？		(15. 2)		やや粗、白・黒色粒子	黒灰色	良		
第22図14	B－4	須恵器	高坏				粗、白色粒子、長石、黒色雲母	白灰色	良	脚部。	
第22図15	29号住	須恵器	高坏				粗、白色粒子	灰白色	良	脚部。	
第22図16	B－2	須恵器	高坏				粗、白・黒色粒子、石英	灰色	良	脚部。	
第22図17	A－4	土師器	蓋		(17. 3)		密、長石、赤色粒子	黄橙褐色	良		
第22図18	A－4	須恵器	蓋		(15. 6)		粗、長石、白色粒子	赤橙褐色	良		
第22図19	B－4	須恵器	蓋		(16. 4)		粗、白色粒子	黒灰色	良		
第22図20	30号住	須恵器	蓋		(17. 8)		粗、白色粒子、長石	灰色	良		
第22図21	C－2	須恵器	蓋				やや粗、白・黒色粒子	灰白色	良		
第22図22	A－4	土師器	高台坏			(8. 2)	密、長石、赤色粒子	橙褐色	良	内面放射状暗文、削り出し高台。	

第 10 表　遺構外出土の遺物一覧（1）

No.	出土地点	器種	器形	大きさ 器高	大きさ 口径	大きさ 底径	胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	挿図
第22図23	1号住	土師器	高台坏			(9.4)	密、長石、赤色粒子	明橙褐色	良	内面放射状暗文、削り出し高台。	22
第22図24	A－4	土師器	高台坏			(7.6)	やや粗、長石、赤色粒子	赤橙褐色	良	内面放射状暗文、削り出し高台。	
第22図25	26・27	須恵器	高台坏			(7.6)	粗、白・黒色粒子	黒灰色	良		
第22図26	B－2	須恵器	高台坏			(10.6)	粗、白色粒子、石英	黒灰色	良		
第22図27	A－2	須恵器	高台坏			(9.0)	粗、白色粒子、長石、小石	灰白色	良		
第22図28	A－1	灰釉陶器	碗		(14.8)		やや粗、白色粒子	灰白色	良	輪花碗。	
第22図29	A－4	灰釉陶器	皿		(13.8)		やや粗、黒色粒子	灰白色	良	輪花皿。	
第22図30	A－2	灰釉陶器	皿		(13.8)		やや粗、黒色粒子	灰白色	良	段皿。	
第22図31	B－6	灰釉陶器	皿	2.9	(14.8)	(7.4)	やや粗、黒色粒子	灰色	良		
第22図32	C－4	灰釉陶器	小型瓶			(6.4)	やや粗、石英、黒色粒子	灰白色	良		
第22図33	B－3	灰釉陶器	長頸壺		(8.0)		やや粗、黒色粒子	灰色	良		
第22図34	B－3	灰釉陶器	長頸壺		(11.0)		粗、黒色粒子	灰白色	良		
第22図35	B－3	灰釉陶器	薬壺？				やや粗、黒色粒子	灰白色	良		
第22図36	C－5	灰釉陶器	短頸壺		(12.4)		やや粗、黒色粒子	灰白色	良		
第22図37	B－3	灰釉陶器	壺				やや粗、黒色粒子	灰色	良		
第22図38	A－3	灰釉陶器	壺			(12.8)	やや粗、黒色粒子	灰白色	良		
第22図39	6号住	灰釉陶器	壺			(11.8)	密、黒色粒子	暗灰褐色	良	6・23号住。	
第22図40	20号住	灰釉陶器	壺				密、黒色粒子	暗灰褐色	良		
第23図41	B－3	瓦	女瓦				粗、白色粒子、長石、小石	暗茶褐色	良	長6.5cm、幅4.6cm、厚2.3cm、格子目状文。	23
第23図42	A－3	瓦	女瓦				粗、白色粒子、長石、小石	暗灰褐色	良	長6.8cm、幅6.0cm、厚2.0cm、格子目状文。	
第23図43	A－6	陶器	壺			(5.2)	密、赤・白・黒色粒子、	暗赤褐色	良	A－1、B－1・3、12号住。	
第23図44	B－3	陶器	壺				密、赤・黒色粒子、	暗赤褐色	良	他の個体との溶着痕あり。	
第23図45	30号住	土師器	鉢			(17.1)	密、赤色粒子、石英	黒茶褐色	良	ロクロ痕。	
第23図46	C－4	土師器	坏		(10.6)		密、赤色粒子、長石	橙褐色	良	線刻あり。内面放射状暗文。	
第23図47	C－6	土師器	皿			(6.0)	密、赤色粒子、長石	橙褐色	良	焼成前のヘラ書き。	
第23図48	B－3	土師器	坏			(5.4)	密、赤色粒子、長石	橙褐色	良	外面体・底部ヘラ削り。外底部墨書。	
第23図49	23号住	土師器	皿	2.5	12.8		やや粗、赤色粒子、長石	橙褐色	良	外面体部ヘラ削り。外面体部墨書。	
第23図50	9号住	土師器	坏	1.9	(11.6)		やや粗、長石、赤色粒子	橙褐色	良	外面体部墨書。	
第23図51	26号住	土師器	坏		(11.2)		やや粗、赤色粒子、長石	黄褐色	良	外面体部墨書。	
第23図52	20号住	土師器	坏				やや粗、長石、赤色粒子	橙褐色	良	外面底部墨書。	
第23図53	20号住	土師器	坏				やや粗、長石、赤色粒子	橙褐色	良	外面底部墨書。	
第23図54	20号住	土師器	坏	4.5	(12.3)	(5.1)	やや粗、長石、赤色粒子	暗橙褐色	良	外面体部下半ヘラ削り。体部に墨書。	
第23図55	C－3	土師器	皿			(5.6)	密、赤色粒子、長石	橙褐色	良	外面体・底部ヘラ削り。外底部墨書。	
第23図56	7号住	土師器	坏			4.5	粗、長石、赤色粒子	橙褐色	良	外面底部墨書。	
第23図57	23号住	土師器	坏				やや粗、長石、赤色粒子	橙褐色	良	外面体部ヘラ削り。外面体部墨書。	
第23図58	23号住	土師器	皿				やや粗、長石、赤色粒子	橙褐色	良	外面体部ヘラ削り。外面体部墨書。	
第23図59	C－4	土師器	坏				やや粗、長石、赤色粒子	黄橙褐色	良	外面体部ヘラ削り。外面体部墨書。	
第23図60	22号住	土師器	坏				やや粗、長石、赤色粒子	橙褐色	良	外面体部ヘラ削り。外面体部墨書。	
第23図61	23号住	土師器	坏				やや粗、長石、赤色粒子	橙褐色	良	外面体部ヘラ削り。外面体部墨書。	
第23図62	5号住	土師器	坏			(4.8)	やや粗、長石、赤色粒子	黄橙褐色	良	外面体部ヘラ削り。外面体部墨書。	
第23図63	B－3	須恵器	坏			(7.0)	やや粗、長石、石英、赤色粒子	明橙褐色	良	回転糸切痕。	
第23図64	B－2	土師器	坏				やや粗、長石、赤色粒子	橙褐色	良	体部外面墨書。	
第23図65	34号住	土師器	坏				やや粗、長石、赤色粒子	暗黄褐色	良	外面体部ヘラ削り。外面体部墨書。	
第23図66	34号住	土師器	坏				やや粗、長石、赤色粒子	橙褐色	良	外面体部ヘラ削り。外面体部墨書。	
第23図67	34号住	土師器	坏				やや粗、長石、赤色粒子	橙褐色	良	外面体部墨書。	
第23図68	A－2	土製品	フイゴ羽口				粗、赤・白粒子、長石	暗赤褐色	良	長4.8cm、幅4.3cm、厚1.5cm	
第23図69	B－1	白磁	薬壺？				粗、黒色粒子	灰白色	良	白磁2系。「瓜割り」か？	
第23図70	A－6	青白磁	合子蓋				粗、黒色粒子	白灰色	良	12世紀代	
第23図71	A－1	青白磁	合子蓋				やや密、黒色粒子	白灰色	良	12世紀代	
第23図72	B－4	白磁	碗				粗、黒色粒子	白灰色	良	白磁V類、12世紀代。	
第23図73	B－4	青磁	碗				やや粗、黒色粒子	黒灰色	良	龍泉窯劃花文。12世紀代。	
第23図74	C－5	天目	茶碗				粗、黒色粒子	黒灰色	良	13世紀代。中国産。	
第23図75	C－5	天目	茶碗	(4.6)	(11.8)		粗、黒色粒子	暗灰色	良	13世紀代。中国産。	
第23図76	C－4	鉄	刀子							長さ18.4cm、幅2.2cm、厚さ0.4cm	
第23図77	C－5	土器	かわらけ	(1.9)	(7.6)	(5.4)	粗、長石、黒色雲母	黄褐色	良	底部回転糸切痕。	
第23図78	C－4	土器	擂鉢				やや粗、長石、黒色雲母	黒灰色	良	在地産。	
第23図79	試掘	土器	内耳鍋		(34.4)		やや粗、白色粒子	灰茶色	良		
第23図80	C－5	青磁	碗				やや粗、	灰色	良	龍泉窯。13世紀以降か？。	
第23図81	表採	白磁	皿		(18.4)		やや粗、	白色	良	15世紀後半～16世紀前半代。	

第 11 表　遺構外出土の遺物一覧（2）

No.	出土地点	器種	器形	大きさ（cm） 最大長	大きさ（cm） 最大幅	大きさ（cm） 最大厚	胎土	色調	焼成	文様・調整・特徴	挿図
第24図82	A－6	須恵器	甕・転用硯	(9.0)	(5.4)	1.4	粗、白色粒子	黒灰色	良	破片。内面に磨面。	24
第24図83	A－6	須恵器	甕・転用硯	(8.3)	(10.2)	1.0	粗、白・黒色粒子	青灰色	良	破片。内面に磨面。	
第24図84	B－2	須恵器	甕・転用硯	21.4	13.4	1.0	粗、白・赤色粒子、小礫	灰褐色	良	一部欠損。内面に磨面。	
第24図85	B－2	灰釉陶器	碗・転用硯	(7.6)	(5.2)	0.5	粗、白・黒色粒子	灰色	良	朱墨痕。約1／3残存。内面に磨面。	
第24図86	B－3	灰釉陶器	碗・転用硯	(6.4)	(3.4)	0.8	粗、白色粒子	灰色	良	朱墨痕。約1／4残存。内面に磨面。	
第24図87	C－2	灰釉陶器	皿・転用硯	9.2	(5.3)	0.7	粗、黒色粒子	灰白色	良	C－4。外底面に磨面。	
第24図88	C－2	須恵器	甕・転用硯	(12.9)	(8.8)	1.4	粗、石英、白色粒子	黒灰色	良	内面に磨面。	
第24図89	試掘	須恵器	甕・転用硯	(8.7)	(5.3)	1.3	粗、白・黒色粒子	灰褐色	良	内面に磨面。	

第 12 表　遺構外出土の遺物一覧（3）

第３章　村続遺跡出土瓦の胎土分析

はじめに

村続遺跡は、荒川扇状地の扇央部に位置する遺跡である。本遺跡西方の台地は、黒富士火山の山麓斜面下部と荒川の河岸段丘面とから構成される。この台地上には白鳳期の天狗沢瓦窯跡があり、瓦・須恵器などの生産が発掘調査によって確認され、瓦の一部が胎土分析されている（河西，1990）。しかし、天狗沢瓦窯跡から生産された瓦の供給先については、現在のところ不明である。なお塩川の谷底平野「藤井平」に分布する韮崎市宮ノ前第２遺跡では、奈良時代の瓦が多量に出土し、胎土分析によってデイサイト・安山岩が多く塩川・荒川地域に産地が推定される瓦と花崗岩類が多く釜無川・荒川・塩川地域に産地が推定される瓦とが明らかになった（河西，1991）。今回村続遺跡の堆積層から瓦の破片が少数出土した。ここでは、瓦の胎土組成を明らかにし、松ノ尾遺跡や天狗沢瓦窯跡の分析結果との比較などによって瓦の産地推定を試みる。

試料および分析方法

土器試料は、凸面が格子叩き目跡があり、凹面は布目跡が残る平瓦片である（第１・２図）。以下の方法で薄片を作製した。土器試料は、切断機で 3×2.5 cm 程度の大きさに切断し、残りの試料は保存した。土器片試料はエポキシ樹脂を含浸させて補強し、土器の器壁に直交する断面切片を切断し、岩石薄片と同じ要領で薄片を作製した。さらにフッ化水素酸蒸気でエッチングし、コバルチ亜硝酸ナトリウム飽和溶液に浸してカリ長石を黄色に染色しプレパラートとした。次に以下の方法で岩石鉱物成分のモード分析を行なった。偏光顕微鏡下において、ポイントカウンタを用い、ステージの移動ピッチを薄片長辺方向に 0.33 mm、短辺方向に 0.40 mm とし、各薄片で 2,000 ポイントを計測する。計数対象は、粒径 0.05 mm 以上の岩石鉱物粒子、およびこれより細粒のマトリクス（「粘土」）部分とし、植物珪酸体はすべてマトリクスに含める。

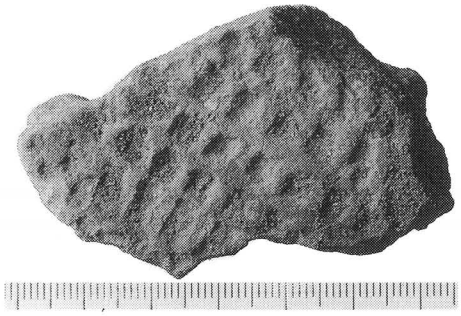
分析結果

分析結果を第１表に示す。試料全体の砂粒子・赤褐色粒子・マトリクスの割合（粒子構成）、および砂粒子の岩石鉱物組成および重鉱物組成を第３図に示す。重鉱物組成では右側に基数を表示した。岩石組成折れ線グラフを第４図に示す。この折れ線グラフは、各岩石のポイント総数を基数とし、各岩石の構成比を示したものである。クラスター分析の樹形図を第５図に示す。クラスター分析は、折れ線グラフと同様の 10 種の岩石データを用いて行なった。クラスター分析での非類似度は、ユークリッド平方距離を用い、最短距離法によって算出した。第５図は、本遺跡試料のほか、村続遺跡出土瓦、天狗沢瓦窯跡、宮ノ前第２遺跡の胎土分析結果、および甲府盆地周辺地域の河川砂の岩石組成とを比較し、便宜的に 1～14 の番号をクラスターに付した。

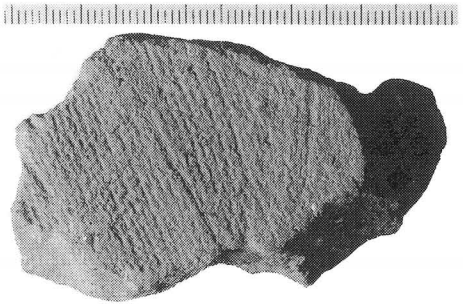
粒子構成では、砂粒子の割合が 11.1％ で、赤褐色粒子が 4.7％ を示す。岩石鉱物組成では、斜長石が 54％ と卓越し、石英・カリ長石なども多く、デイサイト・花崗岩類・変質火山岩類などがこれに続くが、岩石のの割合は低率である。デイサイトの石基は細粒である。重鉱物組成では、酸化角閃石が最も多く、角閃石・不透明鉱物・単斜輝石が検出された。第５図では松ノ尾遺跡 No.1・天狗沢瓦窯跡 TNG－A・宮ノ前第２遺跡 No.15・貢川河川砂試料などとともにクラスター８を形成している。デイサイト・花崗岩類などから主として構成される組成は、貢川・荒川流域の特徴であり、酸化角閃石が優勢な重鉱物組成もこの地域の特徴と一致することから、本試料は在地的土器といえる。

瓦の産地推定

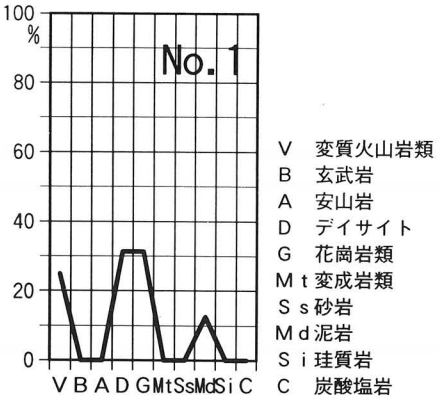
以上の分析結果において本遺跡試料と天狗沢瓦窯跡 TNG－A との類似性が認められることから天狗沢瓦窯跡で本遺跡瓦が生産された可能性が存在する。ただし TNG－A を除く天狗沢瓦窯跡出土瓦の多くは、花崗岩類の優占率がより高率で、第４図では荒川河川砂試料とともにクラスター６を構成している。村続遺跡試料が、天狗沢瓦窯跡出土の典型的な胎土組成を示しているとはいえず、天狗沢瓦窯跡以外の生産地に由来してる可能性も低くない。また村続遺跡試料は、宮ノ前第２遺跡 No.15 との類似性が認められる。宮ノ前第２遺跡



第１図　分析試料写真（凸面）



第２図　分析試料写真（凹面）

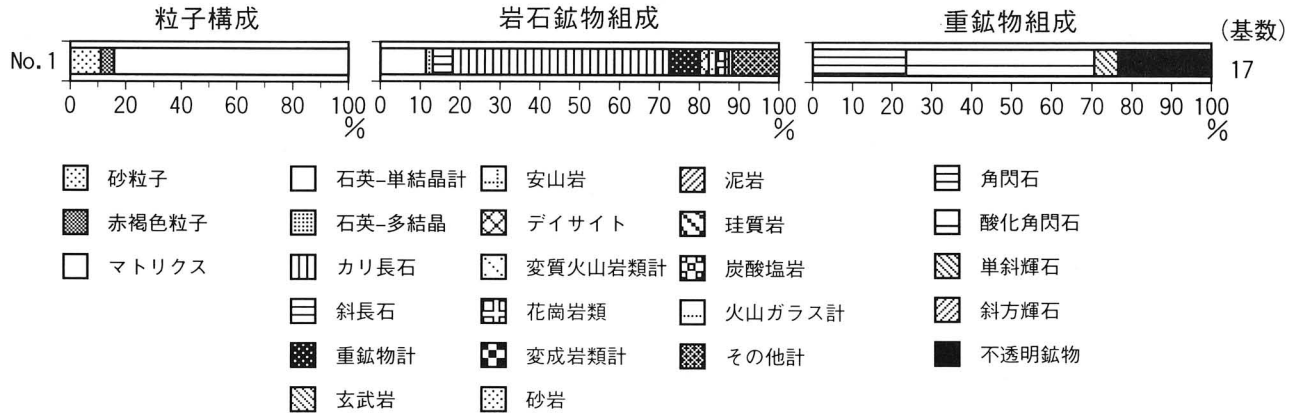


第４図　岩石組成折線グラフ

第１表　土器胎土中の岩石鉱物
(数字はポイント数を、＋は計数以外の検出を示す)

試料番号	No.1
石英-単結晶	25
石英-多結晶	4
カリ長石	11
斜長石	120
角閃石	4
酸化角閃石	8
単斜輝石	1
不透明鉱物	4
デイサイト	5
変質火山岩類	4
花崗岩類	5
泥岩	2
火山ガラス-無色	2
変質鉱物	5
泥質ブロック	21
赤褐色粒子	94
マトリクス	1685
合計	2000
石英波動消光	+
パーサイト	+
変質火山岩類岩質	AD,D
火山ガラス形態	B
植物珪酸体	+

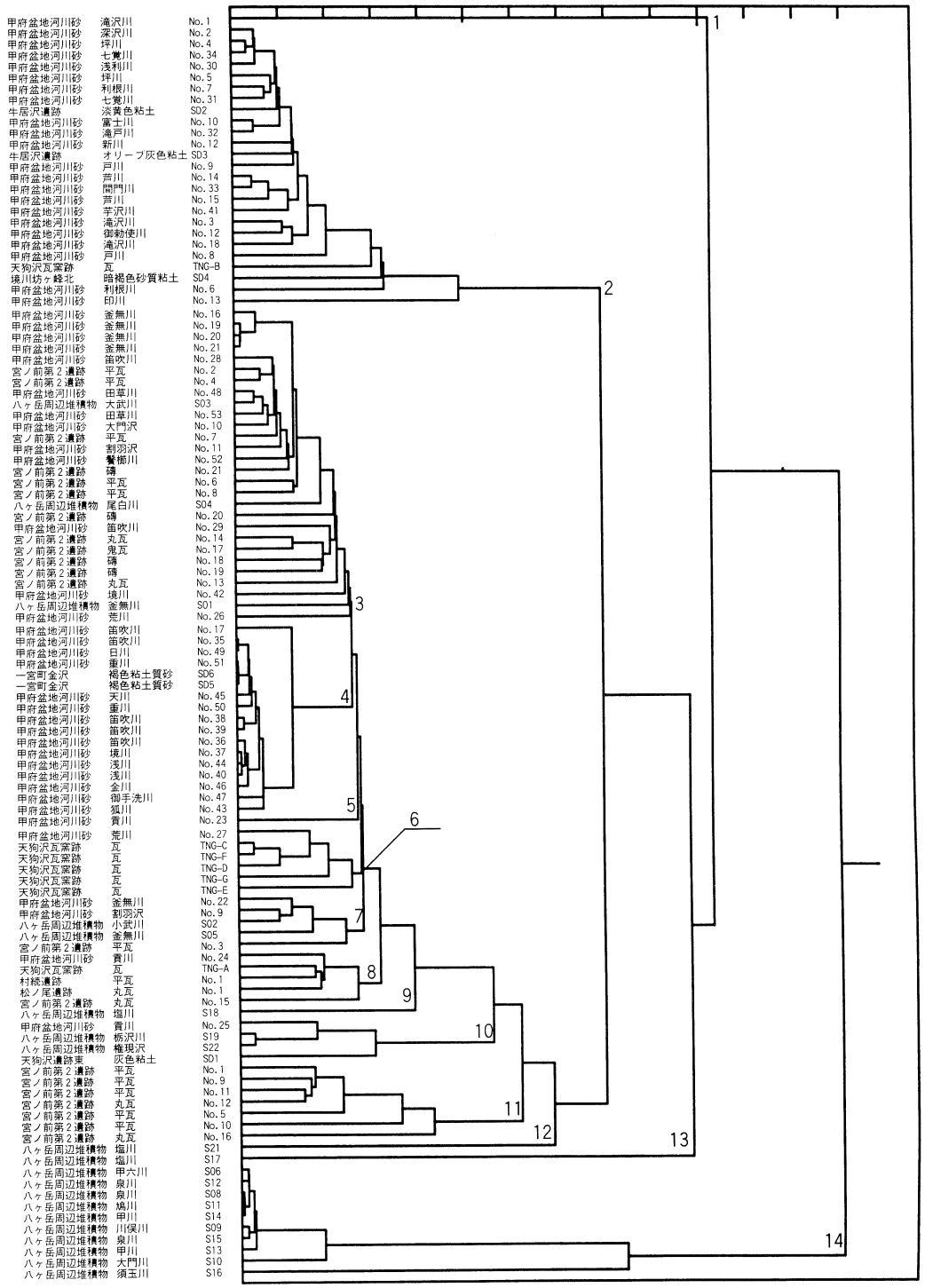
変質火山岩類：ＡＤ安山岩質～デイサイト質，Ｄデイサイト質．火山ガラス形態：Ｂ塊状



第３図　土器胎土の岩石鉱物組成

では、多様な胎土組成の存在から周辺地質の複雑さによる原料組成の多様性かあるいは複数産地の存在の可能性などが指摘されている。No.15 を除く他の宮ノ前第２遺跡試料は、クラスター３およびクラスター 11 に集中する傾向があり、天狗沢瓦窯跡や村続・松ノ尾遺跡試料とも区別される。以上のように黒富士火山周辺の荒川および塩川流域の古墳時代後期～平安期瓦を出土する遺跡における胎土分析結果からは、多様な産地の存在が考えられる。荒川扇状地地域においても村続遺跡瓦の産地が存在する可能性も少なくはない。

村続遺跡・松ノ尾遺跡では、遺跡を埋積する堆積物中から瓦小片が出土していることから、さらに上流部でより多くの瓦を出土するような遺跡の存在が期待される。今後の資料の蓄積を待って瓦産地ににについて再検討する必要があろう。



第５図　土器のクラスター分析樹形図

まとめ

村続遺跡出土瓦は、胎土組成が天狗沢瓦窯跡試料と類似することから、天狗沢瓦窯跡で生産された可能性が存在すること、しかしそれ以外の荒川扇状地周辺の生産地に由来してる可能性も低くないことが明らかになった。

（山梨文化財研究所　河西　学）

文献

河西学(1990)岩石学的手法による天狗沢瓦窯跡瓦の胎土分析。『天狗沢瓦窯跡』, 敷島町教育委員会、106－114。

河西学(1991)宮ノ前第2遺跡出土瓦の胎土分析。『宮ノ前第2遺跡・北堂地遺跡』, 韮崎市教育委員会、84－90。

第4章　ま　と　め

今回の調査で奈良・平安時代の住居跡計36軒が確認された。各住居跡内より出土した遺物から、8世紀後半から12世紀代にかけて、約450年間の長期にわたりほぼ継続する集落が営まれていたことが明らかとなった。以下は、発見された時期ごとの軒数をまとめたものである。

8世紀前半　遺構外および住居跡覆土中に混ざり遺物が出土。
8世紀後半（2軒）　27号住（新）、　28号住（古）
9世紀前半（3軒）　2号住、20号住、33号住
9世紀後半（4軒）　3号住、4号住、8号住、31号住
10世紀前半（12軒）　5号住、7号住、9号住、11号住、21～24号住、26号住、29号住、32号住、34号住
10世紀後半（6軒）　1号住、13号住、18号住、25号住、30号住、36号住
11世紀前半（2軒）　6号住、17号住
11世紀後半（2軒）　12号住、16号住
12世紀前半（1軒）　14号住
12世紀後半（2軒）　15号住、19号住
時期不明（2軒）　35号住、37号住

《　遺構について　》

今回発見された遺構は奈良～平安時代にわたる住居跡36軒と土坑19基、ピット14箇所である。

36軒の住居跡は調査範囲内で全面にわたって確認されている。調査区B・Cでは住居跡が複雑に重なり合い両調査区の全面が遺構の覆土で満たされた状態であった。全体的に東側へと向かうに従い遺構の密度が高くなる傾向にあり、集落の本体が東側に存在する可能性が見受けられる。

発見された住居跡27・28号は時期的には8世紀後半から末葉にあたるとみられるが、この後10世紀前半までの間は調査区のほぼ東半部にかけて住居跡が重複しながら偏在する傾向にある。

しかし、10世紀後半以降になるとその傾向はほとんどみられなくなり、調査区A～Cの全体に散在し、12世紀代には逆に調査区Aの南西へと住居跡14・15・19号がまとまって検出された。

各住居跡のカマドについてみていきたい。36軒中19軒で確認された。このうち、北カマドは4軒、東カマドは12軒、南東カマドは3軒であった。

時期別には、8世紀後半(27・28号住）2軒中1軒東カマド、9世紀前半(2・20・33号住）3軒中2軒いずれも東カマド、9世紀後半(3・4・8・31号住）4軒中3軒北カマド2軒と東カマド1軒、10世紀前半(5・7・9・11・21・22・23・24・26・29・32・34号住）12軒中6軒東カマド4軒と北カマド2軒、10世紀後半(1・13・18・25・30・36号住）6軒中5軒東カマド4軒と南東カマド1軒、11世紀前半(6・17号住）2軒中2軒北カマド1軒と南東カマド1軒、11世紀後半(12・16号住）2軒中2軒東カマド1軒と南東カマド1軒、12世紀前半(14号住）1軒中1軒南東カマド1軒、12世紀後半(15・19号住）2軒中1軒北カマド1軒が確認されている。

カマドの時期的な変遷を概観すると、住居跡の北と東壁に設けられるものは8・9世紀代から一般的にみられるが、10世紀後半以降になると南東隅部に造られるものが出てくるようになる。

また、遺構の重複によって判別しにくいものもあるが、9世紀後半～10世紀前半頃を境として、それまでカマドの用材には両袖にそれぞれ1つの袖石と場合によって天井石を設けた簡素な造りであったものが、この時期を契機として拳大から人頭大ほどの石を数多く使い両袖部を整然と積み上げ強固に仕上げたカマドが多くみられるようになる。

さらに、本遺跡から発見された住居跡は比較的遺存状態が良好であったことから、36 軒中 11 軒の住居跡で固く踏み締まった土間状の床面が確認されており、このような床面は基本的に住居跡の中央からカマドの正面に向かって観察されるものが多かった。

《　**遺物について**　》

今回紙面の都合上、掲載しなかったが縄文、弥生、古墳時代前期の土器がわずかに出土している。

調査では、古墳時代中・後期の遺物は全くみられなく、奈良時代の 8 世紀代になると遺構外遺物第 22 図 1～10 のような、盤状坏や見込み部から内面体部にかけて放射状暗文を施す坏類などが遺構内外から数多く出土した。今回、調査された遺構で古いものは 8 世紀後半～末頃の住居跡が発見されたに留まったが、出土遺物からみて本集落跡は 8 世紀代でも早い段階から営まれていたことが推測される。

また、特筆される遺物には瓦、緑釉陶器、長頸壺（壺 G)、貿易陶磁器、転用硯、銅製小仏像などがある。

瓦　女瓦 2 点で調査区 A の中央北側の A－3、B－3 グリッドからそれぞれ 1 点出土した。表面に格子目状の叩き目、裏面に布目が観察されるもので、本町の天狗沢瓦窯跡の瓦と類似したものである。天狗沢瓦窯は 7 世紀後半とみられており、山梨県内でも最古の瓦窯跡であるが、未だその瓦がどこへ運ばれ使用されたのかは謎である。今回わずか 2 点の瓦片の出土であったが、周辺に古代の寺院跡が存在することを示唆する資料として大変注目される。

緑釉陶器（巻頭カラー）　どれも破片であったが計 54 点が出土し、碗、皿が中心でおそらく袋物となるものが 1 点ある。6、12、26、28 号住の覆土中から各 1 点づつ破片が出土しているが、確実に遺構に伴うものはなく、この 4 点以外はすべて遺構外からの出土であった。なお、これら緑釉陶器の産地は近江、猿投、東濃産に大別できるようで、中でも東濃産が主体を占めている（註 1)。

長頸壺　遺構外出土の 43・44 は、およそ 8 世紀後半～9 世紀前半のメルクマールとなる「壺 G」と呼ばれるもので、A－1・6、B－1・3 グリッドや 12 号住居跡覆土中などから破片が散在し出土している。これは仏教関連の遺物とみられるものであるが、その他薬壺（遺外 9・10)や鉢形状の土器（遺外 45)などの出土もみられ、本遺跡の性格を今後検討していく上で興味深いものである。

硯　計 20 点の須恵器や灰釉陶器などを再利用した「転用硯」が出土している。

遺構内からは、4 号住 1 点、8 号住 3 点、9 号住 1 点、13 号住 1 点、17 号住 2 点、20 号住 1 点、25 号住 1 点、26 または 27 号住 1 点、32 号住 1 点の計 12 点がある。

遺構外からは 8 点が認められ、B－2 グリッド 2 点、B－3 グリッド 1 点、C－2 グリッド 1 点、C－2・4 グリッド各 1 点（接合)、A－6 グリッド 2 点、試掘で 1 点が出土している。

これらの転用硯は、須恵器の大型破片の内面や灰釉陶器の底部（見込み部）が使われ、主に中央部がよく擦られているものが多く、光沢が現れているものもみられる。また、全体の形を整えるためにその周縁部を丁寧に打ち掻いて整形したもの(0806、0910、1308、1709 など）もある。

今回、朱墨痕のみられる転用硯も確認されており、須恵器片で 20 号住出土 2005 や遺構外出土の灰釉陶器の見込み部を使用した底部片（遺構外 85・86)などがある。しかし、出土した墨書土器やその他の遺物を含め観察しても朱墨で記載されたようなものは認められない。

転用硯の時期は、今回遺構の重複が激しく判断し難い部分もあるが、9 世紀代の住居跡(4・8・20 号住など）で出土が目立ち、確実に新しいものは 13 号住居跡(10 世紀後半）に伴っている。

貿易陶磁器　白磁・青白磁・青磁の計 10 点が出土し細片であったが、大きくは平安時代後半～末葉、中世初頭、中世後半期にそれぞれ相当するものがある。内訳は以下のとおりである。

白磁	XI 類・・・・・・・10 世紀後半～11 世紀中頃	皿片 1 点	12 号住居跡
	白磁壺　2 系・・・・11 世紀中葉～11 世紀後半	壺（薬壺？）片 1 点	遺構外
	青白磁・・・・・・・12 世紀代	合子蓋片 2 点	遺構外
	V 類・・・・・・・・12 世紀前半～13 世紀前半	碗片 1 点	遺構外

青磁碗（劃花文）・・・12 世紀後半～13 世紀前半　　碗片 1 点　遺構外
天目茶碗（中国）・・・13 世紀代　　碗片 2 点　遺構外
青磁（無文）・・・・・13 世紀以降　　碗片 1 点　遺構外
白磁・・・・・・・・・15 世紀末～16 世紀初頭　　皿片 1 点　遺構外　　計 10 点

これら 10 点のうち、12 号住居跡の白磁皿 1213 は唯一遺構内から出土したものである。この白磁皿 1213 は、白磁分類でいうＸＩ類(10 世紀後半～11 世紀中頃）に相当するとみられる（註 2)。

12 号住居跡は土師質土器の小皿、坏、小椀などから 11 世紀中葉～後半にあたるが、覆土中からは 8 世紀代の坏類をはじめとする土器類や須恵器、灰釉陶器などの破片も出ている。しかし、時期決定となった資料に比べてさらに新しいとみられる時期の遺物は混在していなかった。

本住居跡出土の土師質土器群と白磁皿 1213 の時期では若干のズレが生じているが、東国という遠方の地まで運ばれてくる過程で生じたズレであったのか、もしくは今回の調査区にみられる遺構の検出状況からも明らかなように 12 号住居跡周辺でさらに古い時期の遺構が重複により破壊されたことから遺物が散在し、本住居跡の埋没時に白磁皿 1213 が混ざった可能性なども考えられる。

なお、白磁皿 1213 は現状県内で遺構内から出土した中では、最も古い時期の白磁とみられる。

銅製小仏像　14 号住居跡内の北側にあり、ほぼ床面上からの出土である（第 7 図)。本住居跡は、確認段階ですでにかなり浅い掘り込みであったが、良好な遺物が出ている。北西部から土師質土器の小皿、耳皿、柱状高台小皿が、南東部の壁に近い場所からは小椀が出土したため、これらの土器から本住居跡は 12 世紀前半と考えられ、その出土状態から銅製小仏像は該期のものと推測される（註 3)。

以上みてきたように、村続遺跡は 8 世紀後半～12 世紀代まで連綿と継続する拠点的な集落跡であったことが確認できた。そして、古くはすでに 8 世紀代の早い段階から営まれていた可能性も遺構内外の出土遺物から指摘できる。また、調査面積に比べて遺物には朱墨痕を含んだ多くの転用硯の出土や豊富な緑釉陶器の消費、薬壺、壺Ｇ、灰釉小瓶、白磁、銅製小仏像の出土など一般集落とは異なる多種多様な遺物が各時期にわたって存在することから、本遺跡の特殊性が窺える。

古代甲斐国は、奈良時代にはすでに「山梨郡」「八代郡」「巨麻郡」「都留郡」の四郡に分かれていたようであるが、この村続遺跡が所在する敷島町域は当時の「巨麻郡」に所属していた。

「巨麻郡」は、9 つの郷が存在しその比定地は複数の説があり未だ推定の域を出ておらず、また郡家となる郷名がみられないため、中枢となる郡衙跡地についても未だ明らかとなっていない。

巨麻郡における本遺跡の位置付けについて、遺跡の性格を吟味するには現状未だわずかな検討材料しかないため、今後本遺跡内で新たな調査を進める過程で不足を補いさらに検討していきたい。

(註 1)京都市埋蔵文化財研究所百瀬正恒氏の御教示による。

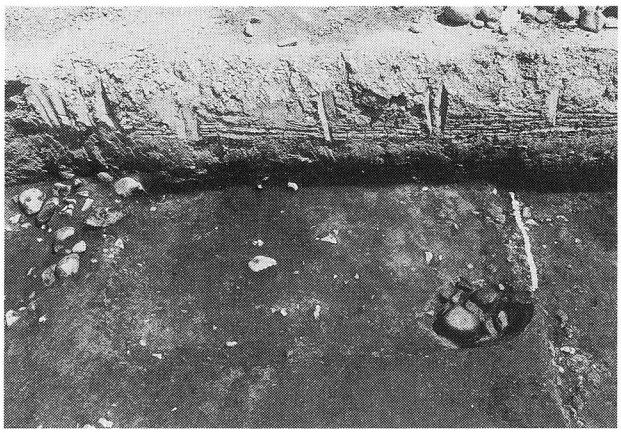
(註 2)福岡県福岡市教育委員会大庭康時氏、京都市埋蔵文化財研究所百瀬正恒氏の御教示による。

(註 3)仏像の詳細については、大嶌正之 2001「埋蔵文化財試掘年報 ′01」敷島町教育委員会を参照。

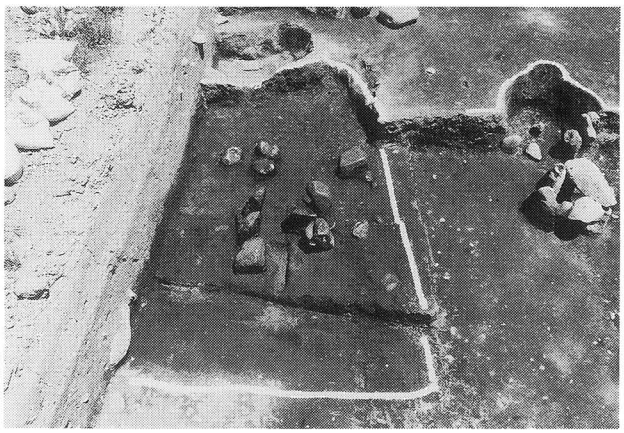
引用・参考文献

大宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊跡ＸＶ　－陶磁器分類編－』　太宰府市の文化財　第 49 集
齊藤孝正　　2000『日本の美術 6』№.410　文化庁／東京国立博物館／京都国立博物館／奈良国立博物館
平野　修 他　2002『大坪遺跡－平成 12 年度調査地点の報告－』　大坪遺跡発掘調査会
大嶌正之　　2001『埋蔵文化財試掘年報 ′01』　敷島町教育委員会
平野　修 他　2002『宮ノ前遺跡』　韮崎市教育委員会・宮ノ前遺跡発掘調査団ほか
山梨県史編纂委員会　1998『山梨県史　資料編 2』山梨県

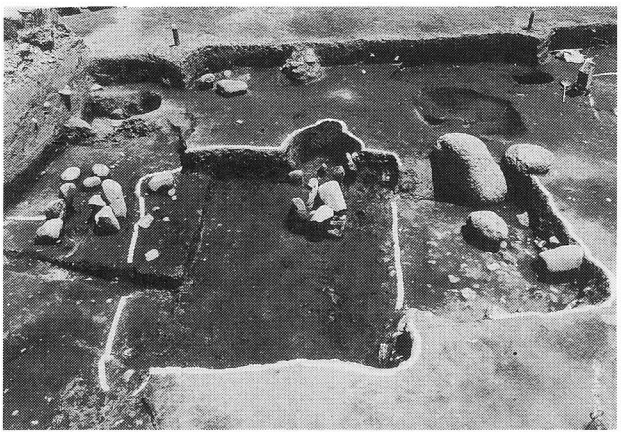
1. 調査区全景



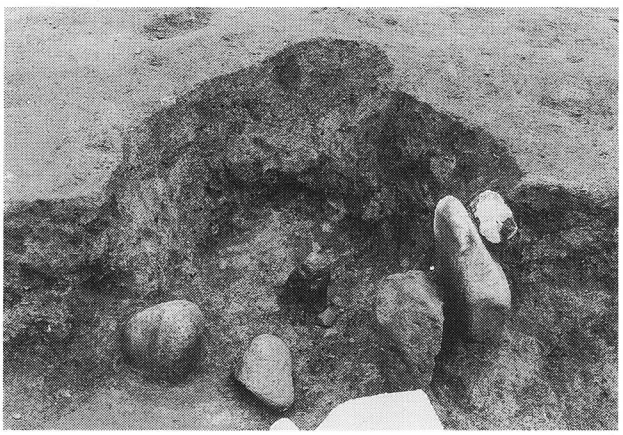
2. 1号住居跡



3. 4号住居跡

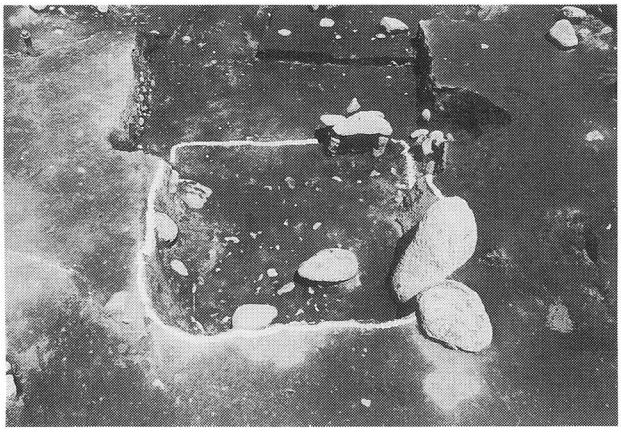


4. 2号住居跡

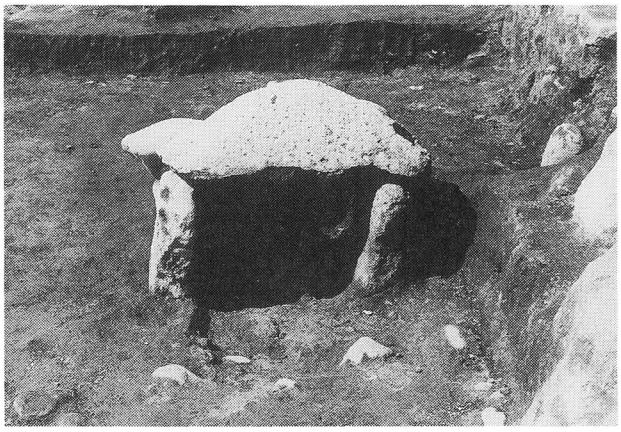


5. 2号住居跡カマド

図版 2



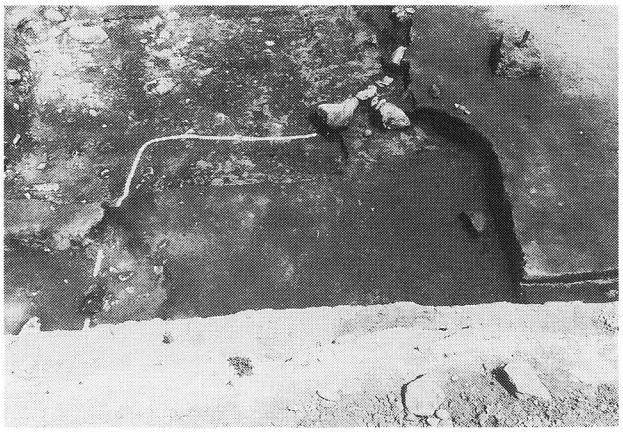
1. 3 号住居跡



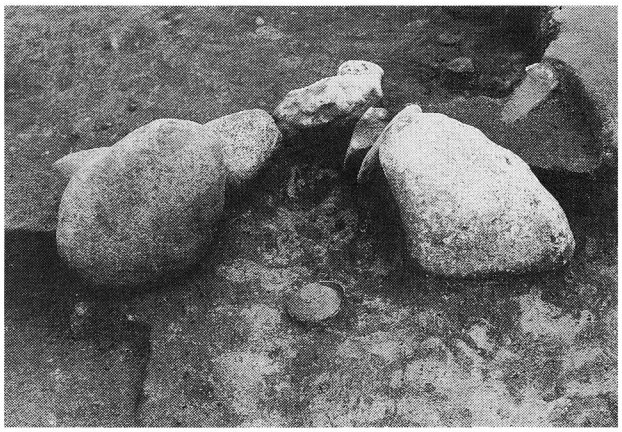
2. 3 号住居跡カマド

3. 5 号住居跡

4. 5 号住居跡カマド



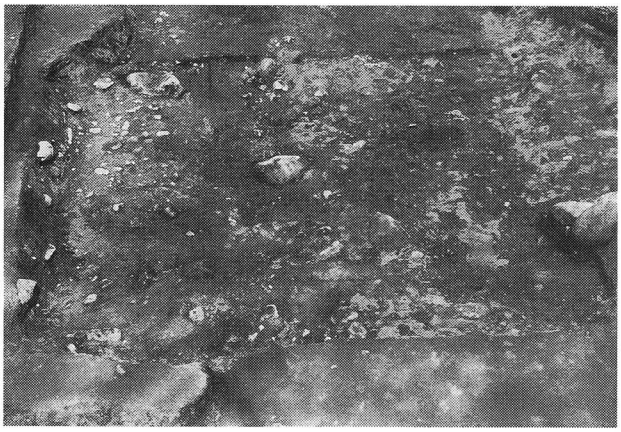
5. 6 号住居跡



6. 6 号住居跡カマド

7. 8 号住居跡

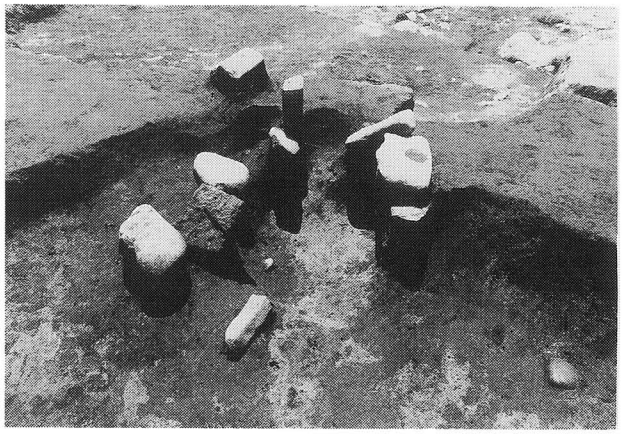
8. 8 号住居跡カマド



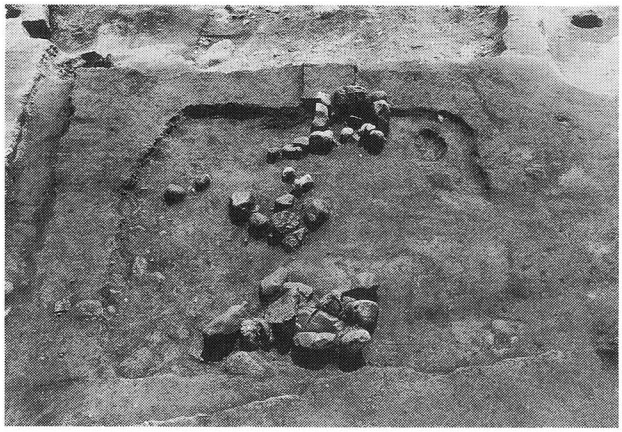
1. 9 号住居跡

2. 11 号住居跡

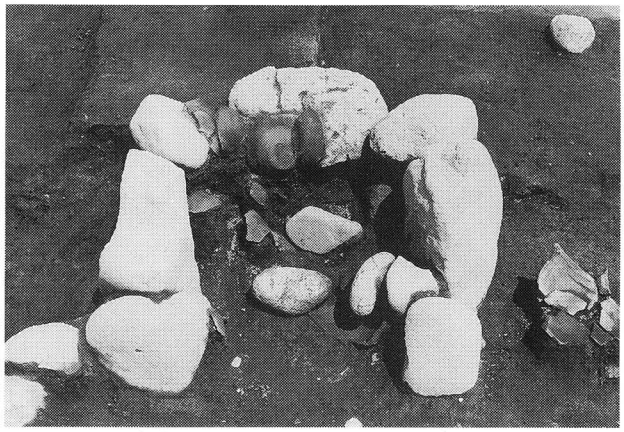
3. 12 号住居跡



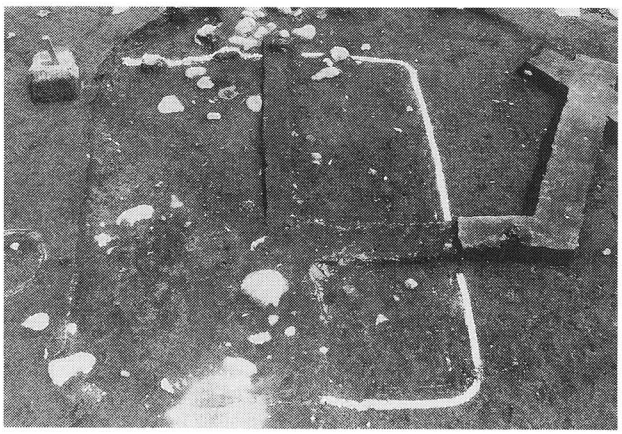
4. 12 号住居跡カマド



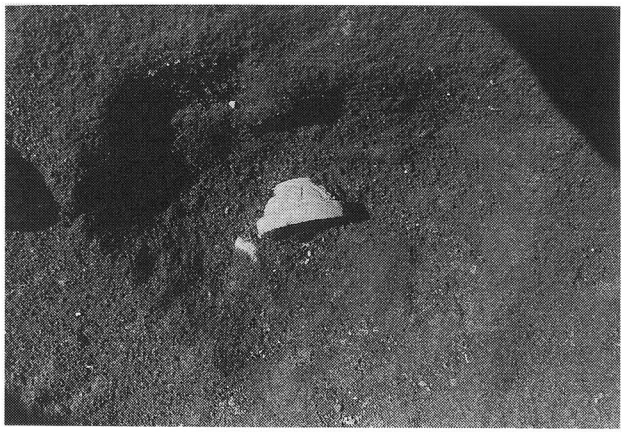
5. 13 号住居跡



6. 13 号住居跡カマド

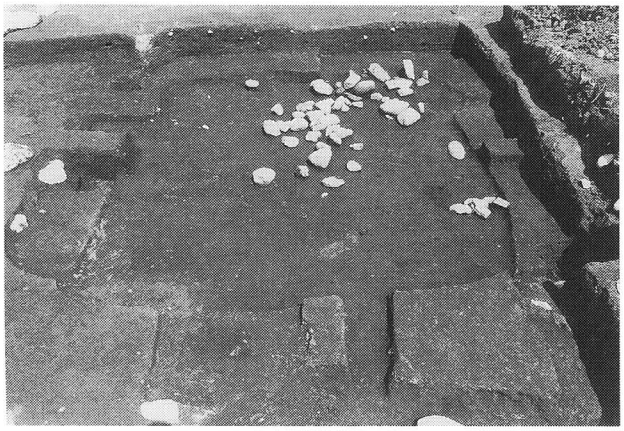


7. 14 号住居跡

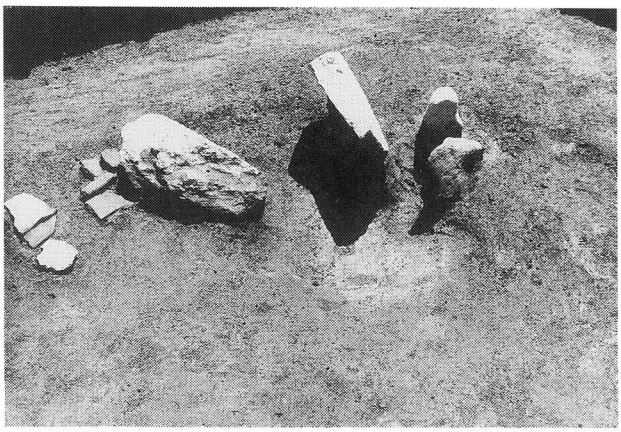


8. 14 号住居跡　－小仏像台座出土状況－

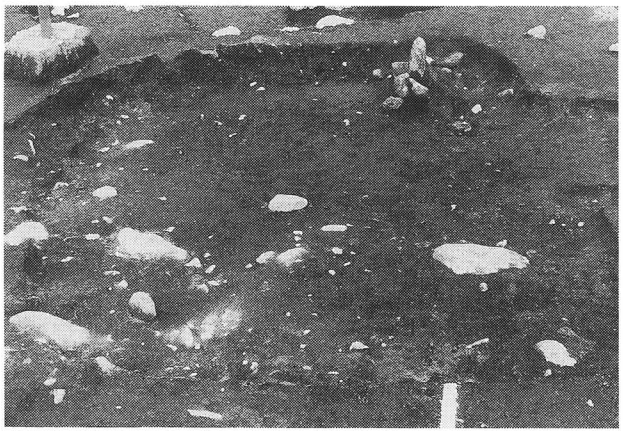
図版 4



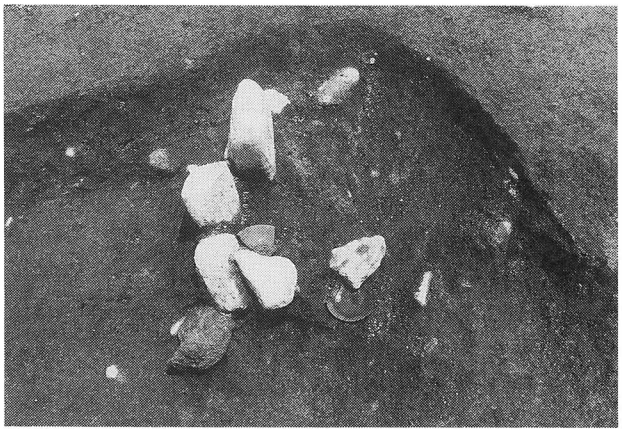
1. 17 号住居跡



2. 17 号住居跡カマド

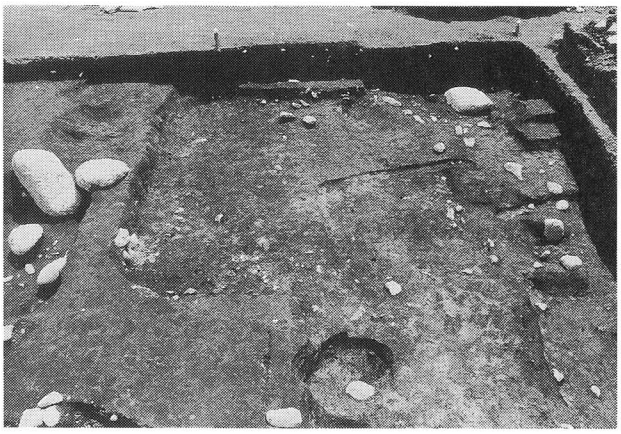


3. 18 号住居跡

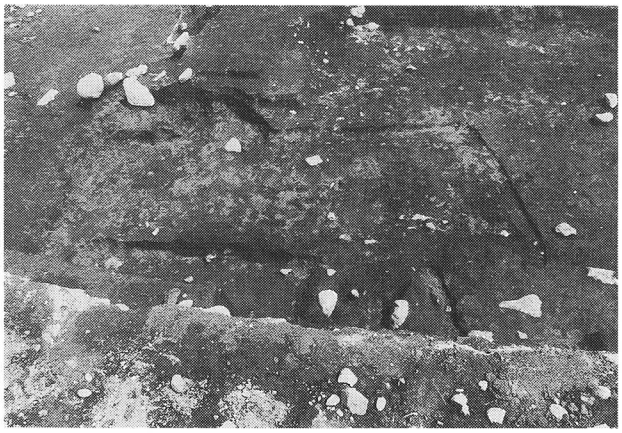


4. 18 号住居跡カマド

5. 19 号住居跡

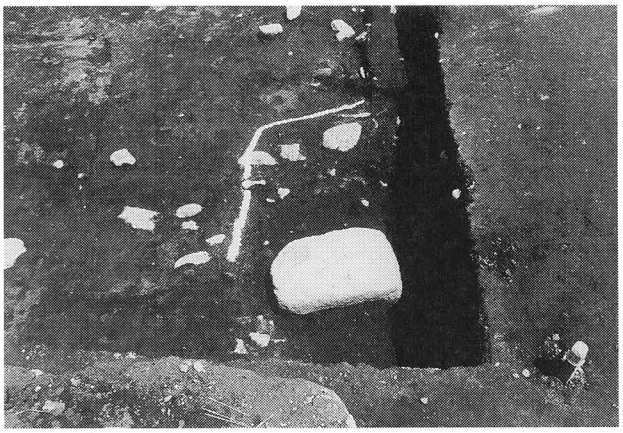


6. 20 号住居跡

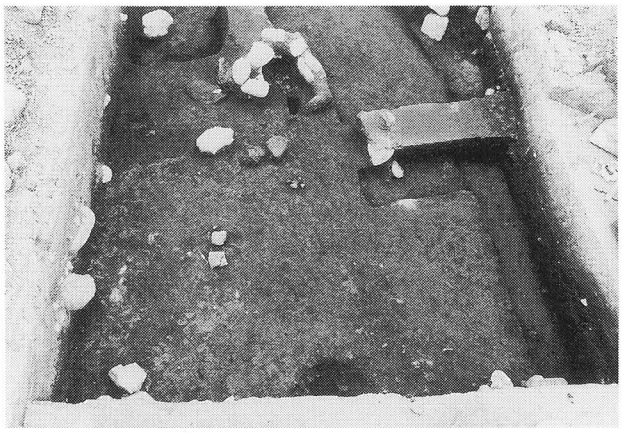


7. 22・23 号住居跡

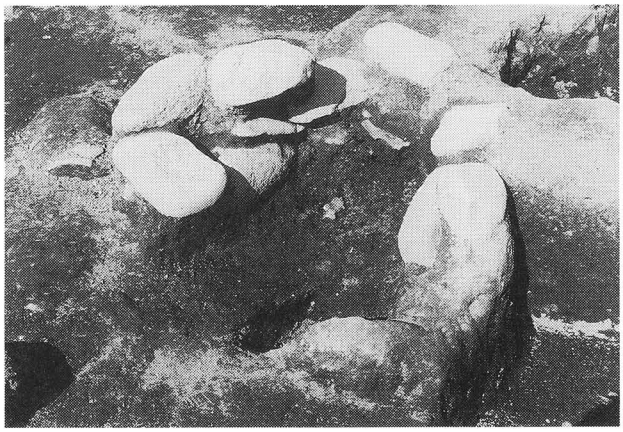
8. 22 号住居跡カマド



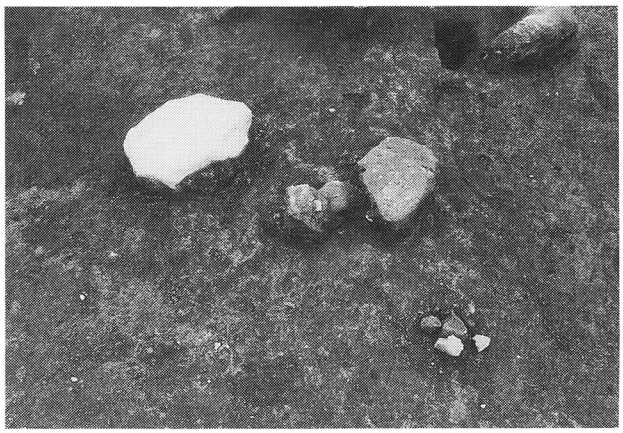
1. 21 号住居跡



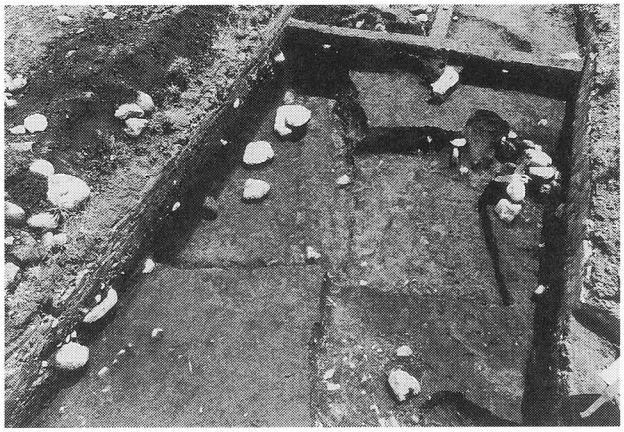
2. 25 号住居跡



3. 25 号住居跡カマド

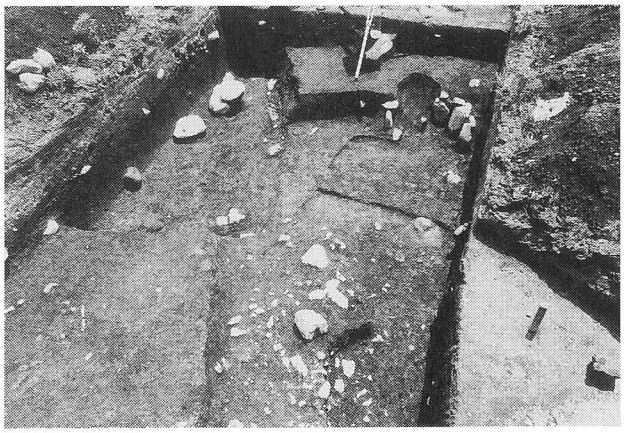


4. 25 号住居跡　－床面遺物出土状態－

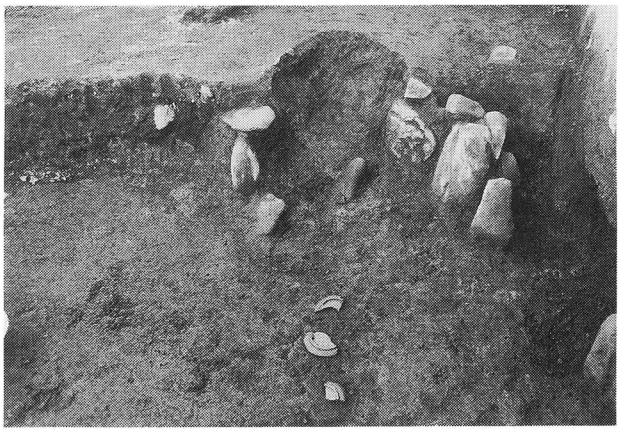


5. 26～28 号住居跡

6. 26・27 号住居跡カマド



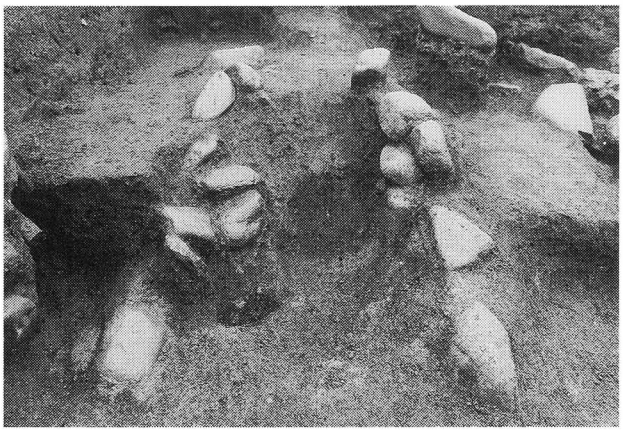
7. 27・28・33・34 号住居跡



8. 27 号住居跡カマド

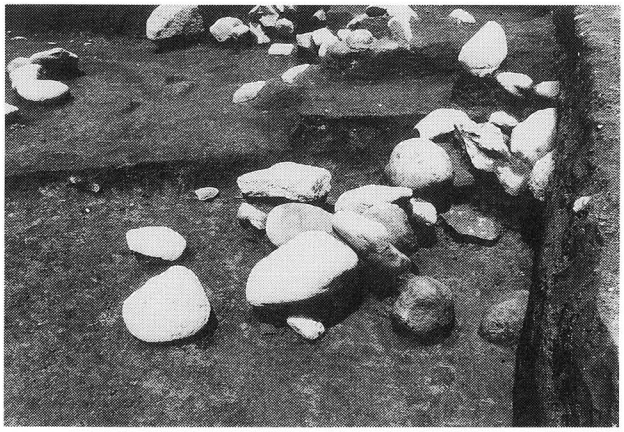
図版 6

1. 29～31・36 号住居跡

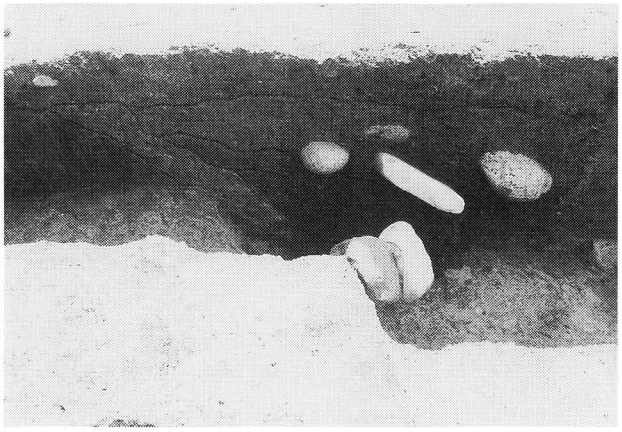


2. 30 号住居跡カマド

3. 31 号住居跡

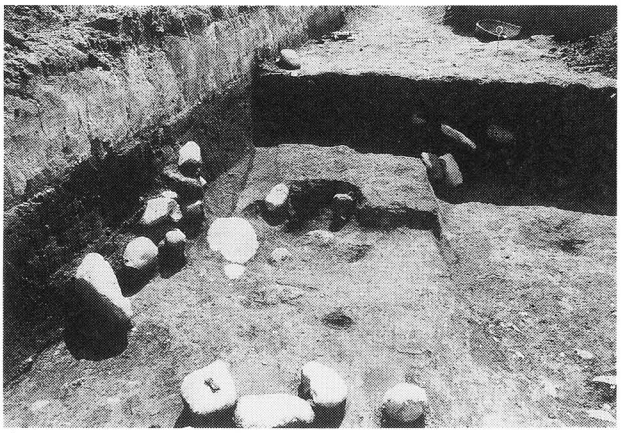


4. 31 号住居跡カマド

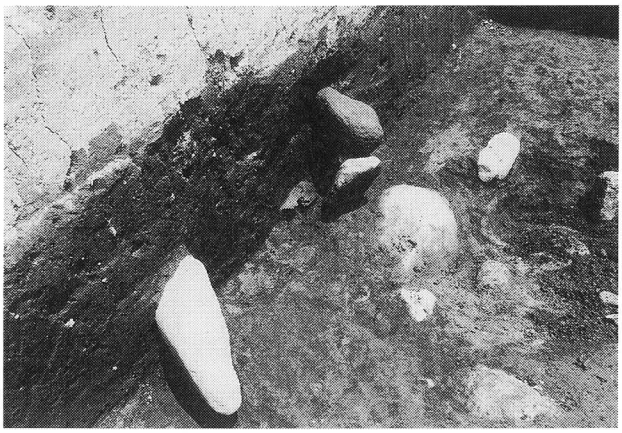


5. 31 号住居跡カマド断面

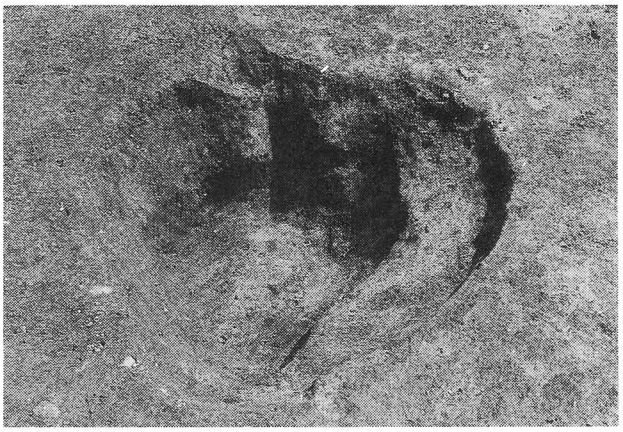
6. 32 号住居跡



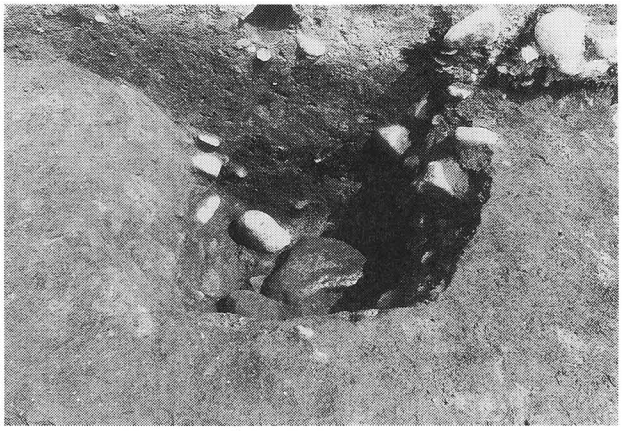
7. 35～37 住居跡



8. 36 号住居跡カマド

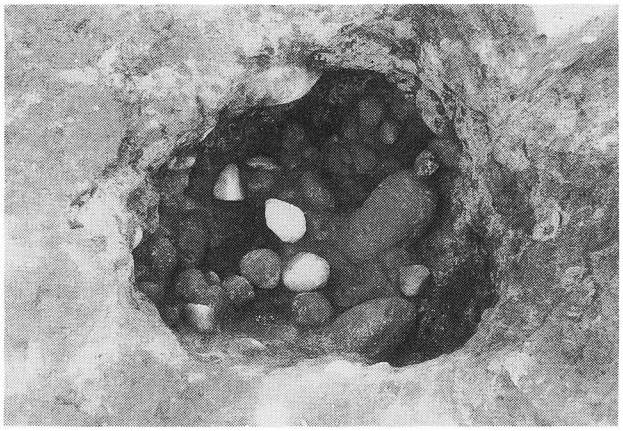


1. 2 号土坑

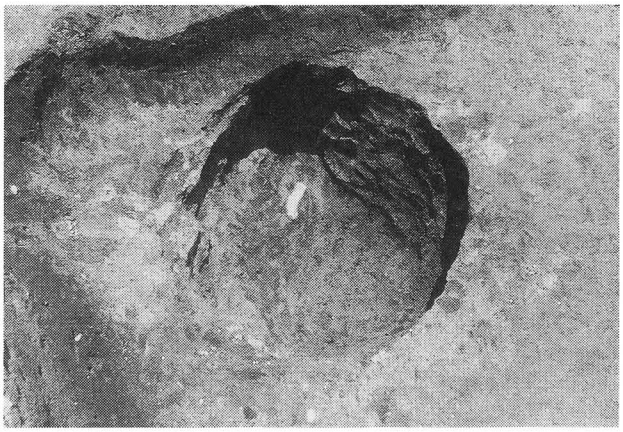


2. 3 号土坑

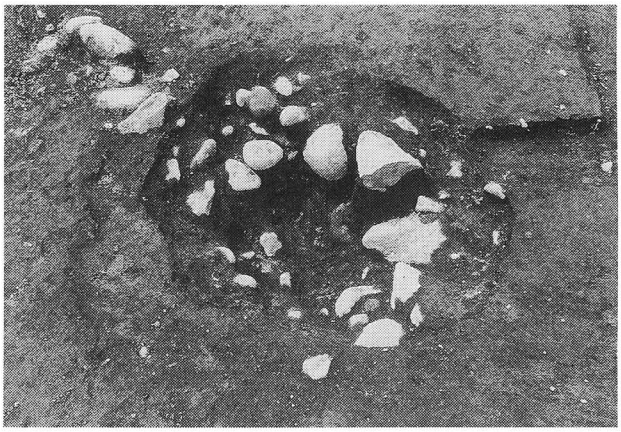
3. 6 号土坑



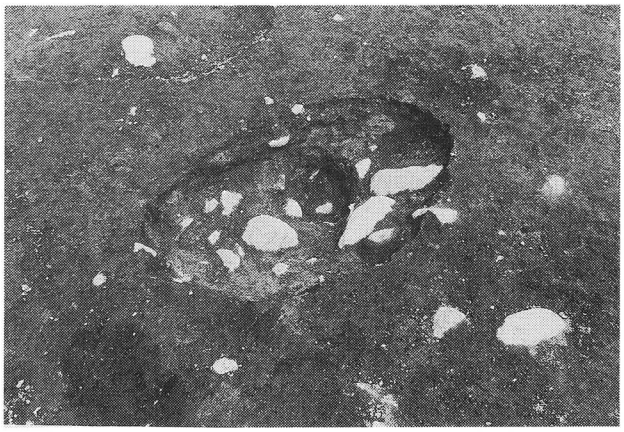
4. 8 号土坑



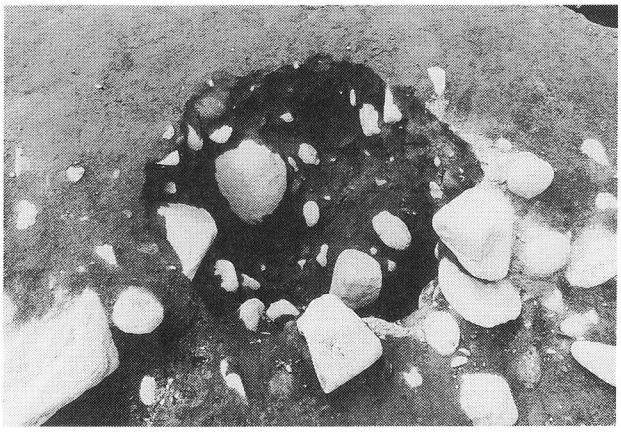
5. 9 号土坑



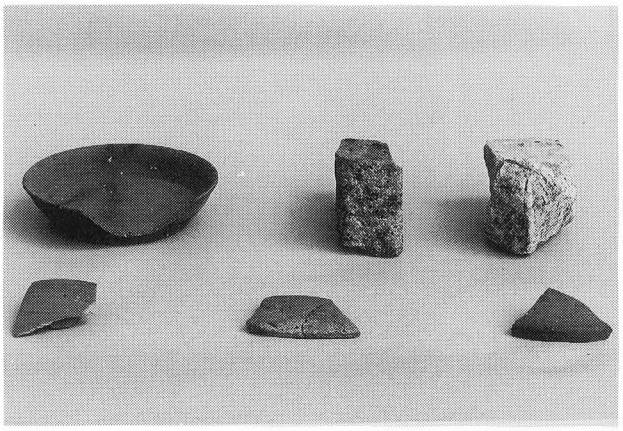
6. 12 号土坑

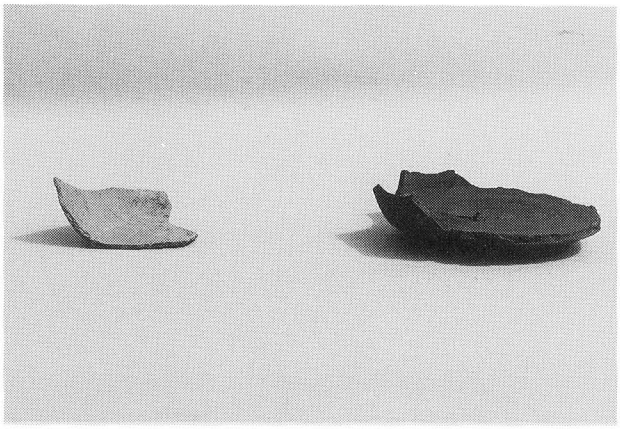


7. 13 号土坑

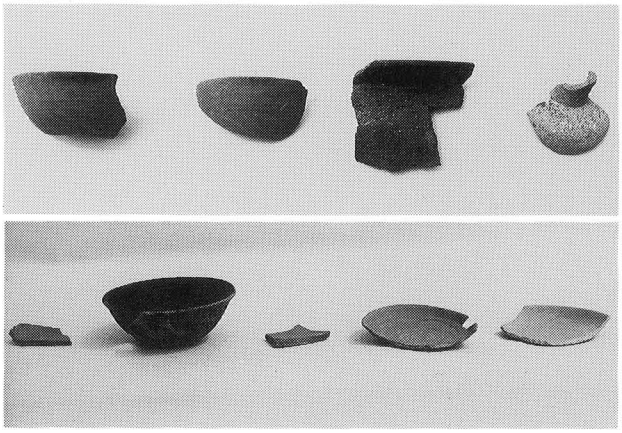


8. 15 号土坑

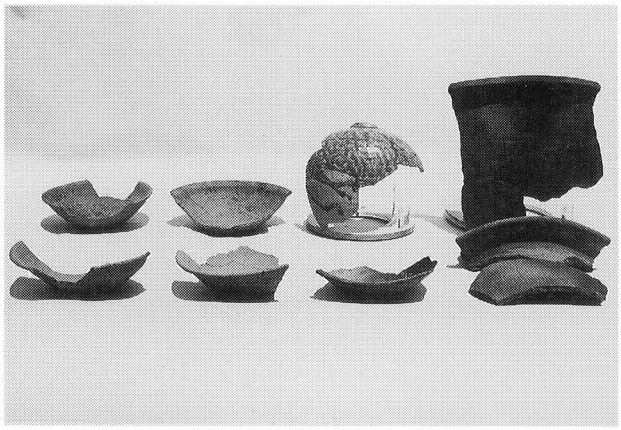




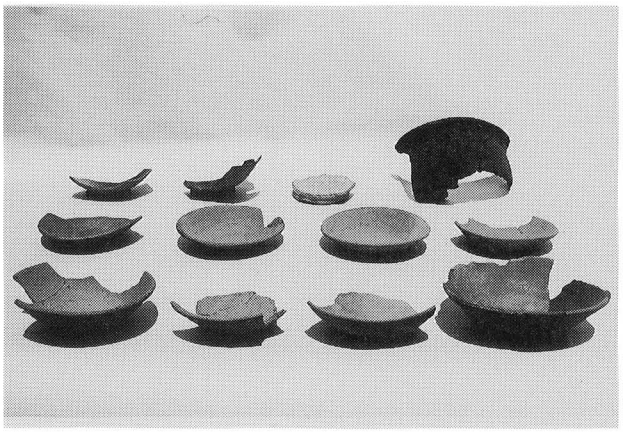
(28 号住)　　1.　8 c 後半～8 c 末葉の遺物　　(27 号住)



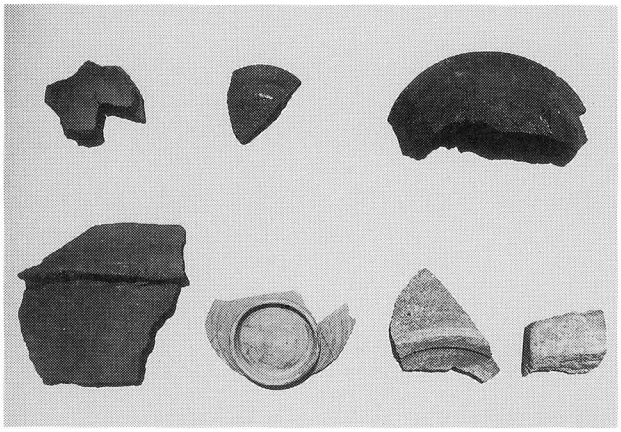
2.　9 c の遺物　　(20・31 号住)



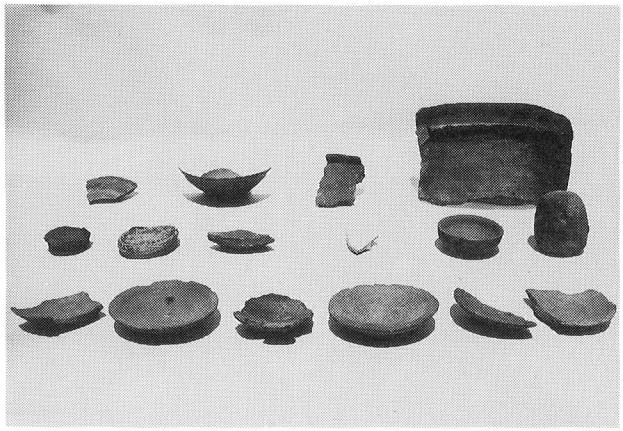
3.　10 c 前半の遺物　　(9・26 号住)



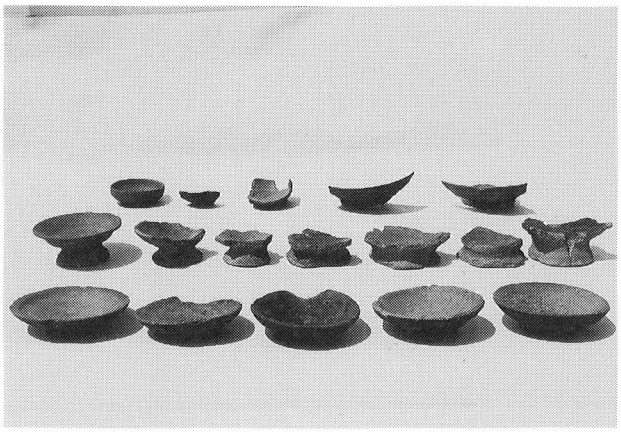
4.　10 c 後半の遺物　　(13・18 号住)



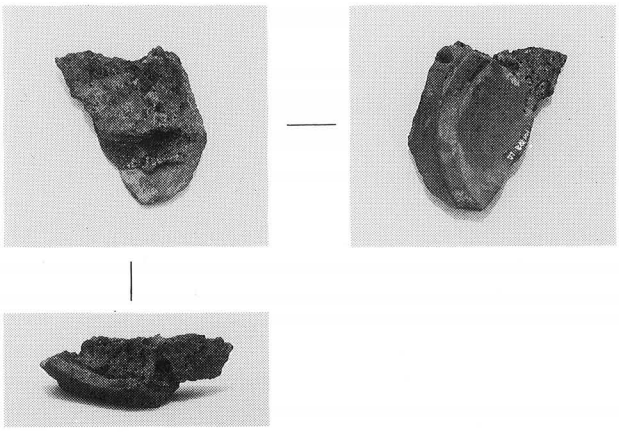
5. 11 c 前半の遺物　　(17 号住)



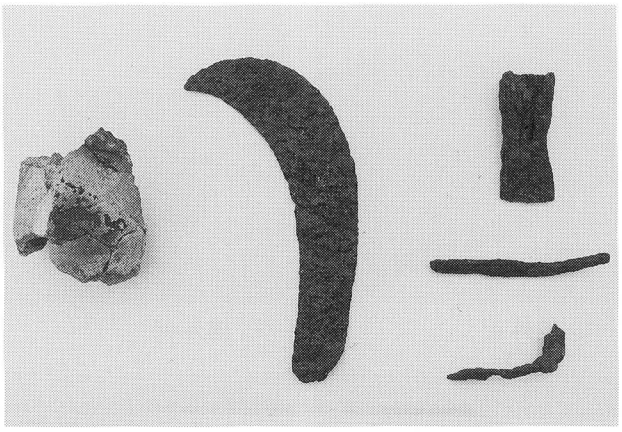
6.　11 c 後半の遺物　　(12 号住)



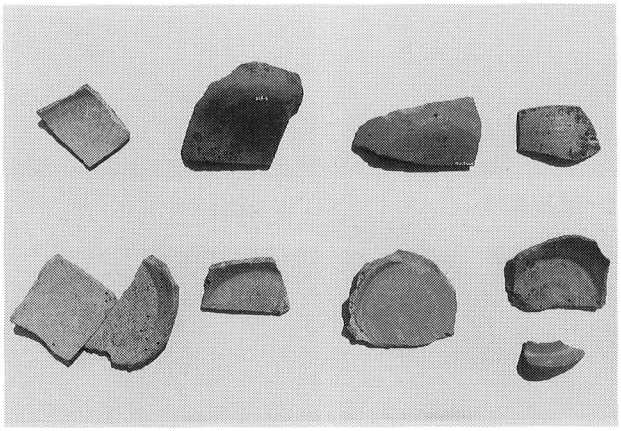
7.　12 c の遺物　　(14・15・19 号住)



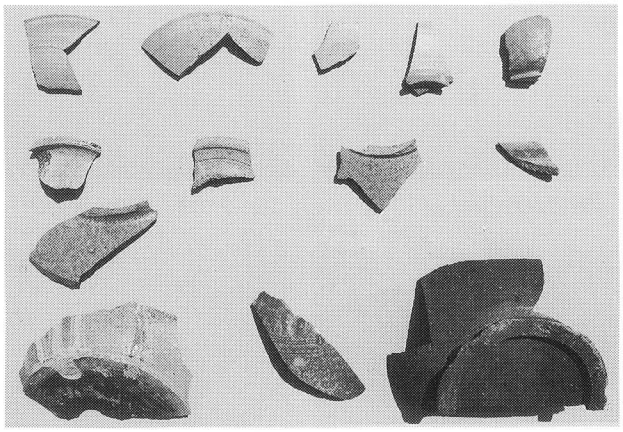
1. 高台杯転用の坩壷片 （3 号住）



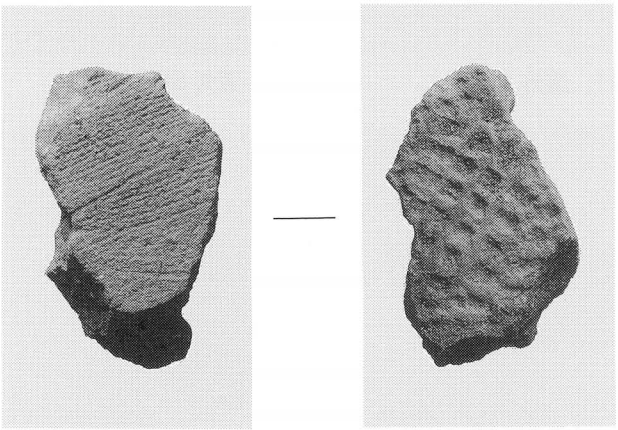
2. 鉄製品と羽口 （25 号住）



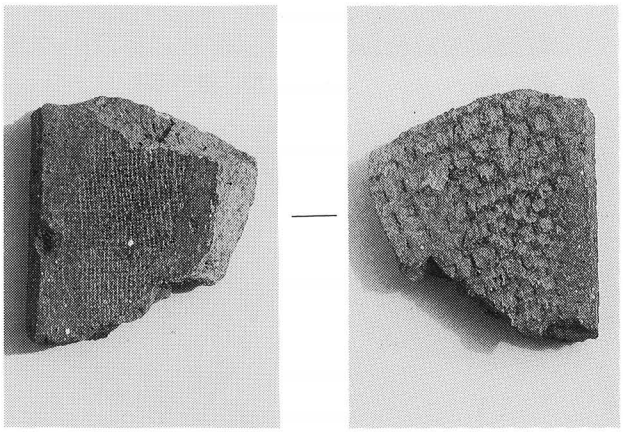
3. 8 c 代の坏 （遺外 1～9）



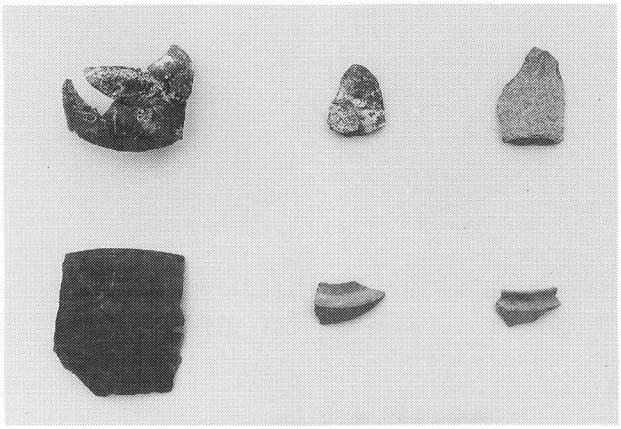
4. 灰釉陶器 （遺外 28～40）



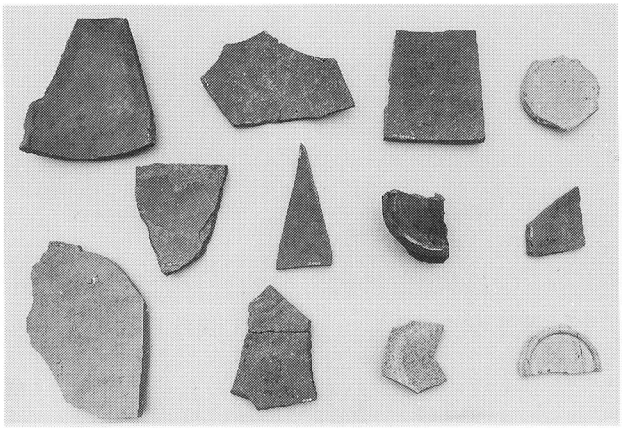
5. 瓦 （遺外 41）



6. 瓦 （遺外 42）

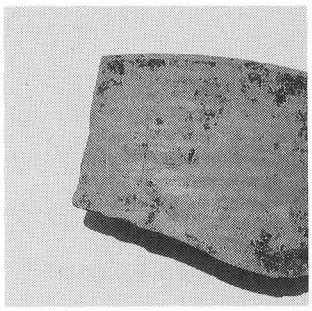


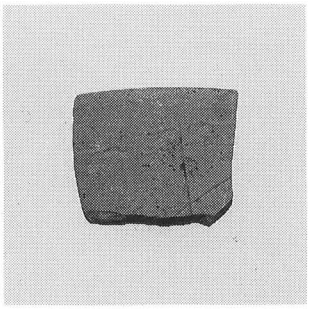
5. 壷 G・鉢・薬壷



6. 遺構内外出土の転用硯

図版 10


1. 遺外 4

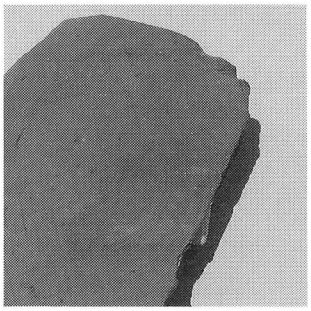

2. 遺外 46

3. 遺外47(焼成前ヘラ書き)

4. 0202

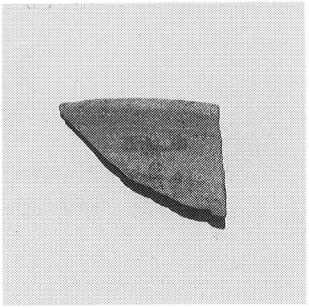
5. 2102

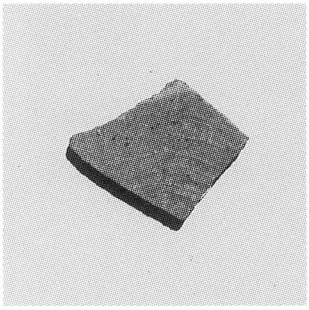
6. 2103

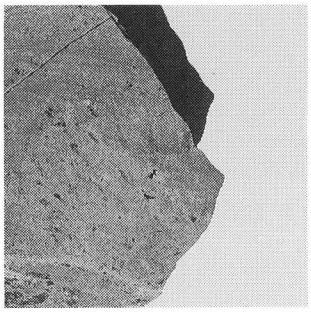

7. 遺外 8

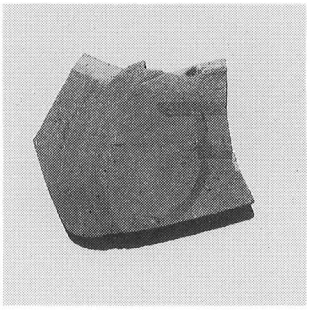
8. 遺外 48

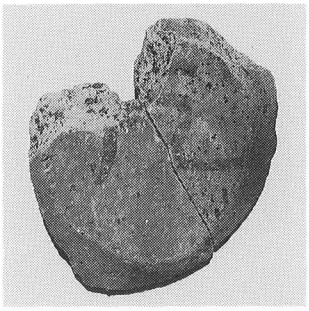
9. 遺外 49

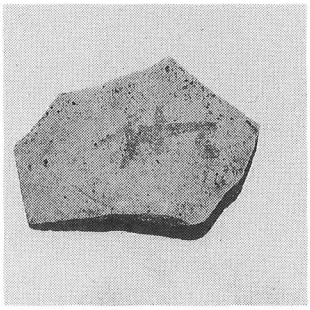

10. 遺外 50

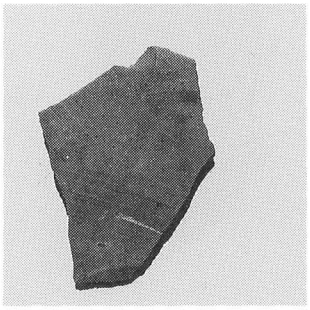

11. 遺外 53

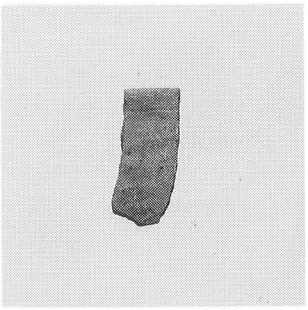

12. 遺外 54

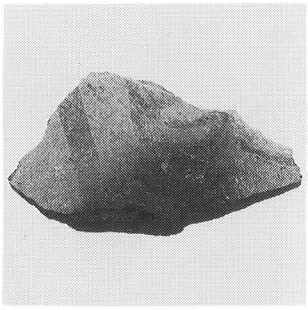

13. 遺外 55

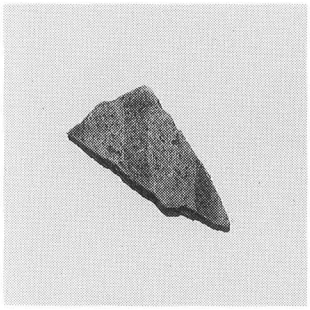

14. 遺外 56

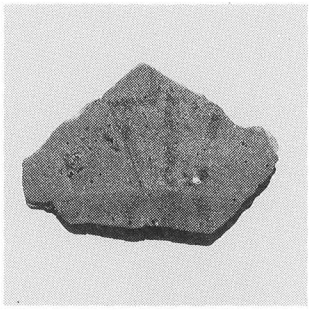

15. 遺外 59


16. 遺外 60


17. 遺外 64


18. 遺外 65


19. 遺外 66


20. 遺外 67

墨書土器

報告書抄録

ふりがな	むらつづきいせき
書名	村続遺跡Ⅰ次
副書名	
巻次	21
シリーズ名	敷島町文化財調査報告書
シリーズ番号	
編著者名	小坂 隆司　　河西 学(第3章)
編集機関	敷島町教育委員会
所在地	〒400-0123 山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020
発行年月日	2004年4月20日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯　東経		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒			
むらつづきいせき 村続遺跡	山梨県 中巨摩郡 敷島町島上 条 351－1 外	193828	43			平成13年 4月9日～ 平成13年 6月8日	320	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
村続遺跡	集落跡	奈良時代 平安時代	住居跡 土坑 ピット	土師器 須恵器 陶磁器 石器	白鳳期の瓦片2点、仏教関連遺物として壺G、鉢形土器、緑釉陶器53片、銅製小仏像の台座などのほか、中国産貿易陶磁器白磁の皿、壺底部片、青白磁の合子片、青磁の碗片、13世紀代の天目茶碗片なども出土。

敷島町文化財調査報告　第21集

村　続　遺　跡　Ⅰ

発行日　2004年(H16)4月20日

発　行　敷島町教育委員会

山梨県中巨摩郡敷島町島上条1020

TEL(055)277－4111

印　刷　㈲協和印刷社